

富士宮市文化財調査報告書第33集

# 富士宮市の遺跡Ⅲ

ワラビ平遺跡

塙本古墳第2次

浅間大社遺跡第5次

発掘調査報告書

2005

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第33集

# 富士宮市の遺跡Ⅲ

ワラビ平遺跡  
塚本古墳第2次  
浅間大社遺跡第5次  
発掘調査報告書

2005

富士宮市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、富士宮市内に所在するワラビ平遺跡、塚本古墳、浅間大社遺跡において富士宮市教育委員会が実施した発掘調査の各報告を富士宮市文化財調査報告書第33集『富士宮市の遺跡Ⅲ』として掲載したものである。

2. ワラビ平遺跡と塚本古墳の発掘調査は、市道拡幅改良工事に先立ち、事業主体者である富士宮市都市整備部道路課より依頼を受けて実施された。浅間大社遺跡の発掘調査は、富士山本宮浅間大社境内地内の消火栓貯水槽埋設工事に先立ち、富士山本宮浅間大社より依頼を受けて実施された。各遺跡の調査対象地(所在地)と、調査の原因・目的は次のとおりである。

・ワラビ平遺跡：富士宮市村山字堀ノ内1556番1～1561番1

　1級市道栗倉石原線改良舗装工事に伴う事前の発掘調査

・塚本古墳：富士宮市野中東町399番地先

　1級市道滝戸野中線改良舗装事業に伴う事前の発掘調査

・浅間大社遺跡：富士宮市宮町1403番

　浅間大社防災施設整備事業に伴う消火栓貯水槽設置箇所の発掘調査

4. ワラビ平遺跡は、平成14年度と15年度の2度に分けて現地の調査を実施し、第1次発掘調査は平成14年10月4日から同12月20日、第2次発掘調査は平成15年5月6日から同6月30日まで行なわれた。塚本古墳の調査は、第2次発掘調査として平成15年12月4日から平成16年1月14日まで行なわれた。浅間大社遺跡の調査は、第5次発掘調査として平成16年10月13日から同11月2日まで行なわれた。

5. 発掘調査は以下の体制で実施した。

<ワラビ平遺跡 第1次>

・調査主体者　富士宮市教育委員会教育長　藤井國利

・調査担当者　富士宮市教育委員会文化課学芸員　渡井英聰

　富士宮市教育委員会文化課嘱託員　小野田晶

　同　佐野恵里

・調査補助員　天野秀男、齊藤之弘、渋谷政男、田中 力、田中 稔、堤 健一、

　村野立巳、渡辺敏雄

・調査作業員　山崎里恵、渡辺修子

・整理作業員　佐藤節子、渡辺麻里

<ワラビ平遺跡 第2次>

・調査主体者　富士宮市教育委員会教育長　藤井國利

・調査担当者　富士宮市教育委員会文化課学芸員　渡井英聰

　富士宮市教育委員会文化課嘱託員　小野田晶

・調査補助員　阿部稔男、勝俣利雄、齊藤之弘、佐藤法男、佐野未芳、依田佐太郎

・調査作業員　渡辺成子、渡辺修子

・整理作業員　渡辺麻里

<塚本古墳 第2次>

・調査主体者　富士宮市教育委員会教育長　大森 衛

・調査担当者　富士宮市教育委員会文化課学芸員　渡井英聰

　富士宮市教育委員会文化課嘱託員　小野田晶

　同　佐野恵里

- ・調査補助員 阿部稔男、勝俣利雄、佐藤法夫、佐野未芳
- ・調査作業員 大平美奈子、川島ひとみ、山崎美美子、山梨隆子
- ・整理作業員 佐藤節子

<浅間大社遺跡 第5次>

- ・調査主体者 富士宮市教育委員会教育長 大森 衛
- ・調査担当者 富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井英智  
富士宮市教育委員会文化課嘱託員 小野田晶  
同 佐野恵里
- ・調査補助員 阿部稔男、勝俣利雄、佐藤法夫、佐野未芳
- ・整理作業員 渡辺麻里

6. ワラビ平遺跡の空中写真撮影と基準点測量および塚本古墳の基準点測量は株式会社フジヤマに委託した。
7. 写真図版に掲載されている写真的撮影は渡井英智、小野田晶が行なった。
8. 石器の石材は、財団法人石の博物館 北垣俊明氏に鑑定していただいた。
9. 本書の執筆と編集は、浅間大社 第5次と塚本古墳 第2次の第II章を渡井英智が担当し、それ以外を小野田晶が担当した。
10. 発掘調査および本書に関わる事務は富士宮市教育委員会文化課文化財係が担当した。
11. 本報告による出土品および記録図面、写真などは富士宮市教育委員会で保管している。
12. ワラビ平遺跡、塚本古墳と浅間大社遺跡の発掘調査に際して、次の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。(順不同、敬称略)  
植松章八、加納俊介、塩川文一、渡辺計吾(故)、渡辺耕一、渡辺高次、村山一区、  
富士山本宮浅間大社、富士宮市都市整備部道路課

## 凡　例

1. 地形図・遺構実測図に記す高度は海拔高度をもって示し、単位はメートル(m)とする。
2. 方位や緯度・経度を表わすための測地基準系は、ワラビ平遺跡と塚本古墳は世界測地系を用い、浅間大社遺跡では日本測地系(測量法改正前)を用いている。
3. 採図で用いられる方位記号は、平面直角座標(8系)に準拠する座標北を示している。
4. 第1~3図と第58図で使用している地図は、富士宮市が国土交通省国土地理院の複製承認「平8. 部公 第64号」を得たものである。
5. 上層説明で記す色調及び遺物観察表に記す色調の観察は『新版標準土色帳』(農林水産省農林水産技術会議事務局)で補って判断している。
6. 遺構・遺物の縮尺についてはそれぞれにスケールを明示し、遺構・遺物の計測で( )は推定値を表す。なお、写真の縮尺は任意である。
7. 本書で用いる遺構の標示は以下のとおりとする。  
S B……建物跡、 S D……溝状遺構、 S K……土坑、  
F P……焼土跡、 P……小穴、ピット、 S X……不明遺構

# 目 次

はじめに	1
ワラビ平遺跡	
第Ⅰ章 遺跡と調査	5
1. 調査の経緯と経過	5
2. 遺跡の位置と環境	7
3. 調査区の名称	10
第Ⅱ章 遺構	17
1. 発見された遺構	17
2. 埋没谷	31
第Ⅲ章 遺物	33
1. 土器	33
2. 石器	45
第Ⅳ章 調査のまとめ	47
塚本古墳 第2次	
第Ⅰ章 発掘調査の概要	53
1. 調査の経緯	53
2. 調査の経過	53
3. 層序	56
第Ⅱ章 周辺の遺跡	59
1. 南部谷戸遺跡	59
2. 月の輪下遺跡	65
第Ⅲ章 遺構と遺物	69
1. 遺構	69
2. 遺物	73
第Ⅳ章 まとめにかえて	75
浅間大社遺跡 第5次	
第Ⅰ章 はじめに	83
1. 調査の経緯	83
2. 地理的環境	84
3. 歴史的環境	85
第Ⅱ章 調査の経過	89
1. 調査の経過	89
2. 調査区の設定	89
3. 層序と地形	91
第Ⅲ章 遺構と遺物	93
1. 遺構	93
2. 遺物	98
第Ⅳ章 まとめ	103
1. 調査の成果	103
2. 遺跡の時代	105
3. おわりに	106
むすびに	107

## 挿 図 目 次

第1図 遺 跡 位 置 図	2	塚本古墳 第2次	
ワラビ平遺跡		第36図 調査位置図	54
第2図 遺 跡 周 辺 図	8	第37図 調査区全体図(2A区)	55
第3図 調 査 位 置 図	9	第38図 調査区土層図	57
第4図 調 査 区 設 定 図	11	第39図 南部谷戸遺跡遺構全体図	60
第5図 調査区全体図(1)	12	第40図 南部谷戸遺跡出土土器実測図(1)	61
第6図 調査区全体図(2)	13	第41図 南部谷戸遺跡出土土器実測図(2)	62
第7図 調査区土層図(1)	14	第42図 南部谷戸遺跡出土土器実測図(3)	63
第8図 調査区土層図(2)	15	第43図 南部谷戸遺跡出土土器実測図(4)	64
第9図 調査区土層図(3)	16	第44図 南部谷戸遺跡出土遺物実測図	64
第10図 SK1、SK2実測図	18	第45図 月の輪下遺跡遺構全体図	66
第11図 SK3、SK4実測図	20	第46図 月の輪下遺跡遺物実測図(1)	67
第12図 SK5、SK6実測図	21	第47図 月の輪下遺跡遺物実測図(2)	68
第13図 SK7、SK8実測図	22	第48図 S X 1 実測図	70
第14図 S K 9 実測図	23	第49図 S B 1 実測図	71
第15図 S D 1 実測図	25	第50図 調査区南東側土層図	72
第16図 S D 2 実測図	26	第51図 出土土器実測図	73
第17図 P 1 ~ 3 実測図	27	第52図 土器出土分布図	74
第18図 P 4 ~ 25 実測図	28	第53図 第1次発掘調査区全体図	75
第19図 P 26 ~ 34 実測図	29	第54図 墳丘断面土層図	76
第20図 P 3 5 実測図	29	第55図 墳丘構築概略図	76
第21図 F P 1 実測図	30	第56図 墳丘構築工程図(1)	78
第22図 F P 2 実測図	31	第57図 墳丘構築工程図(2)	79
第23図 1 B区土器出土状況	32	浅間大社遺跡 第5次	
第24図 土器実測図(1)	34	第58図 遺跡位置図	86
第25図 土器実測図(2)	35	第59図 弥生・古墳時代土器拓影図	87
第26図 土器拓影図(1)	36	第60図 調査位置図	90
第27図 土器拓影図(2)	37	第61図 調査区東壁土層断面図	91
第28図 土器拓影図(3)	39	第62図 調査全体図	92
第29図 土器拓影図(4)	40	第63図 SK1、SK2実測図	93
第30図 土器拓影図(5)	42	第64図 SK3、SX2実測図	94
第31図 土器拓影図(6)	43	第65図 SK4、SK5、SK6実測図	95
第32図 石器実測図(1)	44	第66図 SK4、SK5、SX1実測図	97
第33図 石器実測図(2)	45	第67図 出土遺物(1)	99
第34図 土器出土状況(全体)	48	第68図 出土遺物(2)	100
第35図 土器出土状況(分類別)	49		

## 表 目 次

ワラビ平遺跡		浅間大社遺跡 第5次	
第1表 石器観察表	45	第4表 遺跡地名表	87
第2表 土器分類別出土数	47	第5表 出土遺物観察表	101
塚本古墳 第2次			
第3表 土器観察表	73		

---

## はじめに

---

本書は、富士宮市内に所在するワラビ平遺跡、塙本古墳、浅間大社遺跡の発掘調査報告書で、平成14年度から平成16年度内にあった各種開発行為に伴って実施された埋蔵文化財発掘調査のうち市教育委員会が主体となって調査を行なったものを収録している。

富士宮市は富士山西南麓にあり、北側は富士山頂から西側へ毛無山地～天子山地に隔てられて山梨県に連なり、西側から南側は羽鶴丘陵と富士川を境にして芝川町・富士川町に接している。また、北東の富士山頂から東南側の平野部は富士市と接している。総面積314.81k m<sup>2</sup>で南北に長い市域を有しており、市南部の海拔35mから富士山頂の海拔3,776mまでと非常に大きな標高差をもつことを特徴としている。

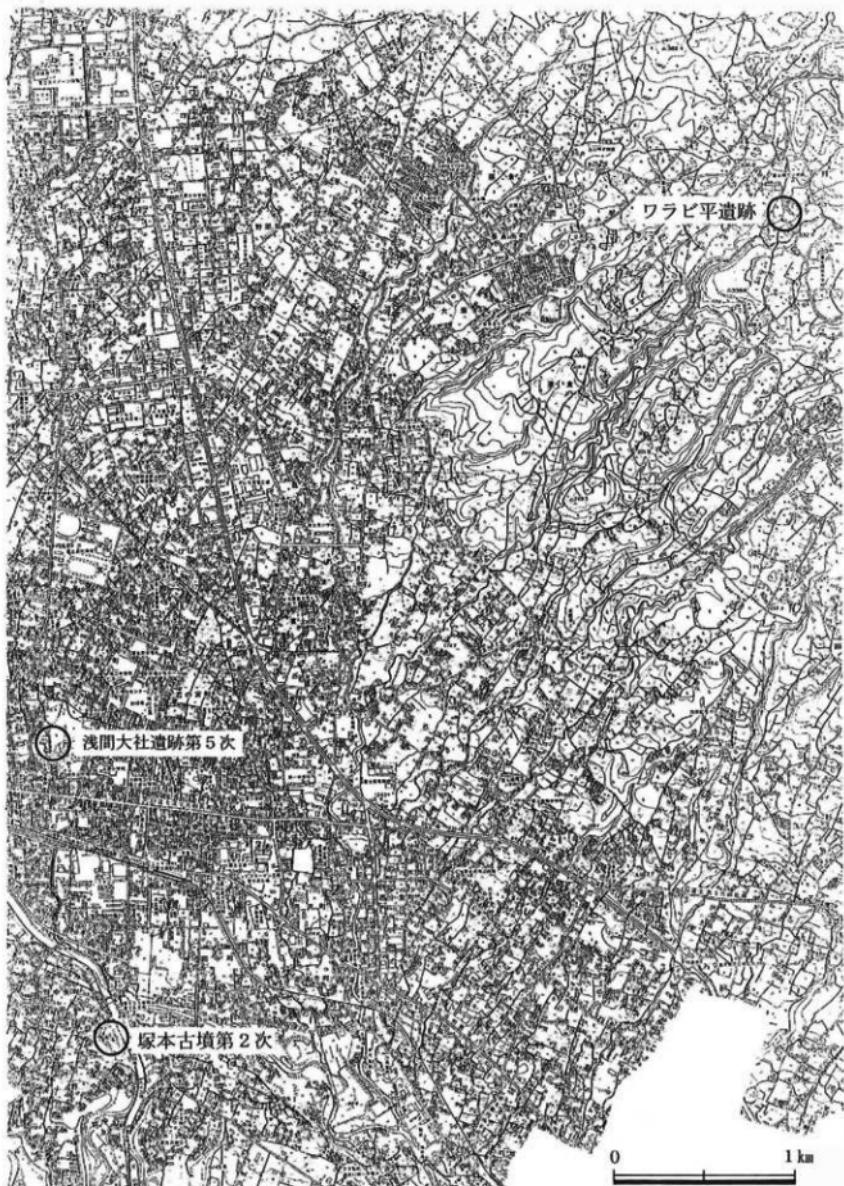
富士宮市の地形は、富士山頂から山麓に向かって緩やかな傾斜が拡がる富士山区域、富士山誕生前から存在する標高1500m級の山々が連なる天子山地から標高300m程度の羽鶴丘陵へと連続する天子山地・羽鶴丘陵区域、富士山西側の大沢崩れから駿河湾へと流下する潤井川と富士川に挟まれ河岸段丘が形成される標高200m前後の丘陵地の星山丘陵区域、これらの丘陵に囲まれるように北から南へ緩やかに傾斜して南端で平坦地となる潤井川沖積地区域と、その自然的な特徴から4区域に分けられる。こうした市内の異なる環境の中に3遺跡はそれぞれ所在している(第1図)。

ワラビ平遺跡は、富士山区域特有の台地を深く抉るような放射谷によって分断・形成された連続する丘陵地帯のうちのひとつ的小規模な丘陵部に展開し、市内有数の遺跡分布地域として知られる富士根地域のなかでも富士山寄りで比較的高所となる標高300m以上の北部に位置している。富士山区域は山頂方向より山裾に向けて、半島状の尾根が長く伸びて台地が存在する、いわゆる舌状台地が形成されたことで、約11,000年前より始まったとされる新富士造山活動期の溶岩流等の噴出物の流入や覆蓋を免れることができた。故にこの舌状台地上に遺跡の分布が認められるが、ワラビ平遺跡も例外ではなく舌状台地上に立地するものと捉えられる。

塙本古墳は、星山丘陵北側で富士山西南麓の末端となる潤井川と接する河岸段丘面で、眼前に潤井川沖積地を臨むことができる標高118mの場所に位置している。星山丘陵の北辺は潤井川沖積地に南北に沿って安居山断層～大宮断層等が走向し、丘陵を隆起させるかたちで大規模な断層崖を形成している。そのため星山丘陵の基底に横たわる古富士集塊質泥流は、新富士火山の溶岩流等の影響をほとんど受けずに、独立した地質形態を保持している。また、この断崖線から分岐するように星山谷といわれる放射谷の痕跡が富士川方向へ南流しており、古墳は、この星山谷に形成された河岸段丘の北端に立地するといえる。

浅間大社遺跡は、駿河一宮として知られる浅間大社の境内地とその周辺に展開する遺跡である。その南側一面は潤井川沖積地として形成された低湿地、北側後背は新富士火山由来の扇状地堆積が展開しており、遺跡はこの両者が接する標高120mの微高地に位置している。そして、沖積地と扇状地の基盤が透水性の異なる地質となることから、その接点が湧水池となり、遺跡周辺は市内有数の豊水地域として知られている。

以上のように本書で扱う3遺跡は異なる特性をもつ環境の中に存在しているといえる。



第1図 遺跡位置図

# ワラビ平遺跡

## 第Ⅰ章 遺跡と調査

### 1. 調査の経緯と経過

「ワラビ平遺跡」という遺跡名の初出は『富士宮市史』上巻のなかで遺跡が紹介されている(植松1971)。加曾利E II式の濃密な散布地とされていたが、昭和48年(1973)の静岡県埋蔵文化財包蔵地調査カード作成にあたっての踏査記録からその名前が見られなくなる。これは、分布遺跡の小字名を再検討する作業のなかで遺跡名を「東谷戸遺跡」に改称したためである。現今の「ワラビ平遺跡」は、平成12年度に富士宮市教育委員会が実施した『富士宮市遺跡地図—第3版—』(富士宮市教委2000)作成における分布調査によって新たに発見された遺跡である。

したがって、ワラビ平遺跡に対する発掘調査は今回がはじめてであり、事前に行なわれた平成13年8月27日の確認調査においては縄文時代中～後期の土器片が検出されている。

本遺跡が発掘調査に至った原因は、1級市道粟倉石原線改良舗装工事に伴うもので、施工される道路部分で遺跡範囲にかかる箇所を対象に実施された。そして、調査対象地の工期が2ヵ年で計画されていたため、これに先行する発掘調査も拡張幅分約800m<sup>2</sup>を対象とする第1次発掘調査と、現況が道路面となる箇所約180m<sup>2</sup>を対象とする第2次発掘調査に分けられて実施された。

#### a. 第1次発掘調査

調査前の状況は社領公会堂敷地と道路、畑地であった。道路と畑地の境界には30～50cm大の石が堤防状に積み重ねられており、調査の事前段階にその除去作業が必要であった。また、調査区の南側の畑地では柿の木が植えられており、そのうちの調査区内にある数本の伐採処理が行なわれた。

第1次発掘調査は、事前準備を平成14年10月4日より始めた。付近は大型車両の往来が激しいこともあり、安全対策として調査区界沿いに防護フェンスと柵を設置し、雨水等の流入と壁面の崩落を防ぐために土嚢の積み上げによる補強を施した。

調査対象面積約800m<sup>2</sup>のうち、大部分を占める畑地が深さ50～95cmの耕作土に覆われていることから、表土除去は省力化をはかるため重機で行ない、大沢ラビリ層の表面を確認したところで、その掘削を止めた。準備の整った10月8日より発掘調査は開始された。

もとより起伏のある地形であり、当地域の標準的な土層の堆積がみられるのは調査区中央付近の谷となっている箇所一帯が今回の調査における主要箇所とみて、また、調査区の形状が狭長地であるため、その調査区の中央から端に向かって各層序ごとに掘削をし、遺構確認と遺物取り上げを行なうこととした。調査区の南端にあたる柿の木があった場所は公会堂前の舗装された広場と農道を挟んで飛地となっており、土層の残存状態も比較的良好であったため同時進行で発掘調査を行なうこととした。

調査では、下層の状況をより把握するため調査区の西側壁沿いにサブトレントを設定し、グリッドの掘削に先行して確認をしていった。遺物は基本的に各グリッドで層序ごとにま

とめて採取し、遺構絡み及び集中的な分布がみられる箇所や、例外的な層で出土した場合のみ詳細を記録して検出を行なった。

調査区の掘削可能箇所ほぼ全域を無遺物となるローム層まで掘削し終えてから、12月11日にラジコンヘリコプターによる発掘調査区全体の空中撮影をし、そのあと調査区の地形測量も行なった。

公会堂前の舗装箇所は、2本のトレーナーを設定して確認を行なった。また、調査区の北端は、急峻な谷に岩石の積み上げと非常に厚い盛土が施された箇所であるため、掘削は重機で対応し、比高差4mちかくに及ぶ地形の落ち込みを確認するに止まつた。

また、南側調査区でも、縄文時代遺物包含層を完掘し終えたところで、念のためサブトレーナーでローム層まで掘削したところ、下層からの遺物の出土が確認されなかつたことから調査を終えている。

第1次発掘調査は、現地の撤収作業を含めて12月20日に終了している。

#### b. 第2次発掘調査

第1次発掘調査区が道路拡幅分であったのに対し、その東側部分にあたる従来の道路部分である箇所のうち、歩道部分を除いた約250m<sup>2</sup>を第2次発掘調査の対象地とした。調査箇所は3本のトレーナー状の調査区を設定し、北側から2A→2B→2Cと名付けた。

平成15年5月6日より事前の準備作業を開始し、まずは道路面のアスファルトを調査区ごとに切断し、舗装面と碎石の除去を重機で対応し、それ以降の掘削を人力により行なうこととした。また、第1次発掘調査と同様に、安全のため防護フェンスを設置した。

発掘調査に取り掛かったのは5月9日からで、一番北側の2A区から行なうこととした。第1次発掘調査の際に、当遺跡の標準的な層序を把握しているため、各時代遺物包含層で慎重な発掘作業を行なった結果、縄文時代中期前半の土器群の検出が作業の主な工程となつた。包含層掘削後は遺構を探すための精査を行ない、遺構の有無を確認したところでローム層まで掘削した。その後、地形測量と撮影を行ない、調査中の廃土置き場にするため2A区は埋め戻された。

つづいて6月4日から2B区、6月9日から2C区の調査に入った。2B区は北側の約半分は表土直下に削平されたスコリア層が露出するものの、南側においては2A区と同様に縄文時代中期の遺物包含層が堆積する箇所が確認できたことから、包含層掘削と遺物の取り上げが主要な工程となつたが、2C区においては、後世の土地改造によって本来の地形を失つておらず、表土直下でローム層やスコリア層が調査区全体で露出てしまつてゐるため、遺構および遺物等を確認することが出来る状態ではなかつた。

よつて2B区での調査が主体となり、包含層の掘削と遺構確認を進めてきたが、調査区南端部が深く急峻な谷地形となって落ち込むため、その地点で側壁の十分な安全を確保できる1.8m程度まで掘削を続けることにした。

現地調査は6月中旬頃に雨天による中断が続いたが、6月26日に2B区と2C区の地形測量と撮影を行ない、6月30日に撤収が完了し、現地での作業を終了した。

資料の整理と報告書の作成は、富士宮市教育委員会文化課埋蔵文化財整理室で行ない、本報告書の刊行を以つて調査は終了している。

## 2. 遺跡の位置と環境

### a. 地理的環境と歴史的環境

富士宮市の東北部にある富士根北地区には、市立富士根北小学校や同富士根北中学校周辺の広範囲に亘って複数の縄文時代の遺跡が所在している（第2図）。

ワラビ平遺跡(1)は、社領遺跡(2)と狭い谷を挟んで隣接する縄文時代の遺跡で、330m程度の標高を示すが、南北でやや比高差があり、各地点で景観を違えている。この高所の山間地特有の起伏に富んだ地形環境が、現状での遺跡範囲の認定を困難なものにしている。一段高い北側の緩斜面地および平坦地には中村谷戸遺跡(3)、社領西遺跡(4)、社領東遺跡(5)が所在している。これらの遺跡の東側には村山浅間神社付近を水源とする大沢川(村山沢)が流れおり、ワラビ平遺跡は大沢川とその支流となる小規模な沢に開析された舌状台地の先端に位置していると捉えられる。そして、大沢川に接する崖岸は15m以上の比高差を有しており、まだ深い谷地形を見ることができる。今回調査した箇所（第3図）は、その先端に近い南西向きの緩斜面地で、南北方向に起伏を伴っている。

さらに、大沢川を挟んで南側の比較的低い丘陵地帯には石原遺跡(6)、松葉遺跡(7)、東谷戸遺跡(8)、地図からは外れるが、やや離れて西側には稻干場遺跡（富士宮市教委1991）が所在している。

この周辺地域の遺跡としての認知は、旧『静岡縣史』（静岡県1930）に出てくる「栗倉社領」において土器、石器、磨製石斧、黒曜石片が発見されたと記載されて以来となる。その時期設定は、縄文時代中期中葉の勝坂式期から後期前葉の堀之内式期までとされており、平成2年度に実施された稻干場遺跡の発掘調査において、撚糸文系土器や尖底土器の出土にみる縄文時代早期中～後葉と、勝坂式や曾利式土器の出土を主体とした縄文時代中期初頭～後期前葉の2つの画期が認められ、さらに時代的な幅をもたせた成果を得ている。

これにより当地区に縄文時代の遺跡が分布することは明らかとなり、平成12年度に富士宮市教育委員会で実施した分布調査によって、ワラビ平遺跡、社領遺跡、中村谷戸遺跡が新たに認められ、各遺跡の時代的な部分はまだ明確にされていないものの、その空間的広がりは、高所に展開する1～5遺跡とその南側に展開する稻干場遺跡や6～8遺跡を併せた縄文時代中期及び後期の遺跡分布地域として把握できるようになった。

### b. 層序

本調査区でみられる土層は、富士根地域の標準的層序を反映した状況を示している。上層の名称は過去に調査された遺跡における報告等で用いられたものに準じている。

しかし、調査区周辺は北から南への傾斜と東西方向に連続した起伏がある地形条件により、土層堆積が流動性に富んでおり、調査区内でも全体的にそれが反映され、確認地点によって堆積内容に差が生じているため、第1次発掘調査区の南西側（谷側）のセクション（第7・8図）と第2次発掘調査の各部分（第9図）を示し、各層の特徴を記載しておく。

I 表 土 層 耕作土または道路の基礎で、客土が主体となる層。1A区や2C区からは近現代の陶磁器片が大量に出土する箇所がある。

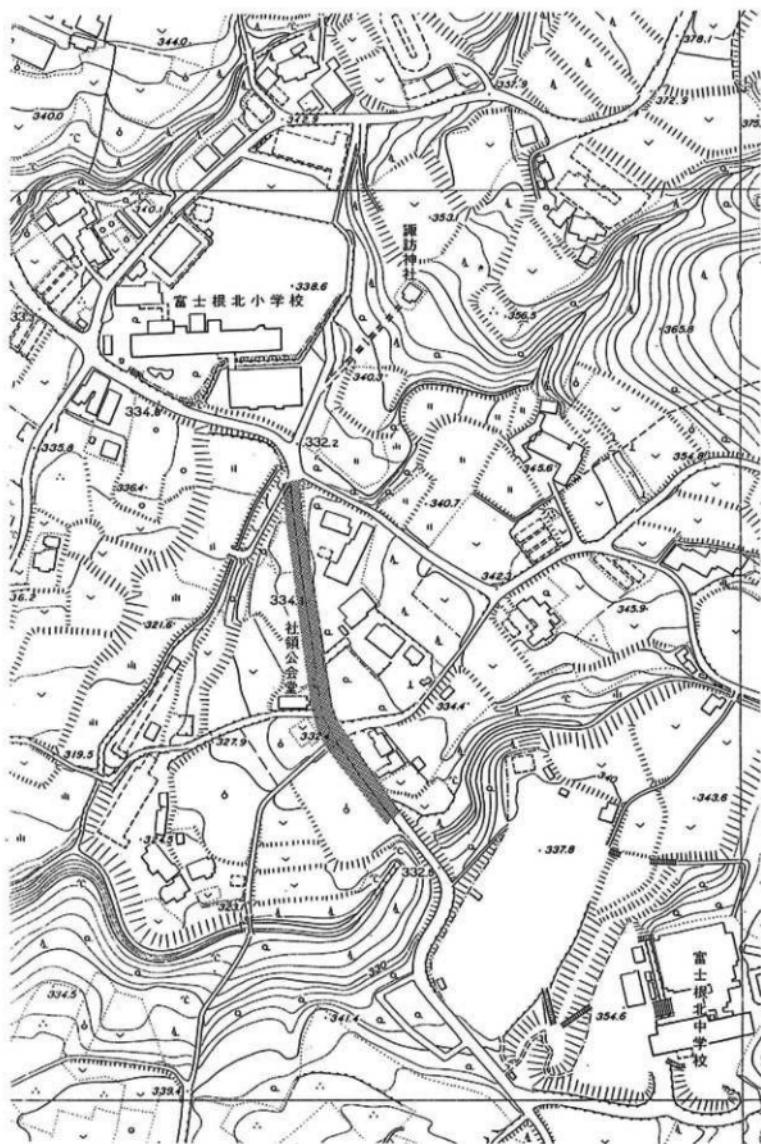
a 黒褐色土 スコリアブロック・ロームブロック・小礫を含む。

b 黒褐色土 極小～小粒スコリア（ $\phi$ 0.5～2.0mm）をわずかに含む。



1 ワラビ平遺跡    2 社領遺跡    3 中村谷戸遺跡    4 社領西遺跡  
5 社領東遺跡    6 石原遺跡    7 松葉遺跡    8 東谷戸遺跡

第2図 遺跡周辺図



第3図 調査位置図

II 大沢ラビリ層 富士山噴火によって約3000年前に降下した火山噴出物層で、平均して1～3mm程度の橙色スコリアによって構成される層。弥生・古墳時代の遺構確認面とされる。今回の調査では肉眼による観察から5つに分層ができる。

- a 褐色土 極小～小粒スコリアが濃密である。
- b 明赤褐色土 極小～中粒スコリア ( $\phi 0.5\sim 5.0\text{mm}$ ) が非常に濃密で乾燥後の白色化も著しい。
- c 明赤褐色土 II b 層に似るが、極小～小粒スコリア ( $\phi 0.5\sim 2.0\text{mm}$ ) がほぼ全体を占めており、砂粒状で崩れやすい。
- d 暗赤褐色土 極小～小粒スコリアが非常に濃密。II 層のなかでは比較的乾燥が緩やかである。
- e 赤褐色土 他よりやや赤味がかった極小～小粒スコリアが全体によぶ。

III クロボク層 黒色の強い土層帶で、白色の小粒子が散在している。この粒子はカワゴ平バミスと思われ、噴出時期は約3200年前とされる（増島2003）。漸移帶は縄文時代後～晩期の遺物包含層であるが、浮動した中期の遺物も検出されることがある。

- a 黒色土 中粒スコリア ( $\phi 2.0\sim 5.0\text{mm}$ ) と小礫を含む。
- b 暗褐色土 IV 層との漸移層。中粒スコリアが増量する。富士宮市上条に所在する千居遺跡の発掘調査で実験された<sup>14</sup>C年代測定によるとB.C. 1420±180年という年代が与えられている（江坂1975）。

IV 栗色土層 本地域の縄文時代の鍵層であり、縄文時代前期～中期にかけての遺物を包含する。

- a 褐色土 III b 層と比して明るい。
- b にぶい黄褐色土 中粒スコリアをわずかに含む。
- c 黄褐色土 IV b 層よりスコリア量減る。

V 極暗褐色土層 富士山東麓でみられる富士黒土層に相当する土層帶。IV 層下部からこの層にかけて縄文時代早期～前期の遺物を包含する。

- a 極暗褐色土 IV 層との漸移層にあたる。
- b 黒褐色土 中粒スコリアを V a 層より多く含む。

VI 橙色土層 スコリアの混入度合いに斑があり、部分的に赤色にちかくなる。当地域において、この層からの遺物・遺構の確認例はない。

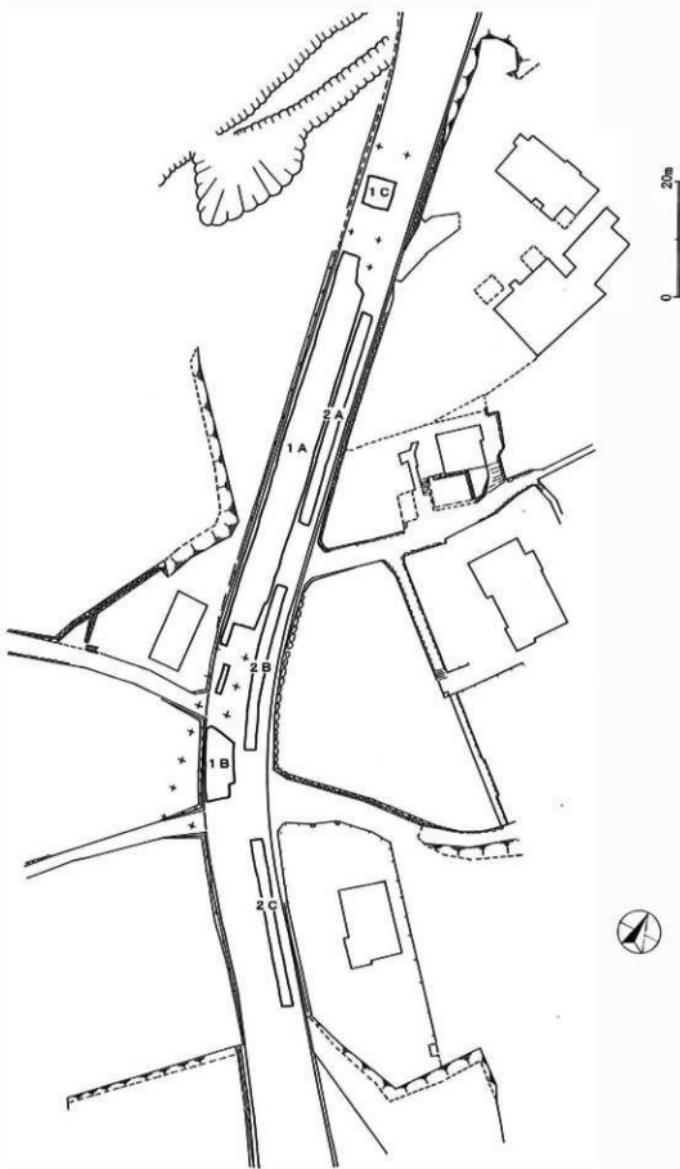
- a 暗赤褐色土 橙色ブロックを多量に含むため、やや明るい色調に見える。

VII ローム層 a 黄褐色ローム質土 粘性に富んだローム質の層。  
スコリア層 b 黄褐色砂質土 VII a 層に比べ粘性が無くなり、砂質となる。

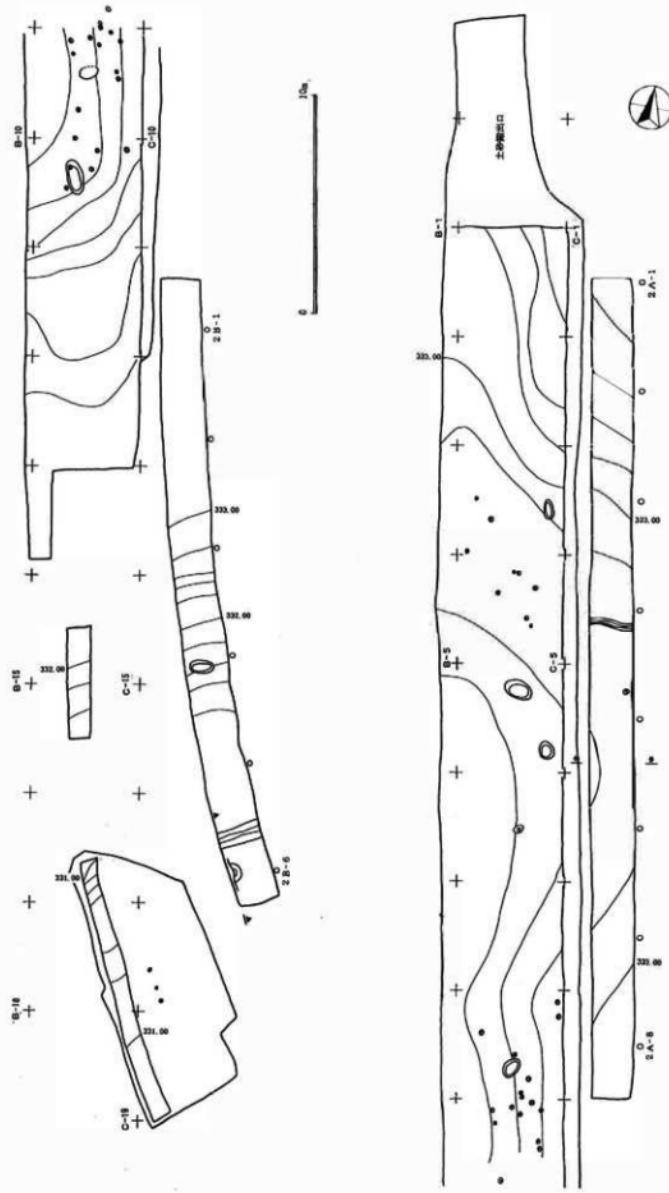
### 3. 調査区の名称

第1次発掘調査区は大きく3つに分けられる。北側を1C、中央を1A、南側を1Bとする。また、第2次発掘調査は3本のトレンチ状の調査区を設定し、北側から2A→2B→2Cと名付けた（第4・5・6図）。

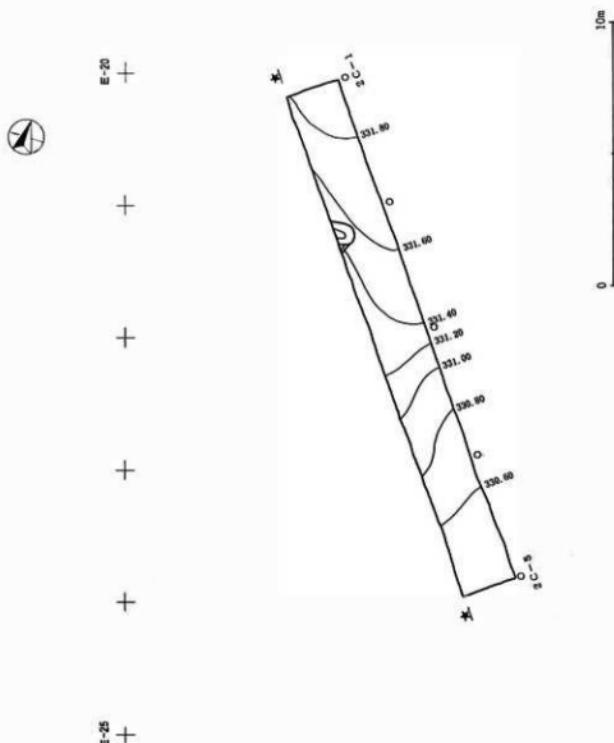
第4図 調査区設定図



ワラビ平遺跡



第5図 調査区全体図(1)



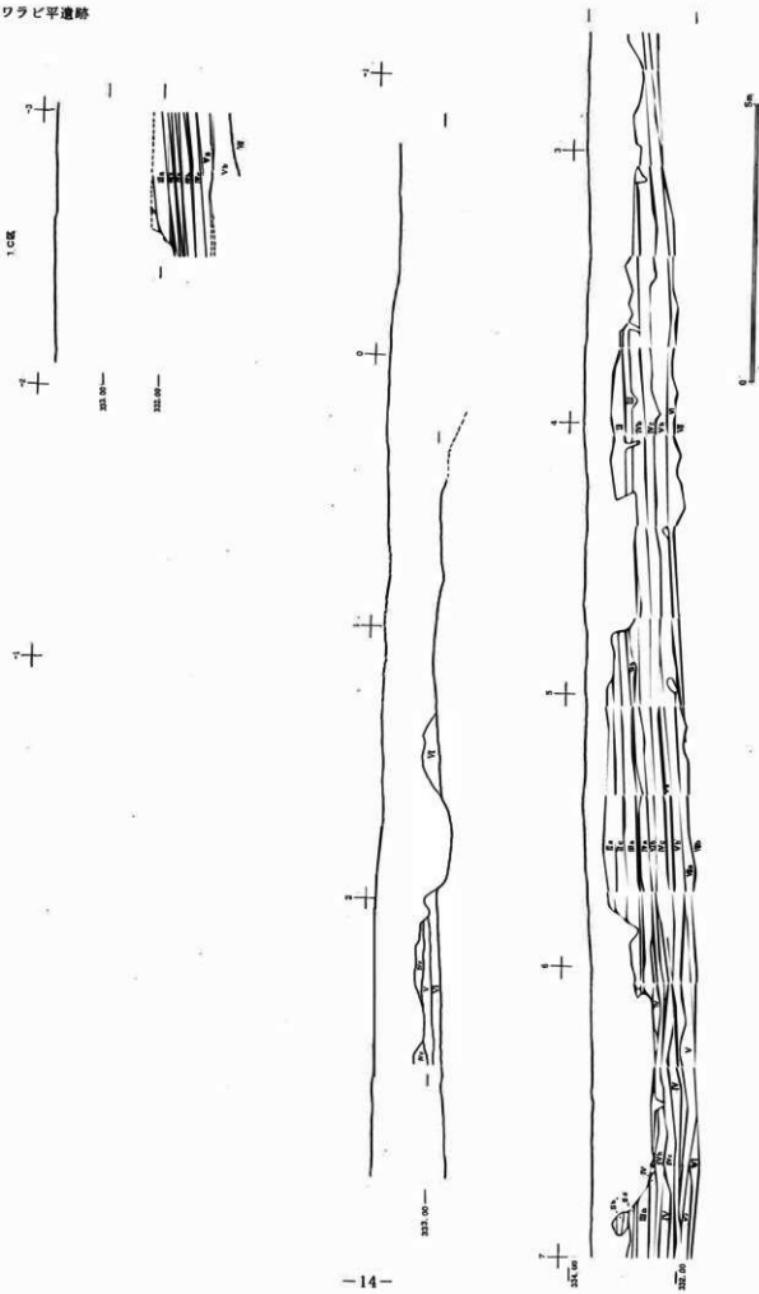
第6図 調査区全体図(2)

第1次発掘調査区(1 A、1 B、1 C)には南北に延ばしたN—7.5°—Wのラインを基準に $5 \times 5$ mのグリッドを設定し、北から南に順番に算用数字を用いて設置した杭の番号とし、そのグリッド内の北西方向にある交点をグリッド名とした。第2次発掘調査区は各調査区に任意の起点を設定し、その地点から北方向から南方向へ調査区に沿って $5$ mおきに2 A-1、2 A-2、2 A-3…とポイントを設定し、遺構・遺物の検出時の目安とした。

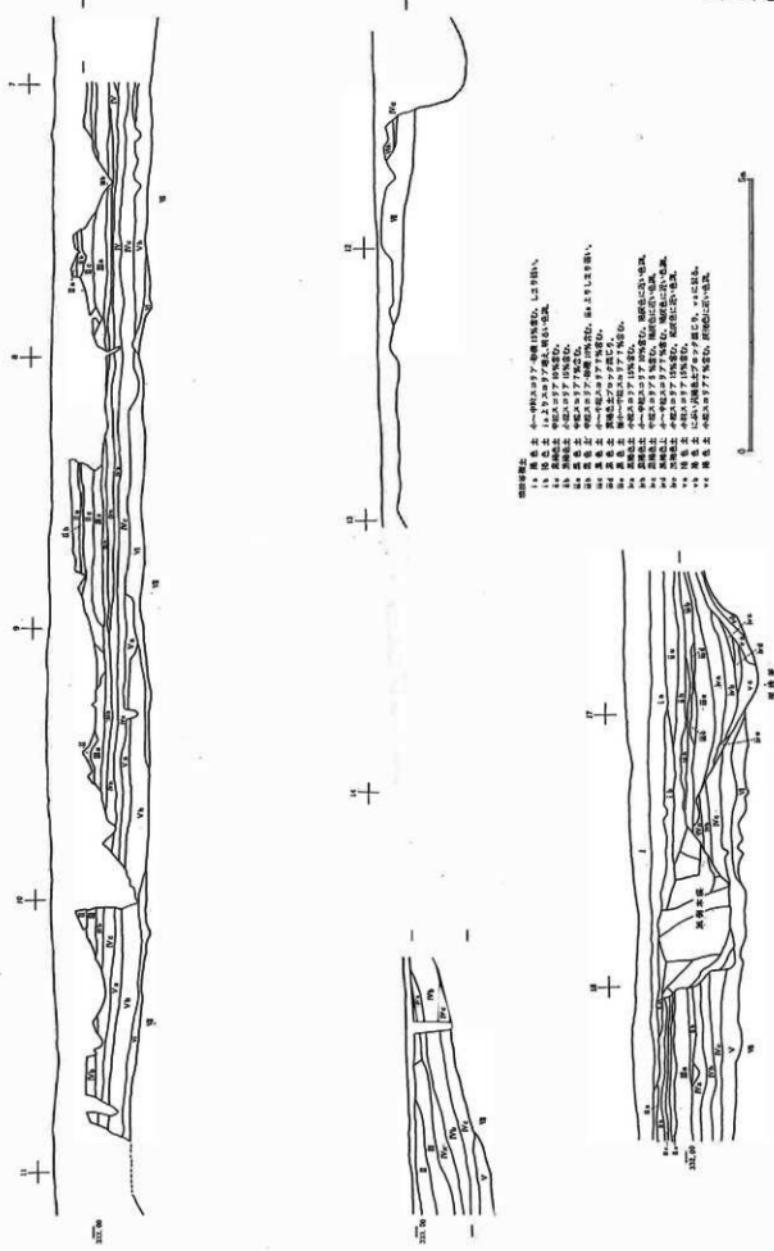
## &lt;文献&gt;

- 植松章八1971「千居遺跡や月の輪平遺跡 一ふるさと富士宮のあけぼの一」『富士宮市史 上巻』富士宮市  
江坂輝弥1975「カーボン14の測定による千居遺跡の年代について」『千居』加藤学園考古学研究所  
静岡県1930『静岡縣史 第一卷』  
富士宮市教育委員会1991『福音場遺跡』  
富士宮市教育委員会2000『富士宮市遺跡地図 第3版』  
増島淳2003「大鹿塗遺跡・塙B遺跡に堆積するテフラについて」『大鹿塗遺跡・塙B遺跡』芝川町教育委員会

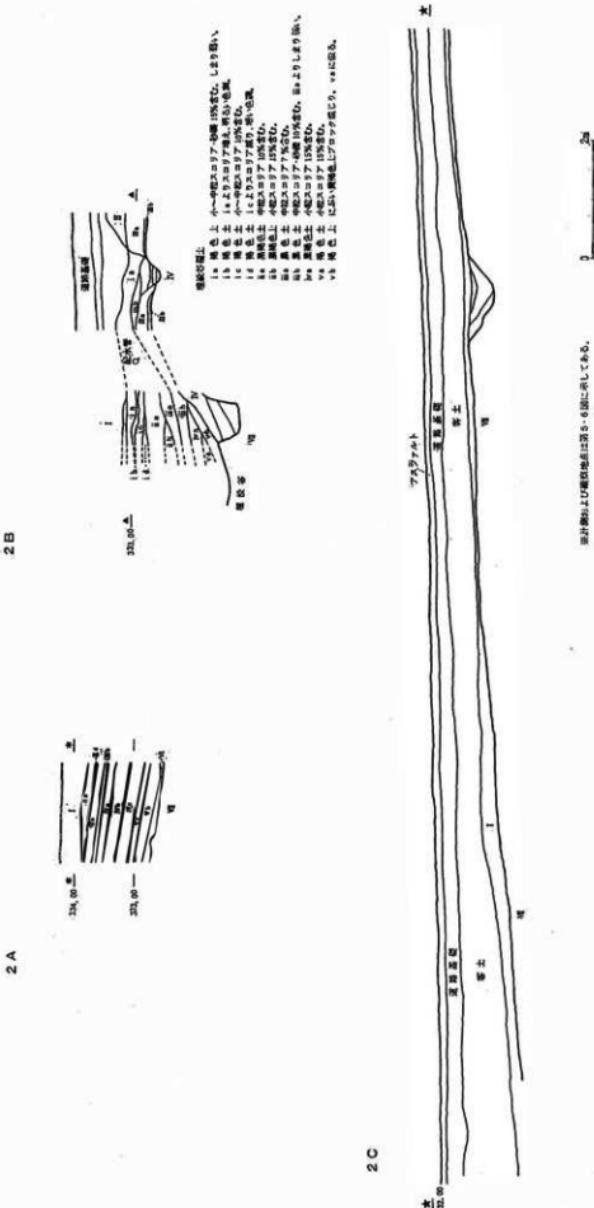
ワラビ平遺跡



第7図 調査区土層図(1)



### 第8图 调查区土层图(2)



第9图 调查区土层图(3)

## 第Ⅱ章 遺構

### 1. 発見された遺構

本遺跡では、第1次発掘調査と第2次発掘調査をあわせて、土坑9基、溝状遺構2条、小ピット35基、焼土跡2基が検出された（第5・6図）。

遺構の多くはIV層において確認され、これまでの当市が実施してきた調査の成果では本遺跡IV層と同じ土層である暗褐色土層上で確認される遺構は、縄文時代中期としてその年代が取り扱われていることから、当該期の遺構としてみることができる。土坑は全体的にみて標高332.40～332.60mのコンターライン付近に集中してつくられているようである。谷へ向かって延長する溝状遺構は、第2次発掘調査において確認されているが、第1次発掘調査区では、後世の耕作等による搅乱によって消失したものとみられる。小ピットは顕著に集中する箇所が2か所あり、これらの並びや組合せを考えた場合その多くは不明であるが、なかにはP1-P2-P3、P22-P23-P24-P25のように横列状として捉えることができるものがある。焼土跡は小規模であるが、FP1では周辺に土器が分布しており住居跡等の遺構の存在を窺わせるものとなっている。

以下、個々の遺構について述べたい。

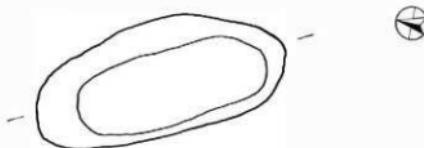
#### a. 土坑

S K 1（第10図）1A区B-10杭の南東付近に位置し、南から北へ下る傾斜地で若干傾斜が緩く変化した箇所のIV層において確認される。平面形は長径163cm、短径74cmの長い梢円形を呈している。断面形は緩やかな舟底状で、確認面より深さ34cmを測る。基底面に目立った痕跡はないが、南側へ深く掘り込まれている。覆土は側面に遺構壁体よりスコリアを多く含む黒褐色土が堆積し、底部から中位まではスコリアとブロック状のにぶい黄褐色土を含む褐色土があり、その上層はスコリアをさらに多く含んだ明褐色土である。堆積する1・2層はほぼ平坦を為すことから、人為的に土を充填したものとみられる。遺物の出土はなかった。

S K 2（第10図）1A区C-9杭北西に位置し、東から西へ下る傾斜面のIV層において確認される。平面形は長径96cm、短径64cmの梢円形を呈している。断面形は底部から壁面の立ち上がりが比較的しっかりした平底の鉢状で、確認面より深さ34cmを測る。基底面に目立った痕跡はないが、北西側へ若干深く掘り込まれている。覆土は基底部にスコリアを少量含んだ黒褐色土が堆積し、内部は明褐色土ブロックの混入の度合いによって上層に従い暗赤褐色から赤褐色へと明るい色調となる。これら3層の堆積状況から、人為的に掘り込まれた後に、埋め戻されたものであるとみられる。遺物の出土はなかった。

S K 3（第11図）1A区C-6杭北東付近に位置し、東から西へ下る傾斜面が緩やかになった箇所のIV層において確認される。平面形は長径84cm、短径66cmの梢円形を呈している。断面形は底部から壁面がやや外反してしっかりと立ち上がる平底の鉢状で、確認面より深さ55cmを測る。基底面は南側をやや掘り込んであるが、上から見てしっかりした梢円形を呈している。覆土は底部に黒褐色土が堆積し、中位に暗褐色土があり、その上はにぶい黄

SK 1



- 1 明褐色土 スコリア 20%含む。  
2 棕色土 にぶい黄褐色土ブロック混じり。  
スコリア 15%含む。  
3 黒褐色土 造構壁体に似る。



B-10

SK 2

C-9



- 1 赤褐色土 スコリア 10%強含む。しまり強い。  
明褐色土ブロック混じり。  
2 喙赤褐色土 黒色土混じり。スコリア 10%含む。  
1に比べしまり弱い。  
3 黒褐色土 スコリア 5%弱含む。暗赤褐色に近い色調。



第10図 SK 1、SK 2 実測図

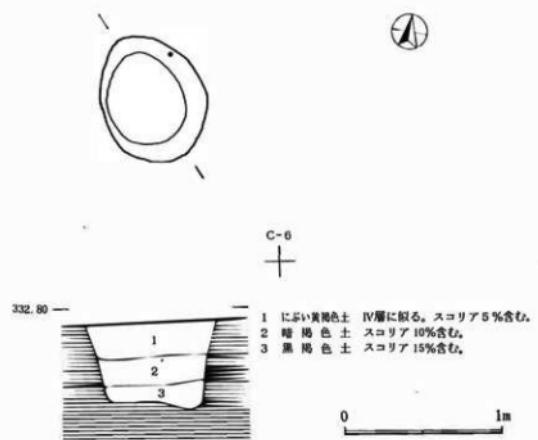
褐色土となる。スコリアは下層に従って混入の度合いを増している。3層ともブロックや礫の混入がなく、人為的に選別した土を充填したものとみられる。遺物の出土はなかった。SK4(第11図)1A区B-5～C-5中間付近でSK3から北西へ2mほど離れて位置し、北東から南西へ下る傾斜面が緩やかな箇所のIV層において確認される。平面形は長径125cm、短径80cmの梢円形を呈している。断面形は底部から壁面がしっかりと立ち上がる平底の鉢状で、確認面より深さ56cmを測る。立ち上がりは南東側の壁面のほうが垂直にちかくなっている。基底面はやや凹凸がみられるが、比較的の平坦に整えられているようである。覆土は下位2層がSK3と同じく黒褐色土と暗褐色土の組合せであるが、基盤となる面の傾斜の低いほうへ土が片寄って堆積しているため、南東から北西へ下った傾斜で3・4層が堆積している。その上層もSK3の1層に対応するものであるが、北西側に明褐色土ブロック混じりの同質の土が入り込んでいる。人為的な埋め戻しによる堆積状況であるとみられる。遺物の出土はなかった。

SK5(第12図)1A区C-4南側に位置し、断面でのみ確認されるが、北東から南西へ下る傾斜地でテラス状になった比較的の平坦な箇所にある。V層に掘り込まれていることから、縄文時代中期の遺物包含層直下に掘り込まれていることから当該期の遺構である。平面形は推定で長径135cm、深さ36cmを測り、断面形は舟底状の落ち込みとして認識できる。覆土は底部にスコリアをわずかに含んだ黒褐色土と黒色土ブロックを含んだ黄褐色土が堆積し、スコリアの混入度合いが異なる2層にぶい黄褐色土が同一方向に傾斜して堆積している様子が窺える。下層に従いスコリアの量が増している。層は南方向からの流れ込み状に堆積しているが、不自然であるため人為的に埋め戻されたものであると考えられる。遺物の出土はなかった。

SK6(第12図)1A区C-4北側に位置し、北から南へ下る緩やかな傾斜面となる箇所のIV層において確認される。平面形は長径88cm、短径37cmの不整梢円形を呈しているが、基底面はしっかりと梢円形を呈している。断面形は左右非対称的な法面で、南側の壁面が垂直にちかく鋭く立ち上がるのに対して、北側の壁面は緩やかに丸味をもって立ち上がっている。その深さは30cmを測る。基底面は地形と平行して北から南へ下るように掘り込まれて、やや丸味を帯びている。覆土は底部にスコリア混じりの黒色土が堆積し、その上にスコリアを若干含んだ黒褐色土が堆積しており、上層に従い褐色味が強くなる。また、覆土の一部にぶい黄褐色土ブロックが混じる箇所がある。積み上げられた層の堆積状況から人為的に土を充填したものとみられる。また、本坑の壁体より鷹島・船元I式土器の小片1点と、覆土内より薄手の無文土器の小片1点が検出されている。

SK7(第13図)2C区北側の壁際に位置し、旧表土直下のVII層において確認されるが、土地改変で削平されているため、本来の地形の情報は不明である。平面形は確認部分から南北方向の軸が150cm、東西方向の軸が63cmの不整梢円形を呈するものとみられる。断面形は緩やかな捕鉢状で深さ40cmを測る。覆土はロームブロックを含む褐色土が南側より流入したように堆積し、橙色スコリア混じりの粘性の強い褐色土が上にあり、この層は下層に従って黒色味を増している。覆土の堆積状況が不自然であるため、人為的なものとみられるが、これまで挙げた他の土坑とは、年代的にも機能的にも明らかに性格の異なるものであるとみられる。遺物の出土はなかった。

SK 3



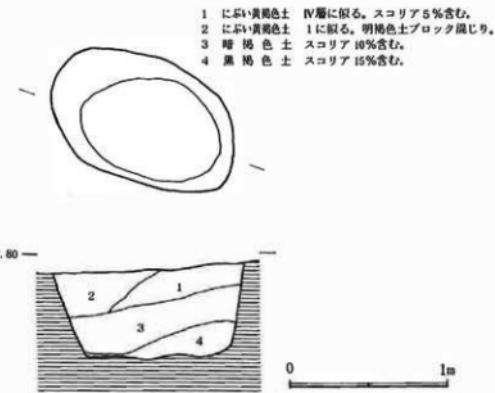
SK 4

+

B-5

(A)

C-5

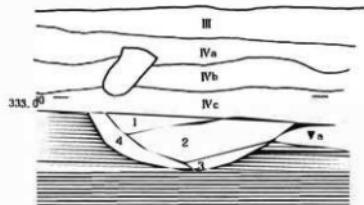


第11図 SK 3、SK 4 実測図

SK 5

+

C-4



- 1 にぶい黄褐色土 IVc層に似るがややくすんだ色調。  
スコリア5%含む。
- 2 にぶい黄褐色土 φ2~3mmのスコリアの塊中あり。  
スコリア10%含む。しまり強い。
- 3 黒褐色土 V層に似る。スコリア3%含む。
- 4 黄褐色土 黒色土ブロック混じり。スコリア5%含む。

0 1m

SK 6



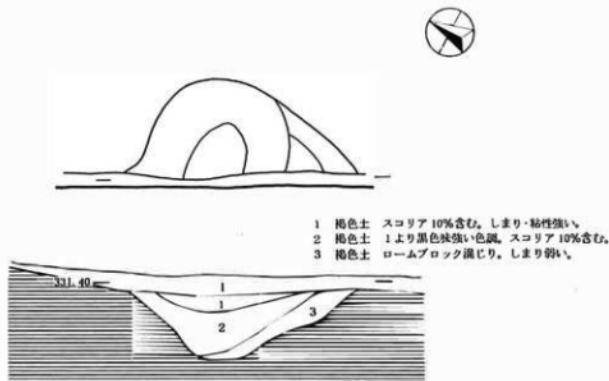
C-4

+

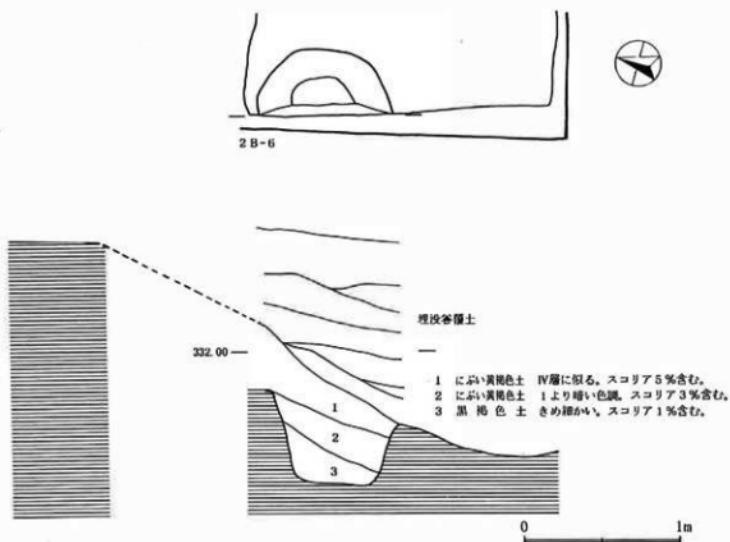


第12図 SK 5、SK 6実測図

S K 7



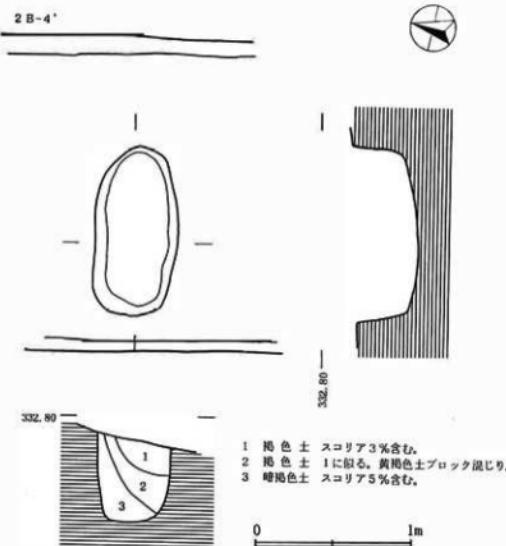
S K 8



第13図 S K 7、S K 8 実測図

**SK 8** (第13図) 2B区南端付近に位置し、北西から南西へ下る谷の傾斜面となる箇所のVII層において確認される。調査区境にあるため全体の規模を知ることはできないが、平面形は確認部分から長径85cm、短径45cm程度の楕円形を呈するものと思われる。断面形は底部から壁面がやや外反して立ち上がる平底の鉢状で、深さ60cmを測る。基底面は特に目立った痕跡がなく、ほぼ平坦であった。覆土は比高差80cm、傾斜角33°の埋没谷の北岸側斜面に遺構が形成されているため北側からIV層と同質とみられるにぶい黄褐色土が流れ込み状に堆積しており、内部は底部にわずかなスコリアを含んだ黒褐色土が堆積し、その上はスコリアを含んだにぶい黄褐色土となっている。その堆積状況が傾斜面と平行して堆積していることから、谷が埋没する以前につくられた遺構に自然に土が流れ込んだものとみることができる。遺物の出土はなかった。

**SK 9** (第14図) 2B-4のポイント付近に位置し、北西から南東へ下る傾斜地にあたる箇所のVII層において確認される。平面形は長径109cm、短径54cmの長い楕円形で、断面形はほぼ垂直にちかく壁面が立ち上がり、深さ54cmを測る。基底面はやや丸味を帯びている。覆土はスコリアを若干含んだ暗褐色土が底部から下部にかけて堆積し、その上に黄褐色土ブロックを含んだ褐色土がある。坑の側面にスコリアを多く含んだ黄褐色土ブロックが集中的にみられ、ブロックは10~15cm大の塊のものもあるが、上層に従ってブロックの混入は無くなり、スコリアの量もわずかになる。不自然な堆積状況から人為的に埋め戻されたものとみられる。遺物の出土はなかった。

**SK 9**

第14図 SK 9 実測図

## b. 溝状遺構

**S D 1** (第15図) 2B-5の南側に位置し、北西から南東へ下る緩やかな傾斜面となる箇所のII層において確認される。ほぼ一定した太さで幅75cm規模の東西方向に延長される溝で、断面形は角張ったU字状で深さ36cm規模を測る。2B区南側より開始される埋没谷の北岸の立ち上がり箇所と重なる本溝は、II・III層をカットする谷傾斜部を共有し、IV層の中位まで掘り込みが及んでいる。覆土は底部に粘性のある黒褐色土が堆積し、その上に橙色スコリアが濃密な砂礫層がある。その上層は粘性としまりのある褐色土を挟んで、また橙色スコリア混じりの砂礫層となっている。これはII・III層から由来して堆積したものとみられる。遺物の出土はなかった。

**S D 2** (第16図) 2A-4の南側に位置し、北から南へ下る傾斜面がテラス状に比較的平坦となる箇所のIV層において確認される。ほぼ一定した太さで幅36cm規模の東西方向へ極めて緩やかに蛇行しながら延長される溝で、断面形はU字状で深さ23cm規模を測る。覆土は底部に黄褐色土ブロックを含んだややしまりの弱い黒色土が堆積し、その上は橙色および白色スコリアを含んだ粘性としまりのある黒色土層となっている。本溝の北側付近の遺構確認面と同一面の直上で縄文土器が1点出土している。

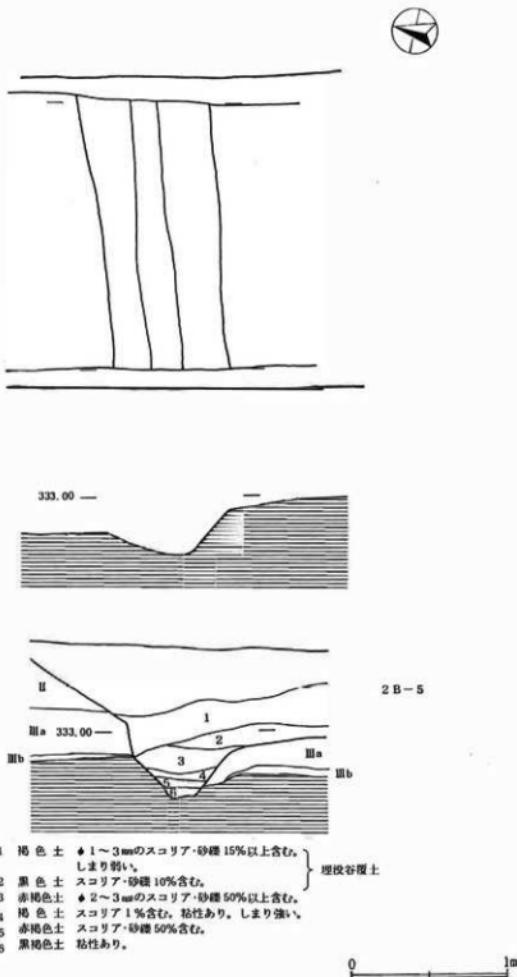
## c. 小ピット

**P 1～3** (第17図) 1B区C-18杭北東側に3基の円形の小ピットが列状に位置する。比較的平坦な箇所のIII層の下層部で確認され、P 1が径20cmで深さ8cm、P 2が径20cmで深さ13cm、P 3が径8cmで深さ8cmである。ピット同士の配置はほぼ直線的に北西を指向し、P 1の中心～P 2の中心までが1.75m、P 2の中心～P 3の中心までが1.25mとなり、P 1～P 2～P 3の間隔の合計が3mとなる。いずれのピットも覆土はスコリアを若干含んだ黒色土が単層で入っていた。各ピットが近似した規模と同じ覆土であることや、直線的な配列から柵列など相互に関連性をもった小ピット群であると捉えられる。遺物の出土はなかった。

**P 4～25** (第18図) 1A区B-9～11グリッド内に22基の円形の小ピットが集中的に位置する。東から西及び東南から西北へ下る比較的緩やかな傾斜となる箇所のIV層で確認された。ピットの径は19～20cmのものが9基、17～18cmのものが4基、14～16cmのものが8基で、11cmのものが1基ある。深さは12cmのものが1基、18cmのものが1基、20～24cmのものが7基、25～29cmのものが5基、30～34cmのものが4基、35～39cmのものが2基、40cm以上のものが2基ある。一番多いタイプは径14～16cmで深さ20～24cmの規模のものとなる。P 22～P 23～P 24～P 25を柵列状の直線として捉えられる。P 22の中心～P 23の中心までが1.3m、P 23の中心～P 24の中心までが1.4m、P 24の中心～P 25の中心までが0.95mで、この4基の間隔の合計は3.65mとなる。覆土は全てのピットに共通してスコリアを含んだ明褐色土が単層で入り、しまりが強い。遺物の出土はなかった。この小ピット群でP 24がSK 1を切り込んでいる。

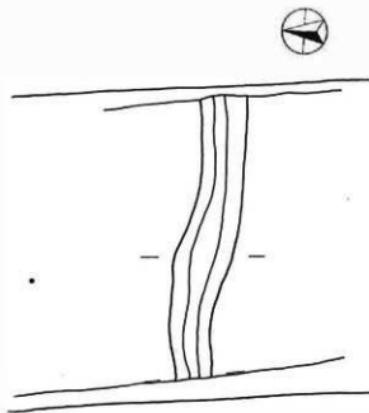
**P 26～34** (第19図) 1A区B-3～4グリッド内に9基の円形の小ピットが集中的に位置する。北東から南西へ下る傾斜面がテラス状に比較的平坦となる箇所のIV層で確認された。ピットの径は17～19cmのものが2基、13～15cmのものが6基、10cmのものが1基ある。深さは5cmのものが1基、10～14cmが3基、15cmが1基、20～24cmが4基ある。一番多いタイプは径13～15cmで深さ20～24cmの規模のものとなる。覆土はP 31を除く小ピットはスコ

S D 1

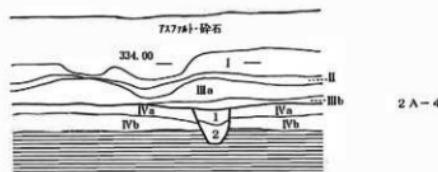


第15図 S D 1 実測図

S D 2



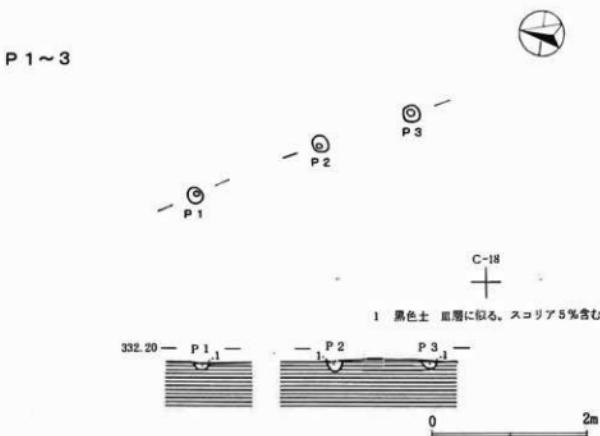
334.00 —



- 1 黒色土 スコリア 20%含む。粘性あり。しまり強い。  
2 黒色土 黄褐色土ブロック面じり。1よりしまり弱い。

0 1m

第16図 S D 2 実測図



第17図 P 1 ~ 3 実測図

リアを含んだ明褐色土が単層で入り、しまりが強い土質であった。P 31にはこの明褐色土に黒褐色土が混入したものが単層で入っていた。遺物の出土はなかった。

P 35（第20図）小ピット群とは年代的にも性格が異なる単基の小ピットが2A区中央付近に位置し、比較的平坦な箇所のII層で確認される。平面形は円形で径28cm、U字状の断面で深さ17cmを測る。覆土は橙色スコリアを若干含んだしまりのある黒褐色土が中央に入り、橙色スコリアをより多く含んだ明褐色土が北側縁辺に充填されている。遺物の出土はなかった。

#### d. 焼土跡

F P 1（第21図）1A区B-9グリッド内に位置し、表土除去後のIII層の下層において確認される。遺構は東から西へ下る傾斜面にある。しかし、本体の一部および周辺を重機による擾乱を受けているため、本来の地形や全体の輪郭などは明確に分からず、残存状態は良好とはいえない。焼土範囲は64cm×80cm、厚さ9cmである。スコリア混じりの黒褐色土内に硬化した焼土があり、その周囲の土もやや赤化して、赤褐色土となる範囲は浅い掘り込み状となっている。焼土跡は周辺より微妙に膨らみをもっている。焼土跡より半径約2mの範囲内で遺構確認面と同一面上に繩文土器片17点と石皿・台石各1点が散在しているが、周辺にこれ以外の遺構を確認することはできなかった。焼土直上より堀之内式併行の粗繩文土器が検出され、周辺の土器も胎土や色調がこれと類似するもの多かったため、当該期の遺構とみてよいと思われる。

F P 2（第22図）1A区B-6グリッド中央東側付近に位置し、谷にちかい東から西へ下る緩やかな傾斜地のIV層の下層部で確認される。全体の規模は37cm×41cmでデボ状に焼土層の集積が見られ、焼土範囲は12×10cm、厚さ3cmである。黄褐色土を敷いた上に焼土が

P 4 ~ 25

B-8  
+

P 6  
—  
B-8  
—



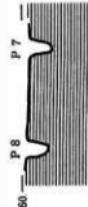
C-8  
+  
P 4  
—  
P 5  
—



C-9  
+

P 9  
—  
P 10  
—  
P 14  
—  
P 13  
—  
P 17  
—  
P 16  
—  
P 15  
—  
P 18  
—

B-9  
+



P 11  
○  
P 12  
—

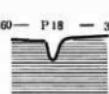
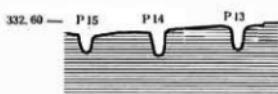
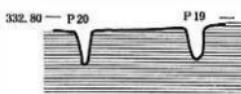
P 22  
○



C-10  
+

P 23  
—  
P 20  
—  
P 19  
—  
P 24  
—  
P 21  
—  
P 25  
—

B-10  
+



0

2m

第18図 P 4 ~ 25実例図

P 26~34

C-3



C-4



P 32

P 30

P 29

P 33

P 34

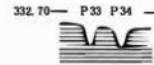
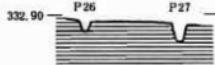
P 27

P 26

P 28

B-4

B-3



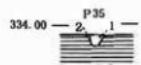
第19図 P 26~34実測図

P 35



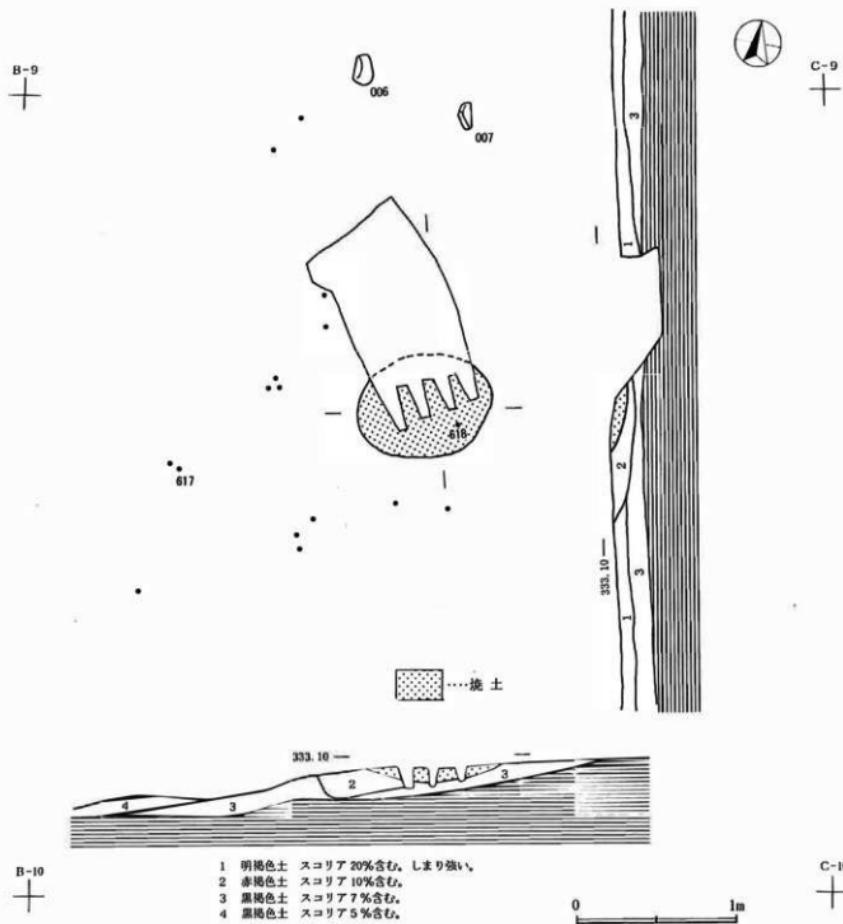
— (○) —  
P 35

- 1 黒褐色土  $\phi$  2~3mmのスコリア 15%含む。しまり強い。  
2 明褐色土  $\phi$  3~4mmのスコリア 30%含む。しまり強い。



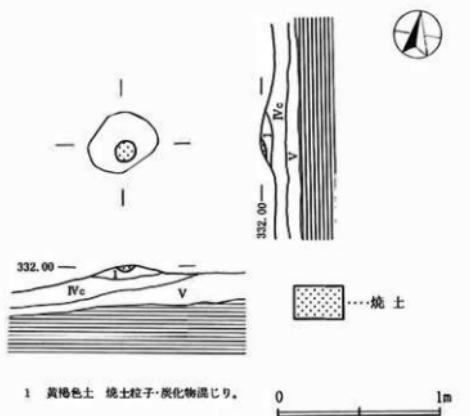
第20図 P 35実測図

FP 1



第21図 FP 1 実測図

FP 2



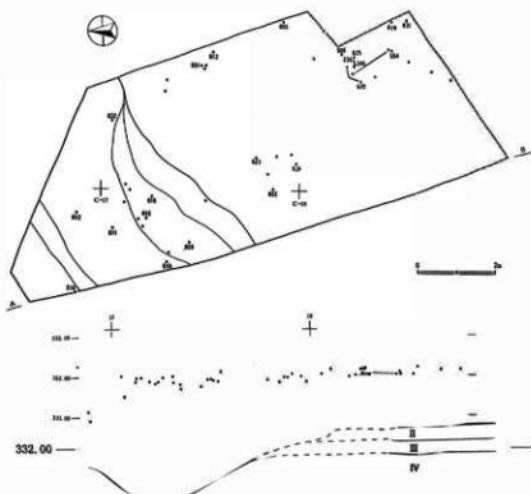
第22図 FP 2 実測図

あり、明確な掘り込みは伴わない。黄褐色土に炭化物が混じるが、焼土の量はそれほど多くなく、人的な使用を考えた場合、使用頻度はあまり多いとはいえない。周辺に関連する遺構は認められず、遺物の出土もなかった。

## 2. 埋没谷

当調査区は全体的に大きく褶曲を繰り返した地形をしているが、そのなかでも1B区B・C-17グリッド付近と2B区2B-6ポイント付近より、東西方向に延長する向斜箇所に堆積する層が確認でき、これを埋没谷としている(第8・9図)。1B区と2B区のセクションより幅は約10mあると推定され、深さは南側肩部から底部までが約2mを測る。現在、調査区北西の諏訪神社のある丘陵の東側裾を流れる小河川が、調査区付近でその流路を西へ屈曲して鉤の手に流れ村山沢の支流となっていることから、その小河川がかつてこの旧河道が辿る流路を流れていたことも考えられる。遺跡周辺の地形的条件からこの旧河道は村山沢へ合流していたものと思われる。

谷はⅢ～Ⅶ層を基盤層とし、覆土は色調や堆積物の状況から大きく5層に分けられる。谷底に堆積するV層は、径1～2mmの小粒スコリアを含んだ褐色土がベースで埋没谷(自



第23図 1 B 区土器出土状況

然流路)の堆積物らしくやや砂質で灰褐色にちかい色調をしている。壁際の v b 層は黄褐色土がブロック状に混入している。その上にある iv 層は、小粒スコリアと径 2~5mm の中粒スコリアを含んだ黒褐色土である。iv a 層は北側からの流れ込みが強くみられ、iv 層堆積時に谷底は南側へ約 1m 流路を変えているようである。この層も埋没谷の堆積物らしく砂質で粘性を持ち、褐灰色にちかい色調をしている。その次の iii 層の堆積によって谷の埋没が著しくなる。iii 層は径 1mm 以下の極小~中粒スコリアを含んだ黒色土からなる。この層の上部で谷に覆う iii b 層は径 2mm 以上の砂礫を含んだ砂質の層であり、他の層に比べ土のしまりが弱いものとなっている。その直下に堆積する iii d 層は黄褐色土ブロックを含んで明るい色調となっている。ii 層は小粒スコリアを含んだ黒褐色土で、この層の堆積時の谷底は元来より南側へ約 2.5m 流路が移動している。この ii 層と iii 層の上にある i 層は、径 2mm 以上の砂礫や小~中粒スコリアを多く含んだ砂質の褐色土層で、やや粘性がある。第2次発掘調査では i c 層より堀之内式土器 1 片 (507) が出土しており、この層までが埋没谷の堆積物らしい土質をしていることから、浅くなりながらも流路が存在していたと考えられ、最終的に埋没が完了した層といえる。

また、1 B 区の土器分布状況 (第23図) をみると、この谷が埋没する過程において、縄文土器片が流れ込んだ状況が確認できる。これによると土器片は主体的に iii 層~iv 層に含まれ、i・ii 層にも若干含まれるようである。その iii~iv 層より出土した土器のほとんどが今回の調査で III・IV 層で包蔵が確認された堀之内式土器である第5群土器やこれと時期を併行する土器で構成されている。これにより、iv・v 層の堆積状況に反映される縄文時代中期頃より連続と侵食・堆積してきた河道は、縄文時代後期以降から iii 層の堆積状況が示すように谷の埋没が急に進んだ様子が窺える。

---

### 第Ⅲ章 遺 物

---

#### 1. 土器

ワラビ平遺跡では、第1次発掘調査と第2次発掘調査、確認調査とあわせて327点の土器が出土している。このうち167点が型式・年代毎に5つのグループに分けることができるで各群別に紹介したい。

##### 第1群土器（第24図101・102、第26図103）

縄文時代前期後半の諸礎式に分類される土器群である。いずれも胴下部片であり、段状の集合沈線にボタン状貼付文が施されたもの（101）と、竹管状工具による連続刺突文をめぐらせたもの（102・103）がある。101は直径8mmの円盤状にした粘土を2対1組で器面に貼付し、おそらく左右に描き分けられた集合沈線文の中心に位置する。ボタンには刺突は加えられず、これは諸礎式c式の新段階に多くみられる特徴である。102と103は同一個体であり、細い半截竹管状工具の腹面を用いた連続する刺突が線を為し、最下部に平行線状、胴下部に木の葉状の文様が施されたものである。

##### 第2群土器（第24図206～210・242～246、第26・27図201～205・211～241・247～252）

縄文時代中期初頭の五領ヶ台式に分類される土器群である。竹管文の有無によって竹管文を主体するものは、集合沈線が施されるもの（a類）、沈線の区画に刺突文が施されるもの（b類）、細い平行沈線が施されるもの（c類）、連続した爪形文が施されるもの（d類）に分けられ、竹管文を持たないものには、結節縄文が施されるもの（e類）がある。

a類（201～205、211～213、221）は半截竹管の腹面を用いた集合沈線文により器面全体を区画して文様が構成されるもので、201～205は、横位の集合沈線によって器面を区画し、区画内に斜位や縦位に集合沈線文を充填したものである。203・204は横位の沈線が山形状に施されている。211～213、221は沈線が浅く、施文が粗雑な感じがする。

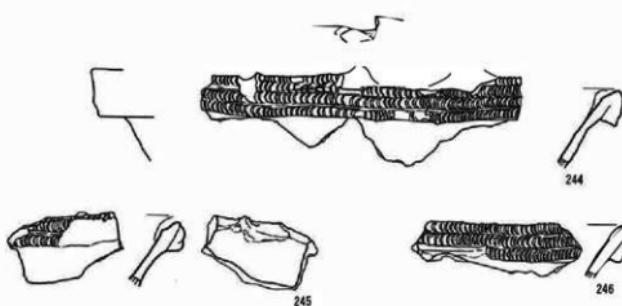
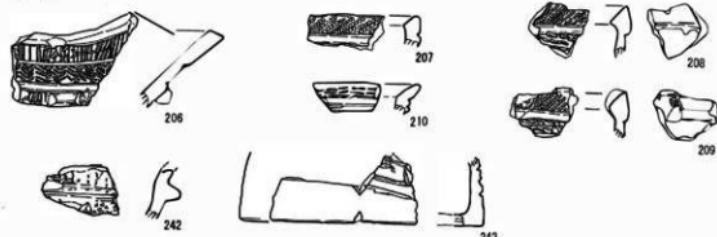
b類（206～210、228、230、242）は、沈線文と刺突文が組み合われたもので、206は半截竹管の腹面を押し引いた半隆帯文で器面を上下段状に区画され、上部は縦位の浅い沈線文に三角形の刺突が6対1組あるいは3対2組で施されている。その下の区画には深く明確な連続山形文が描出されており、その下の区画は細く浅い縦位の沈線文が施されて、突起状の把手が貼付されている。また、その区画の上下には三角形の刺突文が交互にみられる。207～209は口縁部にLR縄文が施され、その下は半隆帯により胴部と区画されている。208・209は胴上部に竹管状工具による刺切状列線が施され、裏面にはミガキがみられる。208は口唇部に突起の折り返しがみられ、その裏面に縄文が施文されている。210は口縁部が縄文ではなく刺切状列線となっている。228は器面に対して斜位に半隆起文と平行沈線文の棒状区画が入り、その内側は細い斜位の沈線文と把手状の小突起が施されている。この棒状区画の外側両端に刺突がみられる。230は隆帯によって縦横に区画され、上下に横位の粗い沈線が走る。横位の隆帯の下辺部に下方向への刺突がみられる。242は表面にLR縄文が施文された隆帯が横位に走り、上下に区画されている。下部は縦位に展開するとみられる沈線と角型の浅い刺突文が施されている。裏面の上位にはミガキ、下位にはナデが

ワラビ平遺跡

第1群土器



第2群土器

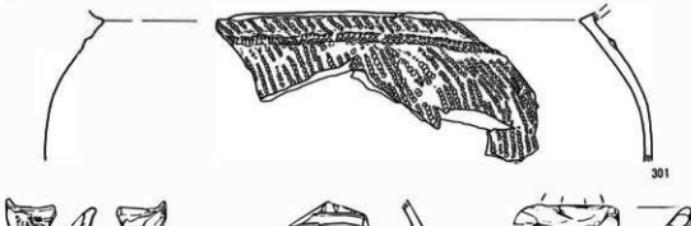


0 10 cm

No.	出土区	出土層	器種	型式	文様	胎土	焼成	色調(表/裏)	備考
101	IA/B-10	IV上	深鉢形	踏職	沈線、貼付	粗、多含石英・雲母	普通	にぶ黒	底部(径16.0cm)
102	IA/B-10-11	IV	深鉢形	踏職	連刺突	粗、多含石英・長石	普通	にぶ赤褐/燒灰	底部(径14.0cm)
206	IA/B-5	IV	深鉢形	五顎ヶ台	沈線、側突、半隆帯、貼付	稍粗、多含石英・雲母	普通	明赤褐	口縁部(波状)
207	IA/B-6	IV	深鉢形	五顎ヶ台	LR幾文、沈線、沈線	稍粗、多含長石・雲母	稍軟質	にぶ黒	口縁部
208	IA/B-3	IV	深鉢形	五顎ヶ台	LR幾文、沈線、半隆帯、刺突	稍粗、多含石英・長石	普通	黒褐/にぶ黒	口縁部、裏ミガキ
209	IA/B-4	IV	深鉢形	五顎ヶ台	LR幾文、沈線、刺突	稍粗、多含石英・長石	普通	黒褐/にぶ黒	口縁部、裏ミガキ
210	IA/B-4	IV	深鉢形	五顎ヶ台	半隆帯、刺突	稍粗、多含石英・長石・雲母	稍軟質	にぶ黒	口縁部
242	2A-5	III下	深鉢形	五顎ヶ台	LR幾文、隆帯、刺突、沈線	多含石英・長石、粗鐵質	普通	にぶ赤褐/にぶ黄褐	裏ミガキ・ナデ
243	IA/B-3	IV	深鉢形	五顎ヶ台	LR幾文、沈線、半隆帯	多含石英・長石、粗鐵質	稍硬質	灰白	底部(径15.0cm)
244	IA/B-3	IV上	深鉢形	爪形		多含石英・雲母・角閃	普通	にぶ黄褐/にぶ黒	口縁部、スス付
245	IA/B-3	IV	深鉢形	五顎ヶ台	爪形	多含石英・雲母・角閃	普通	にぶ黄褐/にぶ黒	口縁部、スス付
246	IA/B-3	IV	深鉢形	五顎ヶ台	爪形	多含石英・雲母・角閃	普通	にぶ黄褐/にぶ黒	口縁部

第24図 土器実測図(1)

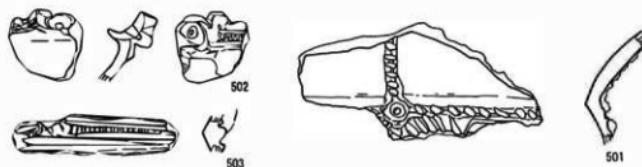
## 第3群土器



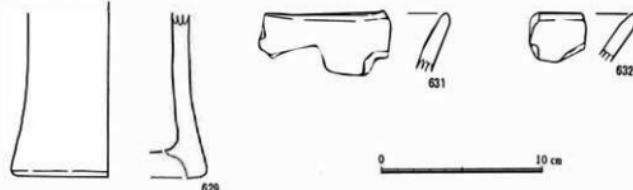
## 第4群土器



## 第5群土器



## 文様の施されない土器



No.	出土区	出土層	器種	型式	文様	胎土	焼成	色調(表/裏)	備考
301	IA/B-6-7	IV	深鉢形	廣島・船元 I	SL織文、隆脊、爪形	細、多含砂粒	精緻質	にぶ緑/灰	
349	IA/B-3	IV	深鉢形	北裏 C 1	SL織文、沈線、内面貼付	多含粗石英	普通	灰白	口縁部(波状)
350	2A-5	IV	深鉢形	朝霞及東海系	沈線	多含石英、少含雲母、砂粒	精緻質	灰白	
351	IA/B-3	IV下	深鉢形	朝霞及東海系	沈線	粗、多含石英、雲母	普通	にぶ黄緑/黒褐色	口縁部(卷上げ)
401	表段		深鉢形	勝坂	隆脊、沈線	細石英、長石、雲母	普通	にぶ緑/黄灰	
501	IB/C-17	IV上	深鉢形	堀之内	隆脊、沈線	石英、少含砂粒	普通	にぶ黄緑/暗褐	
502	IA/B-4	IV	深鉢形	堀之内	SL織文、隆脊、沈線	精緻、多含石英、長石、雲母	普通	にぶ黄緑	
503	確認困難		深鉢形	堀之内	隆脊、沈線	多含石英、長石、雲母、砂粒	普通	にぶ緑/灰褐色	1 A 区内
629	IA/B-3	III	深鉢形	五輪ヶ台?	隆脊、沈線	粗、多含石英、雲母	普通	にぶ赤褐	底部(径12.3cm)
631	IA/B-9	IV	深鉢形	堀之内?	隆脊、沈線	粗、多含長石	普通	にぶ緑	口縁部(やや波状)、表裏にうがい、スヌ付
632	IB/C-17	埋没段	深鉢形	堀之内?		多含長石、砂粒	普通	にぶ緑/にぶ黒緑	口縁部、裏ミガキ

第25図 土器実測図(2)

## ワラビ平道跡

## 第1群土器



103

## 第2群土器



201



202



203



204



211



212



213



221



214



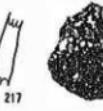
215



216



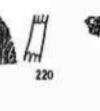
217



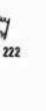
219



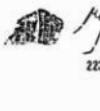
220



222



218



223



224



225



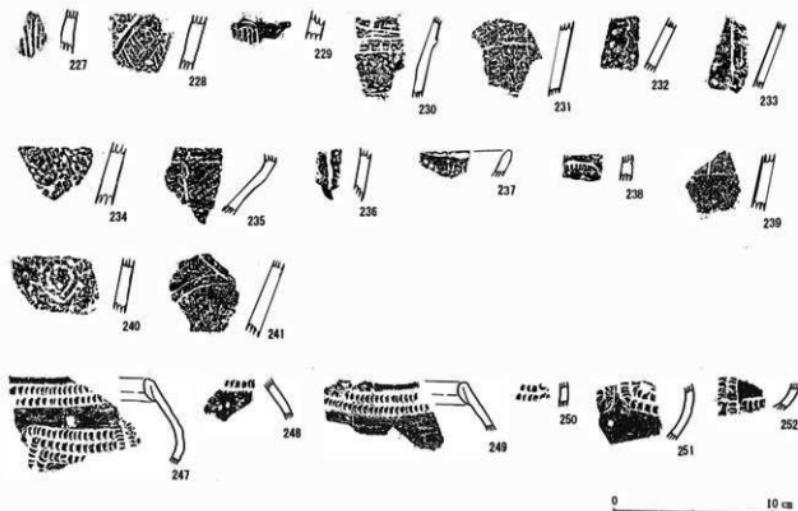
226

0

10 cm

No.	出土区	出土層	器種	型式	文様	胎土	焼成	色調(表/裏)	備考
103	I/A-B-10	IV	深鉢形	縦職	利斧	粗、多含石英・長石	普通	にぶ赤褐色/黒灰	102と同一
201	I/A-B-6	IV上	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	細砂粒、長石・雲母、少含角閃	普通	にぶ赤褐色	
202	I/A-B-7	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	石英・長石	普通	にぶ赤褐色	
203	I/A-B-8	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	石英・長石	普通	にぶ赤褐色	
204	I/A-B-9	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	多含石英・長石	普通	明褐色	
205	I/A-B-6	IV上	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	細石英・長石、少含雲母	普通	にぶ赤褐色	
211	I/A-B-7	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	多含石英・長石・砂粒	稍軟質	褐色	
212	I/A-B-6	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	多含石英・長石・利斧	普通	にぶ赤褐色	
213	I/A-B-6	IV上	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	多含細部石英・長石	普通	にぶ赤褐色/明黄褐色	
214	I/A-B-6	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	多含細部石英・砂粒	稍軟質	にぶ赤褐色/にぶ黄褐色	
215	表採		深鉢形	五頭ヶ台	沈線	粗、多含石英・長石・砂粒	普通	にぶ赤褐色	
216	I/A-B-5	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	粗、長石・雲母	普通	にぶ赤褐色	
217	I/A-B-6	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	粗、長石・雲母	普通	にぶ赤褐色	
218	I/A-B-3	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	多含石英・長石・雲母	普通	褐色	
219	I/A-B-3-5	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	多含長石・雲母	普通	にぶ赤褐色	
220	I/A-B-3	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	粗長石・雲母	普通	にぶ赤褐色	
221	表採		深鉢形	五頭ヶ台	沈線	粗長石・砂粒	普通	にぶ赤褐色	
222	I/A-B-4	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	細長石・雲母	普通	にぶ赤褐色	スス付
223	I/A-B-4	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	粗長石・雲母	普通	にぶ赤褐色	
224	I/A-B-4	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	多含長石・雲母	普通	にぶ赤褐色	
225	I/A-B-4	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	粗、多含長石・雲母	普通	灰褐色/にぶ褐色	スス付
226	I/A-B-4	IV上	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	長石・多含雲母	普通	にぶ赤褐色	スス付

第2図 土器拓影図(1)



No.	出土区	出土層	器種	型式	文様	施土	焼成	色調(表/裏)	備考
227	IA/A-8	IV上	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	長石・少含角閃	普通	明赤褐色/にぶ赤	
228	IA/B-3	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線、半隆唇、刺突、突起	細長石・雲母	普通	褐	
229	IA/B-4	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	多含長石・雲母	普通	黒褐色/にぶ褐	
230	IA/B-8	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線、隆唇、刺突	多含長石・雲母	普通	灰褐色/にぶ褐	
231	IA/B-6	IV上	深鉢形	五頭ヶ台	結節繩文、磨削	石英・長石・雲母・角閃	普通	灰褐色/褐	スス付
232	IA/B-3	IV	深鉢形	五頭ヶ台	結節繩文、磨削、刺突	多含長石・雲母・角閃	普通	褐	
233	IA/B-3	IV	深鉢形	五頭ヶ台	結節繩文、沈線	長石・少含雲母	稍軟質	にぶ褐	
234	IA/B-3	IV上	深鉢形	五頭ヶ台	U彫文、結節繩文、沈線	長石・少含雲母	普通	明褐色	
235	IA/B-6	III上	深鉢形	五頭ヶ台	U彫文、結節繩文、沈線	多含長石・雲母	普通	にぶ赤褐色	スス付
236	IA/B-9	IV	深鉢形	五頭ヶ台	繩文、沈線	長石・砂粒	普通	にぶ黄褐色	
237	表探		深鉢形	五頭ヶ台	U彫文、沈線	多含長石	普通	褐	口縁部
238	IB/C-18	III	深鉢形	五頭ヶ台	U彫文、沈線	長石・粗砂粒	普通	にぶ褐	
239	IA/B-2	擾乱	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	粗砂粒	普通	にぶ褐	
240	IA/B-6	IV	深鉢形	五頭ヶ台	沈線	長石・雲母・角閃	稍軟質	褐	
241	IA/B-5	IV下	深鉢形	五頭ヶ台	U彫文、沈線	長石・雲母	普通	にぶ赤褐色	
247	IA/B-3	IV	深鉢形	五頭ヶ台	爪形	長石・砂粒	稍硬質	褐	口縁部、スス付
248	IA/B-3	IV	深鉢形	五頭ヶ台	爪形	長石・砂粒	稍硬質	褐	247と同一か
249	IA/B-3	IV	深鉢形	五頭ヶ台	爪形	長石・砂粒	稍硬質	褐	247と同一か
250	IA/B-4	IV	深鉢形	五頭ヶ台	爪形	長石・砂粒	稍硬質	にぶ褐/褐	247と同一か
251	IA/B-3	IV	深鉢形	五頭ヶ台	爪形	長石・砂粒	稍硬質	にぶ褐	247と同一か
252	IA/B-3	IV	深鉢形	五頭ヶ台	爪形	長石・砂粒	稍硬質	にぶ褐	247と同一か

第27図 土器拓影図(2)

みられる。また、刺突の有無は確認できないが L R 縄文と半截竹管の腹面による沈線文をもつ胴下部片243がある。胴最下部に半隆帯が施され、その帶上に L R 縄文と方形状の沈線が施されている。

c 類(214～220、222～227、229、236～241)は細い平行沈線文が施されていることを特徴とする。214・215は粗雑な平行沈線が器面の広範囲に施されている。216、217、219、220、222～227は縦位の帶状に平行沈線文を施すもので、218は縦位に沈線があり、横位に平行沈線文が施されている。220にはやや屈曲した平行沈線文がみられる。240は二重円状に平行沈線文が施されている。241は平行沈線文が弓形状に描出され、地文に不明瞭な L R 縄文が施されている。小片である236～239もこれらの範疇に含めても良いと思われる。

d 類(244～252)は半截竹管の腹面の刺突による爪形文が連続させて施されていることを特徴とする。244～246は口縁部を中心に3～4列の連続爪形文がまわされる。口縁部を外面へ折り返し、または粘土帯を口縁へ貼り付け、半截竹管の腹面を突き引いたものとみられ、この連続爪形文が列を重ねて隆帯状に口縁にめぐっている。また、244・245の内面にはつまみ状の突起が貼り付けられている。247～252も連続爪形文が施されるものであるが、口縁部が内彎する器形であり、半隆帯状の連続爪形文が2～3列となって器面の縦横位にカギの手状に施されている。

e 類(231～235)は器面に結節縄文が施されていることを特徴とする。231・232は S 字状の結節縄文が縦位に施され、結節の間の縄文が磨り消されている。233は縦位の細い沈線と組み合わせられたものである。234・235はそれぞれ R L 縄文と L R 縄文が伴っている。

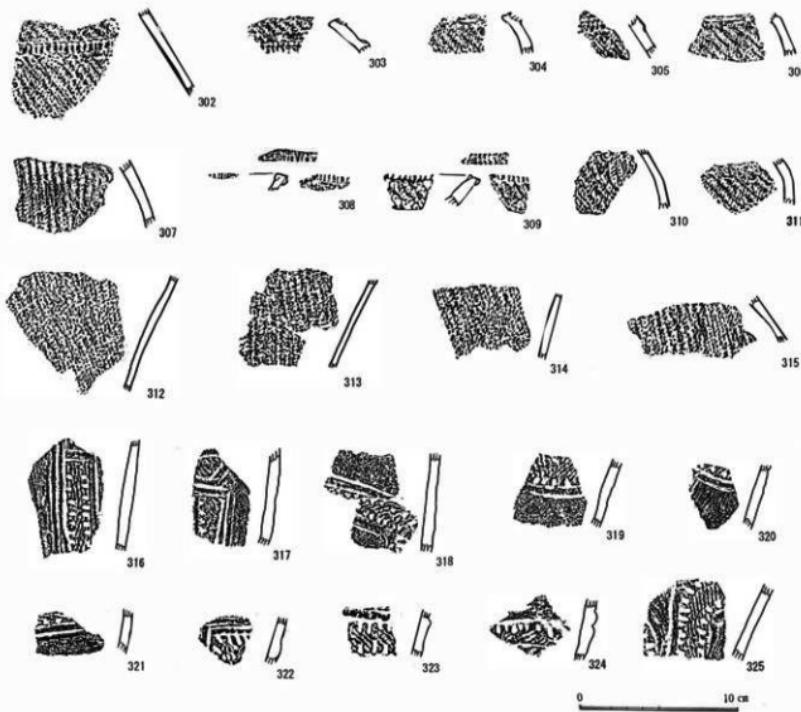
本遺跡出土の第2群土器では以上のように文様構成の特徴によって細分することができる。五領ヶ台式土器はその新旧関係によって I 式と II 式に二分され、これらの第2群土器を二分することを試みると、I 式と II 式の両者は文様の転化など互いに影響し合いながら変遷を辿るため、その折衷タイプとなる存在が認められることが周知の事象となっているが、概括的に分類すると、a 類・b 類・e 類が五領ヶ台 I 式のもつ特徴を表わし、c 類・d 類が五領ヶ台 II 式のもつ特徴を捉えているように思われる。

### 第3群土器 (第25図301・349～351、第28・29図302～348・352・353)

灰褐色系の色調の胎土と薄手で硬質な焼成を特徴とする関西地方及び東海地方西部をルーツとする土器群であり、瀬戸内地域を中心として近畿地方に分布する鷹島式または船元 I 式の系統である土器と、東海地方西部を中心に分布する北裏 C 1 式の系統である土器に分かれ、いずれも縄文時代中期初頭から前半の土器型式で構成される。

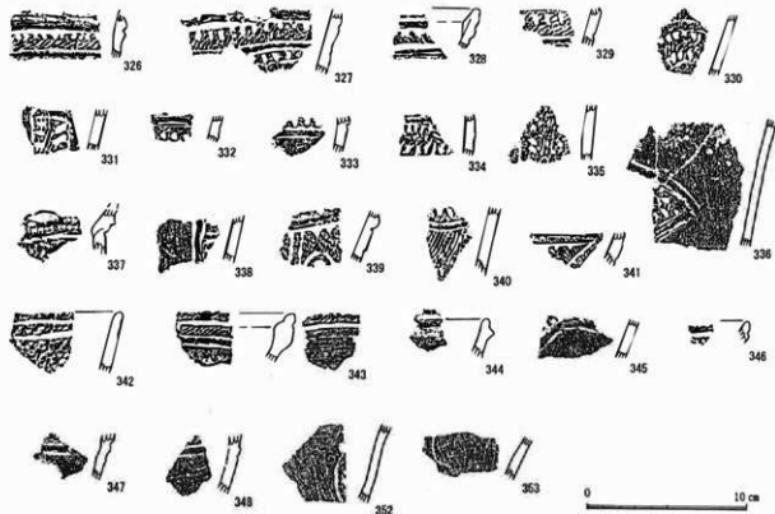
301～315は撚りの粗い R L 縄文を地文とし、細い粘土紐を器面に貼り付けて隆起帯とし、それに竹管状工具を押し当てて連続的に爪形圧痕が施されている。308・309は口唇部の表裏面両側に隆起帯状の爪形文が施されて、口縁部裏面にも R L 縄文が施されている。これらは鷹島式・船元 I 式の系統に属するものである。

316～335・339・340は沈線の区画内に縄文と刺突を有するもので、半截竹管の腹面を押し引いた半隆帯の平行沈線が描出され、縄文が施された区画内には印刻あるいは半截竹管による刺突が加えてある。また、336～338・344・345・347・348のように縄文を持たずに沈線や刺突のみで施文されるものや、341～343のように半隆帯が用いられず、平行沈線の空間に R L 縄文が施されるものもある。また、349は口縁部をつまみ上げた波状を成し、その裏面には「く」の字状の粘土紐が貼り付けられている。文様は R L 縄文と横位の沈線が施さ



No.	出土区	出土層	器種	型式	文様	胎土	焼成	色調(表/面)	備考
302	IA/B-7	IV上	深鉗形	慶富・船元1	既掘文、隆槽、爪形	多含石英・砂粒	物理質	に本黄褐色/灰	301と同一か
303	IA/B-7	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文、隆槽、爪形	多含石英・砂粒	物理質	灰黃	口縁部
304	IA/B-7	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文、隆槽、爪形	粗・多含石英・砂粒	物理質	灰黃/灰黃	口縫部
305	IA/B-7	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文、隆槽、爪形	多含石英・砂粒	物理質	灰白	301と同一か
306	IA/B-7	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文	多含石英・砂粒	物理質	に本黄褐色/灰白	301と同一か
307	IA/B-7	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文	多含石英・砂粒	物理質	灰白	301と同一か
308	IA/B-7	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文、隆槽、爪形	石英	物理質	黒褐色/灰白	301と同一か
309	IA/B-7	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文、隆槽、爪形	多含石英・砂粒	物理質	灰黃/灰白	口縫部
310	IA/B-7	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文、隆槽、爪形	多含石英・砂粒	物理質	灰白/灰黃	301と同一か
311	IA/B-7	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文	多含石英・砂粒	物理質	浅黄褐色/灰白	301と同一か
312	IA/B-6	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文	多含石英・砂粒	物理質	灰白/褐灰	301と同一か
313	IA/B-6	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文	石英、多含粗颗粒	物理質	浅黄褐色/褐灰	口縫部
314	IA/B-6	IV上	深鉗形	慶富・船元1	既掘文	多含石英・砂粒	物理質	淡褐色/黑褐色	301と同一か
315	IA/B-7	IV	深鉗形	慶富・船元1	既掘文	多含石英・砂粒	物理質	浅黄褐色/灰白	301と同一か
316	IA/B-3	IV	深鉗形	北富C1	LR掘文、沈痕、半隆槽、刺突	石英・長石・雲母	物理質	に本褐色	スス付
317	IA/B-3	IV	深鉗形	北富C1	LR掘文、沈痕、半隆槽、斜刻	粗石英・長石・少含雲母	物理質	灰黃褐色	
318	IA/B-3	IV下	深鉗形	北富C1	LR掘文、沈痕、半隆槽、刺突	多含石英・砂粒	普通	に本褐色	
319	IA/B-3	IV	深鉗形	北富C1	LR掘文、沈痕、半隆槽、刺突	多含石英・長石	物理質	に本褐色	
320	IA/B-3	IV	深鉗形	北富C1	沈痕、半隆槽、刺突	粗石英・少含雲母	普通	に本褐色	
321	IA/B-3	IV	深鉗形	北富C1	LR掘文、沈痕、半隆槽、刺突	粗石英・少含雲母	物理質	に本褐色	
322	IA/B-3	IV	深鉗形	北富C1	LR掘文、沈痕、半隆槽、刺突	粗石英・長石・少含雲母	普通	に本褐色	
323	IA/B-3	IV上	深鉗形	北富C1	LR掘文、沈痕、半隆槽、刺突	粗石英・長石・少含雲母	普通	に本褐色	
324	IA/B-3	IV	深鉗形	北富C1	LR掘文、沈痕、半隆槽、刺突	多含石英・長石	物理質	に本褐色	
325	IA/B-3	IV	深鉗形	北富C1	LR掘文、沈痕、半隆槽	多含石英・少含雲母	物理質	に本褐色	

第28図 土器拓影図(3)



No.	出土区	出土層	器種	型式	文様	胎土	焼成	色調(表/裏)	備考
326	IA/B-3	IV	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線、半隆帯、刺突	石英・長石、少含雲母	精緻質	にぶ黒	
327	IA/B-3-6	IV上・IV	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線、半隆帯、刺突	石英・長石、少含雲母	普通	にぶ黒	
328	IA/B-3	IV	深鉢形	北裏C1	L/R縦文、沈線、半隆帯、隆肋	石英・長石、少含雲母	精緻質	灰黒褐色	口縁部
329	IA/B-3	IV	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線、半隆帯、刺突	粗石英・長石、少含雲母	精緻質	にぶ黒	
330	IA/B-2	擾乱	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線、刺突	粗・多含石英・長石	普通	にぶ黒	
331	IA/B-3	IV	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線、刺突	粗石英・長石	精緻質	にぶ黒	
332	IA/B-3	IV	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線、刺突	粗石英・角閃・雲母	普通	にぶ黒褐色	スス付
333	IA/B-3	IV	深鉢形	北裏C1	沈線、半隆帯、刺突	多含石英・長石	普通	にぶ黒	
334	IA/B-3	IV	深鉢形	北裏C1	L/R縦文、沈線、刺突	多含石英・長石	普通	にぶ黄褐色	
335	IA/B-3	擾乱	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線、刺突	粗石英・長石	普通	にぶ黒褐色	
336	IA/B-3	IV・IV下	深鉢形	北裏C1	沈線、半隆帯、半突	石英・長石、少含雲母	精緻質	にぶ黒褐色	スス付
337	表采		深鉢形	北裏C1	沈線、刺突	石英、多含雲母	普通	にぶ黒	
338	IA/B-3	IV	深鉢形	北裏C1	沈線、半隆帯、刺突	粗細、石英・長石	精緻質	にぶ黄褐色	スス付
339	確認用窓		深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線、斜削	多含石英・長石、雲母	普通	灰黒褐色	口縁部?、1 ALK内
340	IA/B-4	IV	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線、半隆帯、刺突	石英・長石	普通	にぶ黄褐色	
341	IA/B-4	IV	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線、刺突	粗石英・長石、雲母	精緻質	にぶ黒	スス付
342	IA/B-9	FPI確認面	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線	石英・長石、雲母	普通	にぶ黒	口縁部、スス付
343	IA/B-4	IV	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線	石英・長石、雲母	普通	にぶ黒	口縁部
344	IA/A-9	IV上	深鉢形	北裏C1	沈線	多含長石、雲母	精緻質	にぶ黒	口縁部
345	IA/B-3	IV	深鉢形	北裏C1	沈線、半隆帯、刺突	多含長石、雲母	精緻質	にぶ黒	口縁部
346	IA/B-18	III	深鉢形	北裏C1	R縦文、沈線	石英・長石	普通	にぶ黒	口縁部
347	IA/B-3	IV	深鉢形	北裏C1	沈線、半隆帯	少含石英・長石	普通	にぶ黒	
348	IA/B-3	IV上	深鉢形	北裏C1	沈線	粗石英・長石	普通	にぶ黒	
352	IA/B-3	擾乱	深鉢形	関西・東海系	沈線	粗石英・長石	精緻質	にぶ黒	
353	IA/B-3	IV	深鉢形	関西・東海系	沈線	粗石英・長石	精緻質	にぶ黄褐色	

第29図 土器拓影図(4)

れ、土器片の下位には爪形文と思われる刺突が認められる。これらの土器は北裏C 1式の系統に属するものである。

350～353は、その焼成や胎土色調等から関西地方及び東海地方西部の系統に属する土器であるとみられる。350は肩が張り出すことにより、著しい稜線を作り出した算盤珠状の器形を呈する土器の胴部であり、竹管状工具を用いた沈線が縦横位に描出されている。351は外反する口縁部片で口唇部が巻き上げられて玉縁状を成している。口縁の欠損部分に突起状のつまみが付く可能性もある。352・353は微弱な沈線が弧状に描出されたものである。

#### 第4群土器（第25図401、第30図402）

縄文時代中期中葉の勝坂式に分類される土器群であり、表探資料とあわせて2点のみの出土である。401は胴部文様帶系の小片であると思われ、断面三角の太めの隆帯が横位に施され、竹管状工具による彫刻的な沈線が認められる。402も胴部の小片であるが、比較的厚い器壁と太く明瞭な沈線が勝坂式の特徴を表している。

#### 第5群土器（第25図501～503、第30図504～513）

縄文時代後期前半の堀之内式に分類される土器群である。501は胴上部片で頸部が強く括れていることが分かる。上部より垂下する粘土紐に粒状の刻み目が施された文様帶と、これ同じ文様帶が頸部の括れラインに平行するように沿って横線を為したもののが交差する箇所に渦巻状の装飾が付けられている。この横走する文様帶の下の胴部には太めの沈線文が施されている。502は口縁部片で口唇表裏の小突起上面に渦巻状の装飾が施されている。口縁部を周る平行沈線の間にはL R 縄文が施されている。503は形状が外側へ「く」の字状に屈曲しており、これは頸部の括れ部分の土器片であるとみられる。細線が縦位に連続する刻み目が施された横位の隆帯には橋状把手が欠損したとみられる箇所も認められる。505は地文に縄文を有し、複数の沈線によって文様が描かれていることが分かる。これら4点の土器はその特徴から堀之内1式に相当するものであると思われる。

504は口縁部片であり、口唇の上面には沈線が施され、器面は表裏ともよくミガキがかけられている。小形の深鉢であるとみられ、口縁が内側に屈曲する器形から堀之内2式土器に相当するものであると思われる。

506～510はおそらく同一個体であり、R L 縄文の地文の上に斜位の沈線と直径5mm大の円形の刺突列線が縦位を基本とする文様として施されているものである。いずれも土器裏面にミガキがかけられている。506の口唇部にはミガキと連続する円形の刺突がみられる。これらの土器は堀之内1式に相当するものであると思われる。

511～513はハケ状工具による集合沈線が粗雑に描かれているもので、「これらは堀之内式の範疇に含められるものであると思われる。

#### 縄文が施される土器・文様が施されない土器・底部（第25図629・631・632、第30・31図601～628・630）

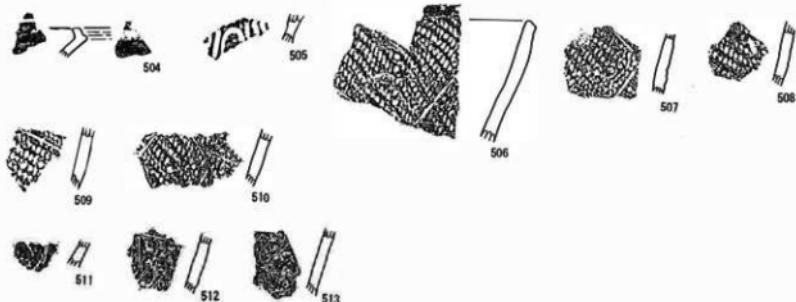
この他、無文のものや単に縄文が施される粗製土器のグループが挙げられる。装飾性の高い精製土器に対して、煮沸などその実用性を重視して作成されたこれらの土器は、本遺跡からの出土量も先に取り上げた5つの土器群と比べて飛び抜けて多いものとなっている。

これらの粗製土器にも個々が帰属する型式期があるわけであるが、ほとんどが小片であることや、単純な施文や器形であることなどから分類することは困難であるため、これらの中から型式期を推定できるものを取り上げると、五領ヶ台式期と堀之内式期に分けられる。

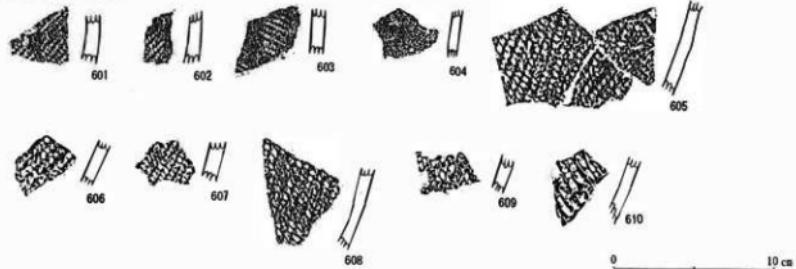
## 第4群土器



## 第5群土器



## 縦文が施される土器

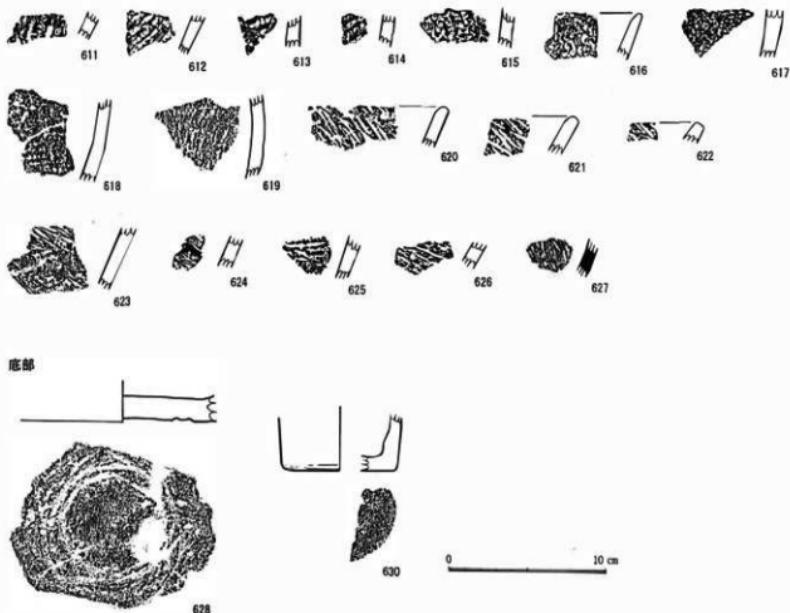


0 10 cm

No.	出土区	出土番	器種	型式	文様	胎土	焼成	色調(赤/黄)	備考
402	IB/C-18	IV	深鉢形	盤板	沈縫	粗長石・角閃	普通	赤/灰褐色	
504	IB/C-18	III下	深鉢形	縦之内	沈縫	少含長石・砂粒	精緻	にぶ揚	口縫部、表裏ミガキ
505	IB/C-18	III下	深鉢形	縦之内	UR縦文、沈縫	長石・砂粒	普通	明赤揚	
506	IA/B-6	IV	深鉢形	縦之内	UR縦文、沈縫、刺突	多含長石・砂粒	普通	桜	口縫部、裏ミガキ
507	2B-5	SD1	深鉢形	縦之内	UR縦文、沈縫、刺突	多含長石・砂粒	普通	にぶ揚	裏ミガキ
508	IA/A-9	IV上	深鉢形	縦之内	UR縦文、沈縫、刺突	長石・砂粒	普通	にぶ赤褐色	裏ミガキ
509	IA/B-9	IV	深鉢形	縦之内	UR縦文、沈縫、刺突	長石・砂粒	普通	にぶ桜	裏ミガキ
510	IB/B-16	埋没谷	深鉢形	縦之内	UR縦文、沈縫、刺突	長石・砂粒	普通	にぶ赤褐色	裏ミガキ
511	IA/B-9	III	深鉢形	縦之内	沈縫	長石・砂粒	普通	明赤揚	
512	IA/B-9	III下	深鉢形	縦之内	沈縫	長石・砂粒	普通	にぶ揚	
513	IA/B-9	IV	深鉢形	縦之内	沈縫	長石・砂粒	普通	明赤揚	
601	2A-6	IV	深鉢形	五頭ノ台?	UR縦文	多含細長石・雲母	普通	桜	
602	IA/B-6	IV	深鉢形	五頭ノ台?	UR縦文	多含細長石・雲母	普通	桜	
603	IB/C-18	IV上	深鉢形	五頭ノ台?	UR縦文	多含細長石・雲母	普通	にぶ揚	
604	IA/B-5	IV	深鉢形	五頭ノ台?	UR縦文	細長石・多含雲母	普通	にぶ赤褐色/灰赤	
605	2A-4-5	IV-III下	深鉢形	縦之内?	UR縦文	長石・砂粒	精軟質	にぶ黄褐色	
606	2A-5	III下	深鉢形	縦之内?	UR縦文	長石・砂粒	精軟質	桜	
607	IA/B-11	IV	深鉢形	縦之内?	UR縦文	粗・多含石英・長石・砂粒	精軟質	にぶ黄桜	
608	IB/C-17	III下	深鉢形	縦之内?	UR縦文	多含細長石・砂粒	普通	桜	
609	IB/B-17	III下	深鉢形	縦之内?	UR縦文	粗・長石・砂粒	普通	にぶ黄褐色	スヌ付
610	IB/B-17	埋没谷	深鉢形	縦之内?	UR縦文	粗・少含砂粒	精軟質	灰黄褐色	スヌ付

第30図 土器拓影図(5)

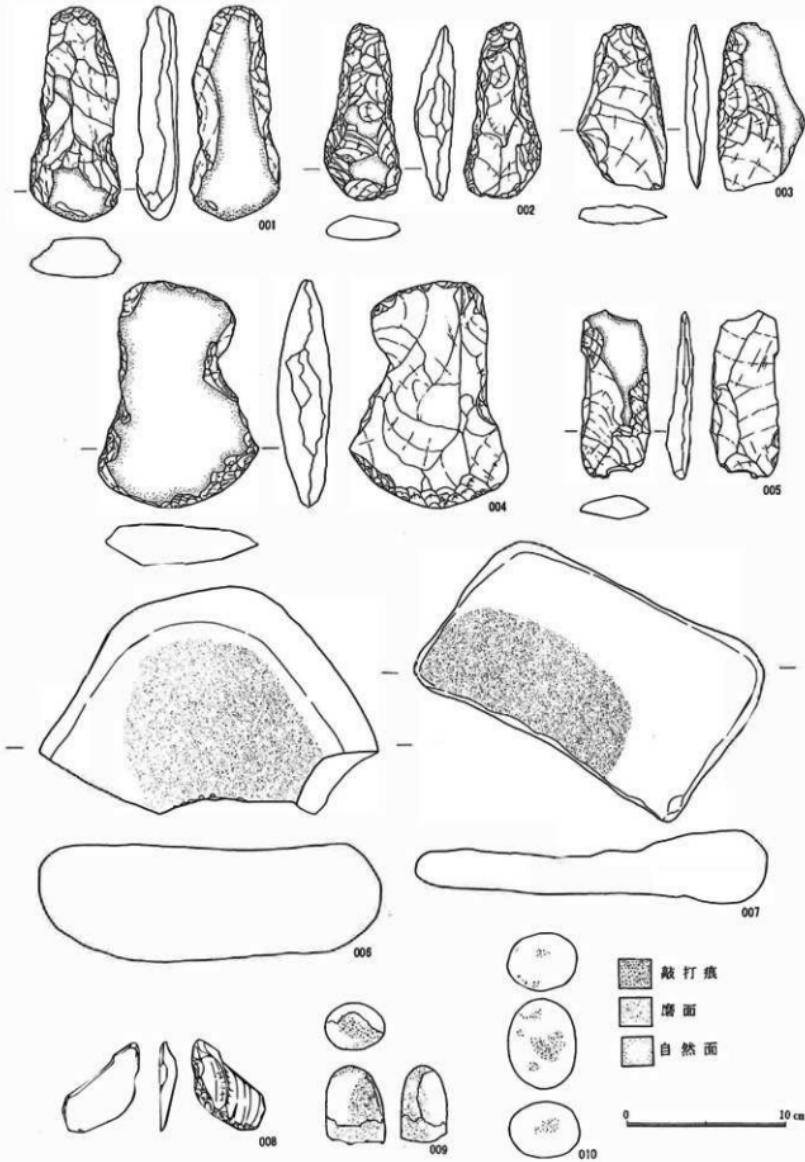
## 縄文が施される土器



No.	出土区	出土層	器種	型式	文様	胎土	焼成	色調(表/裏)	備考
611	IB/B-17	埋没谷	深鉢形	縁之内?	U彫文	砂粒、少含雲母	普通	にぶ理	スヌ付
612	IB/B-16	埋没谷	深鉢形	縁之内?	U彫文	少含長石・砂粒	普通	にぶ理	裏ミガキ
613	III	下	深鉢形	縁之内?	U彫文	細砂粒	稍軟質	にぶ黄理	
614	IA/B-9	III	深鉢形	縁之内?	U彫文	長石・砂粒	稍軟質	理	
615	IB/C-17	埋没谷	深鉢形	縁之内?	亂彫文	細石英・長石・砂粒	普通	にぶ理	
616	IB/B-17	埋没谷	深鉢形	縁之内?	U彫文	長石・砂粒	稍軟質	にぶ理	
617	IA/B-9	FP1堆積面	深鉢形	縁之内?	U彫文	多含石英・長石・砂粒	稍軟質	にぶ理	口縁部
618	IA/B-9	IV-PP1堆積面	深鉢形	縁之内?	U彫文	長石・砂粒・少含雲母	稍軟質	にぶ理	
619	IB/C-18	III	深鉢形	縁之内?	U彫文	長石・少含細石英・角閃	稍軟質	明黄理	
620	IB/C-18	III-IV	深鉢形	縁之内?	押引	多含石英・長石・砂粒	普通	理	口縁部、口縁ミガキ
621	IB/C-18	III	深鉢形	縁之内?	押引	多含石英・長石・砂粒	普通	にぶ理	口縁部、口縁ミガキ
622	IB/C-17	III~IV	深鉢形	縁之内?	押引	多含石英・長石・砂粒	稍軟質	にぶ理	口縁部、口縁ミガキ
623	IB/C-17	III~IV	深鉢形	縁之内?	押引	多含石英・長石・砂粒	稍軟質	理	
624	IB/C-17	III~IV	深鉢形	縁之内?	押引	粗石英・長石	稍軟質	にぶ理	
625	IB/C-18	III下	深鉢形	縁之内?	押引	粗長石・砂粒	稍軟質	理	
626	IB/B-18	IV	深鉢形	縁之内?	押引	多含石英・長石・砂粒	普通	にぶ黄理	
627	IB/C-18	IV	深鉢形	縁之内?	押引	多含細長石・砂粒	稍軟質	理	
628	IA/B-4・確認調査	IV	深鉢形	五頭ヶ台?	次模?	多含石英・長石・雲母	稍軟質	にぶ赤褐色/にぶ黄理	底部、I A区内
629	IA/B-3	IV	深鉢形	五頭ヶ台?		粗・石英・雲母・多含砂粒	普通	にぶ赤褐色	底部(後2.2cm)

第31図 土器拓影図(6)

ワラビ平遺跡



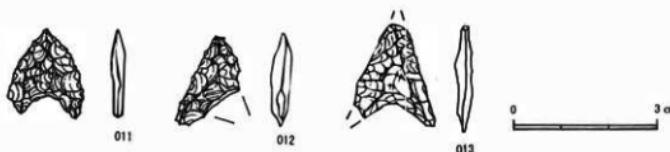
第32図 石器実測図(1)

五領ヶ台式期と思われる縄文が施された土器は601～604で、節目が細かい斜方向の縄文がみられる。この縄文の施される様子や雲母等を含んだ胎土の特徴から五領ヶ台式土器に由来するものと思われる。また、無文の土器底部片628～630も五領ヶ台式土器と類似した胎土であり、また、629の底部がやや反り気味に立ち上がる形状は、五領ヶ台Ⅱ式の特色を反映したものであると思われる。

堀之内式期と思われる縄文が施された土器は605～619で、粗い縄文が施される605～610や、裏面にミガキが認められる612、無節縄文が施された616・619がある。いずれも縄文の施される様子が本市に所在する淹戸遺跡等で出土する堀之内式期の粗製土器の縄文と類似していることから、これらも堀之内式期に併存したものであると思われる。また、620～627は蔓状の繊維の折り曲げ面で土器表面を右下方向に連続して押引いた施文方法で、堀之内式期に特有の付加条縄文土器の施文具と同様の蔓を用いたものと思われる。この口縁部片である620～622には口縁にミガキが認められる。無文の口縁部片である631・632にもミガキが施されており、これは堀之内式期にみられる要素の一つであるように思われる。

## 2. 石器

石器(第32・33図)は、石斧(001～005)、石皿及び台石(006・007)、石匙(008)、磨石及び敲石(009・010)、石鐵(011～013)と認められる数種類の石器13点が出土している。各石器の法量は観察表に示してある(第1表)。



第33図 石器実測図(2)

No.	名稱	出土区	出土層	石材	色調	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
001	打製石斧	I/A-B-1北	擾乱	珪質灰岩か電球灰岩	灰	13.2	5.7	2.7	196.0	短圓形(やや多頭)
002	打製石斧	I/A-B-5	IV	頁岩(カムフラージュに近い)	灰	11.0	4.8	2.5	130.9	短圓形
003	打製石斧	I/A-B-3	IV	砂岩	灰	10.3	5.7	1.4	81.5	短圓形、1/4欠
004	打製石斧	I/A-B-5	IV	砂岩	灰	14.1	9.9	3.4	468.0	分脚型
005	剥片	I/A-B-5	IV	砂岩	灰	10.5	4.4	1.8	81.0	短圓形を意図したか
006	石皿	I/A-B-9	PP1側認面	玄武岩	灰黃	(15.1)	(21.3)	7.0	(3320.0)	多孔質
007	台石か石皿	I/A-B-9	PP1側認面	玄武岩	灰黃	(13.4)	(21.9)	4.5	(1480.0)	多孔質
008	石匙	I/A-B-9	IV	頁岩	灰白	5.6	4.7	1.2	20.7	
009	磨石	I/A-B-5	IV	砂岩	村一黄	(4.8)	3.7	3.0	72.7	
010	敲石	表採		砂岩	灰黃褐色	5.7	4.2	3.5	117.7	1/2欠
011	石礫	2A-4	IV	脚岩	暗灰	1.8	1.6	0.3	0.6	凹基無茎
012	石礫	I/A-B-3	IV	脚岩	黑	1.9	(1.3)	0.5	0.7	凹基無茎
013	石礫	I/A-B-7	IV	頁岩	灰白	2.2	(1.7)	0.4	1.2	凹基無茎

第1表 石器観察表

石斧は5点出土しており、全て打製石斧である。その形態的特徴については、全長が最大幅の2倍以上あるものや、全長が最大幅の2倍に満たないもので刃部幅が基部幅の1.5倍に満たないものを「短冊形」と呼び、中央部両端に大きな抉りが存在し、この抉りの上下両側がほぼ均等に調整加工が施されるものを「分胴形」と呼ぶことにする。001は珪質凝灰岩か凝灰質砂岩にちかい石材を使用し、形態はやや多頭石斧に似た短冊形を呈している。また、頭部先端に敲打痕が認められる。002は熱変質を受けてホルンフェルス化した頁岩を素材としている。この石材は、本遺跡より北西へ約10km離れた富士山西麓に接する天子山地において産出されるものであることが知られている。その石質によって石器表面はレイヤー状で、粗く脆い印象を与えていた。形態は頭部より刃部が若干幅広くなるが、短冊形に含められる。003は砂岩製で、刃部・頭部とも欠損していると思われ、調整具合などを観察した結果、短冊形であったものと考えられる。004も砂岩製であるが、その石質は泥に由来する黒色粒子が目立つ。形状は片側が欠損しているものの、もう片側の抉りが顕著であることから分胴形とみられる。分胴形の出土は縄文時代中期終末から後期にかけてその数を増やすことが知られている。005は石斧の未製品とみられる砂岩の剥片であるが、その形状から短冊形を意図したかのような様子を窺わせている。

006と007はいずれも磁性を帯びた多孔質の玄武岩製で、006は厚みのある平坦な石が、007は比較的薄い扁平な石が使用されている。両者とも片面のみが使用されており、その使用面は若干の丸みをもって陥没しているため、使用頻度の低い石皿や台石の用途を想定することができる。

008は石匙で、石材は頁岩が使用されている。刃部が曲線で、縁部の片面だけを軽い敲打によって調整している。つまみ部分も敲打により作り出されている。形態を判断するために重要な箇所が欠損しているため横形か縦形かは不明である。

009・010は手に収まる程度の大きさの円盤で、石質は砂岩である。009は欠損しているが長円形を呈していたとみられ、側面の片側に集中して磨耗する使用面が確認でき、頭部(端部)には弱い敲打痕が認められる。敲石に併用される磨石であると思われる。010は側面片側と両端部に敲打痕のみが認められるもので、手ごろな大きさの自然碟をそのまま敲石として簡易的な用途で使用したものであるとみられる。

石鎌は3点出土しており、いずれも基部が「へ」の字状に抉入される凹基式石鎌に分類されるものである。011は透明度の高い黒曜石が使用され、基部は比較的湾曲気味に抉られ、側片部は弧状となって丸みをもつが、薄く鋭い断面形を特徴としている。012は黒曜石製で、側片部は直線的である。断面は比較的肉厚に作られている。013は頁岩製で、側片は直線的であり、やや長身気味の形態を呈している。

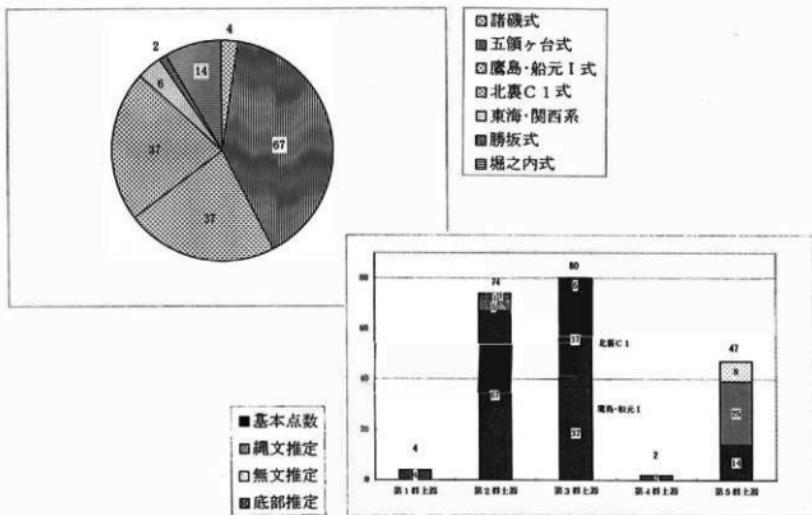
## 第IV章 調査のまとめ

今回のワラビ平遺跡の発掘調査において出土した土器327点のグリッド別分布状況を示すと第34図のようになる。これは当調査区が丘陵斜面上に位置する地形的条件と合致するものとみられ、斜面が一旦緩やかになりテラス状となる箇所や、褶曲を繰り返す地形の起伏のなかで窪地となる箇所に集中するようである。このことから、土器がいわゆる流れ込み作用によって浮動した結果である様子を示している。

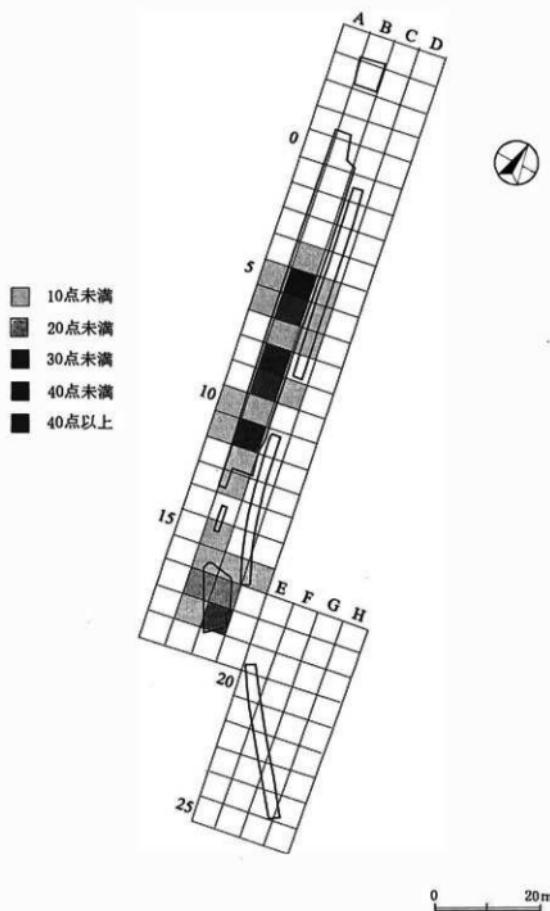
ワラビ平遺跡で出土した土器は、5群に分類され、第1群土器は諸磯式、第2群土器は五領ヶ台式、第3群土器は鷹島・船元I式や北裏C1式に代表される東海及び関西系、第4群土器は勝坂式、第5群土器は堀之内式と各土器群を各土器型式に分類することができる。

この分類された各土器型式のなかで具体的な年代観が示されるものを、AMS法による<sup>14</sup>C年代測定法に基づいたデータ（国立歴史民俗博物館2003）を踏襲して挙げると、諸磯式はB.C. 4000～3750（縄文時代前期後葉）、五領ヶ台式はB.C. 3520～3430（縄文時代中期初頭）、勝坂式はB.C. 3430～2950（縄文時代中期中葉）、堀之内式土器はB.C. 2340～1820（縄文時代後期前葉）という暦年代が与えられている。

これらの出土数を比較すると、第2表のような状況となる。これにより五領ヶ台式土器と、鷹島・船元I式や北裏C1式にみる東海及び関西系土器、そして堀之内式土器の3土器群が本遺跡出土土器の主体を為していることが分かる。また、これら3土器群の出土数と分布状況を見分けることによって、本遺跡の時代的変遷と画期を見出すことができる。

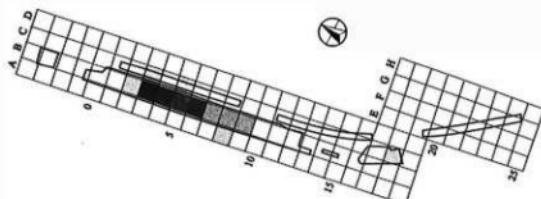


第2表 土器分類別出土数

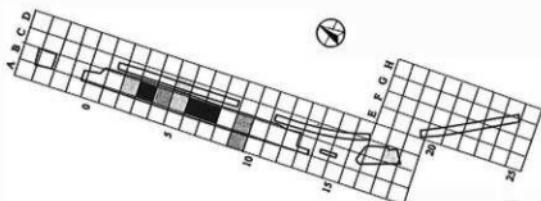


第34図 土器出土状況（全体）

まず、これら3土器群の調査区内の出土分布状況を確認したい(第35図)。五領ヶ台式土器は、1A区B-3～4の北から南へ下る緩斜面とテラス状平坦地を中心B-6～8の谷部にかけて分布している。また、東海及び関西系土器も1A区B-3の北から南へ下る緩斜面とテラス状平坦地からB-6～7の谷部を中心とした出土分布状況を示し、この2つの土器群の出土分布状況が類似していることが分かる。鷹島・船元I式土器や北裏C1式土器が五領ヶ台式土器と共に伴することは、県内では駿東郡長泉町の柏塙遺跡(長泉町教委1992)や賀茂郡河津町の見高段間遺跡(河津町教委1980)等において同様の関係を窺い知る

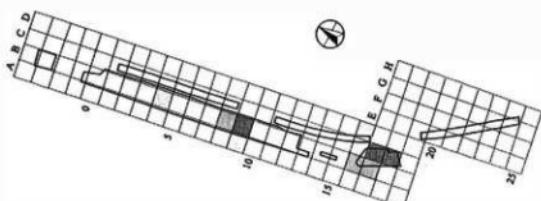


五領ヶ台式土器



東海及び関西系土器

- 1点のみ
- 5点未満
- 10点未満
- 15点未満
- 15点以上



堀之内式土器 (併行含む)

20m

第35図 土器出土状況 (分類別)

ことができ、富士宮市内でも上石敷遺跡(富士宮市教委1985)の出土例などからも知られており、年代的にも、この2つの土器群が併存したものであるとみることができる。

五領ヶ台式土器は南関東地方を中心に中部・東海地方へと分布する土器型式であるが、これと共に伴する鷹島・船元I式土器は瀬戸内地域を中心に西は中国・四国地方、東は岐阜県など東海地方西部へと分布し、北裏C1式土器は岐阜県美濃地方に標式遺跡があり、東海地方や鷹島・船元I式的分布圏へとその拡がりをもつことが知られている(増子1981)。

この異なる系統を辿る土器同士の交易が認められるのは、市内のこれまでの出土例は、

上石敷遺跡や滝戸遺跡(富士宮市教委1997)など潤井川またはその支流沿いに展開する遺跡であり、ワラビ平遺跡もその南縁を村山沢が流れることで共通している。しかし、上石敷遺跡や滝戸遺跡が標高120~130mの微高地に立地し、市南部に位置することから海からの交易を視野に入れることも可能であり、周辺地域との交易は比較的容易であったと考えることができるのに対し、ワラビ平遺跡は市北部の標高300m以上の富士山麓地域の山地に立地しており、陸路以外の連絡手段をもたない遺跡であると考えられる。三遺跡が異なる交易ルートをもつことも考えられるが、市内に数少ない縄文時代中期初頭土器出土例において、極端に言えば異なる環境の遺跡間で、異系統の土器の併存が共通してみられるることは、同時期の遺跡分布を知るうえで注目できる点である。

堀之内式土器は、1A区B-8~9の東から西へ下る傾斜地や谷部と、1B区にある埋没谷中やその南岸、埋没谷より南側の南東から北西へ下る緩斜面に集中して分布していることが挙げられ、前述の二者とは異なる様相を示している。堀之内式土器に関しては、分布を示すための実数が前述の二者と比較して少ないため、これと併行するとみられる粗縄文土器や無文土器を付加しても同様の結果が得られる。ちなみに市内における堀之内式期の有力遺跡に滝戸遺跡がある。

以上によって本遺跡の簡潔な変遷を想定すると、遅くとも縄文時代前期末葉の諸磯c式期には遺跡における活動が開始され、縄文時代時代中期初頭の五領ヶ台式期に最初の画期を迎えることになる。この画期は先に述べたように東西の地域からもたらされた土器の併存があった時代である。この縄文時代中期初頭の本遺跡における活動は、中期中葉までであり、それは勝坂式土器の希薄な出土に反映されている。そして、縄文時代後期の堀之内式期に再び活動が開始されるのであるが、これを二度目の画期として捉えることができる。その土器の分布状況から谷より北西で分布が認められた五領ヶ台式期とは異なり、堀之内式期は谷を挟んで南東側で展開したのではないかと推定できる。しかし、その展開規模は五領ヶ台式期と比べて散漫な状態であり、滝戸遺跡のように有力な遺跡規模ではなかったようと思われる。

今回の調査区は舌状台地の末端にあり、また起伏を伴った変化に富む地形であることから集落を経営するには困難な地点であるといえる。しかし、今回の調査成果から、富士山西南麓地域の北限近くにおける新たな遺跡経営が縄文中期初頭と後期前半にみられることが確認できた。富士根北地域には中村谷戸遺跡や社領遺跡など年代等の実態が解明されていない遺跡が周辺に立地していることを踏まえて、当地域に小泉地区や大岩地区と異なる空間的な遺跡分布地域の存在の可能性を示す成果が得られたといえる。縄文時代研究の新たな課題として、今後の調査機会と関連資料の整理と研究がすすめられてゆくことに期待したい。

## &lt;文献&gt;

河津町教育委員会1980『河津町見高段間遺跡』

国立歴史民俗博物館2003『炭素14年代測定と考古学 国立歴史民俗博物館研究業績集』

長泉町教育委員会1992『柏原遺跡』

富士宮市教育委員会1985『上石敷遺跡』

富士宮市教育委員会199『滝戸遺跡』

増子康真1981「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階(本文編)補足改訂版』

塚本古墳第2次

## 第Ⅰ章 発掘調査の概要

### 1. 調査の経緯

塚本古墳は富士宮市南部の星山谷に形成された河岸段丘面北端に所在する（第1図）。その調査の歴史は、平成16年8月に実施された第1次発掘調査とその事前に行なわれた確認調査が実施される以前は、分布調査によって古墳の存在が記されており、『富士宮市史』などで本古墳は、富士宮市内有数の良好な残存状態の円墳である大室古墳や別所稻荷塚古墳と同様に古墳時代後期の時代設定がされてきた（植松1971）。

過去の分布調査の記録とともに本古墳の近年の改変過程を紹介すると、昭和48年（1973）1月の分布調査では「マウンド周辺は削除されてすでに原形をとどめてはいない」と記され、円墳状に形を削り取られている様子が伝えられている。さらに、昭和54年（1979）3月の分布調査の記録では、そのマウンドの周間に崩落を防ぐためか、石垣が積み上げられ、頂上に祠が祀られている様子がわかる。

墳丘は、その地権者である塙川氏が代々妙見菩薩信仰の祠宇を祀る塚として所有され、長い年月にわたって家屋の建築等その土地の造成とともに形を変え、第1次発掘調査時には平面が長方形の長軸9.9m、短軸7.1m、高さ1.8mを測る小丘となっていた。

第1次発掘調査では、小丘の周辺に広がる墳丘盛土の残存や周濠（墳丘堀）の確認などで現況を大きく上回る規模を有することが判明し、月の輪平遺跡をはじめとする周辺遺跡の状況や出土遺物などから古墳時代前期の大形古墳である可能性が示され（渡井2004）、墳丘周辺の状況は既知の墳丘部分より広範囲の規模をもつことが推定されることから、周辺地形を踏まえて調査を実施することの必要性が出てきた。

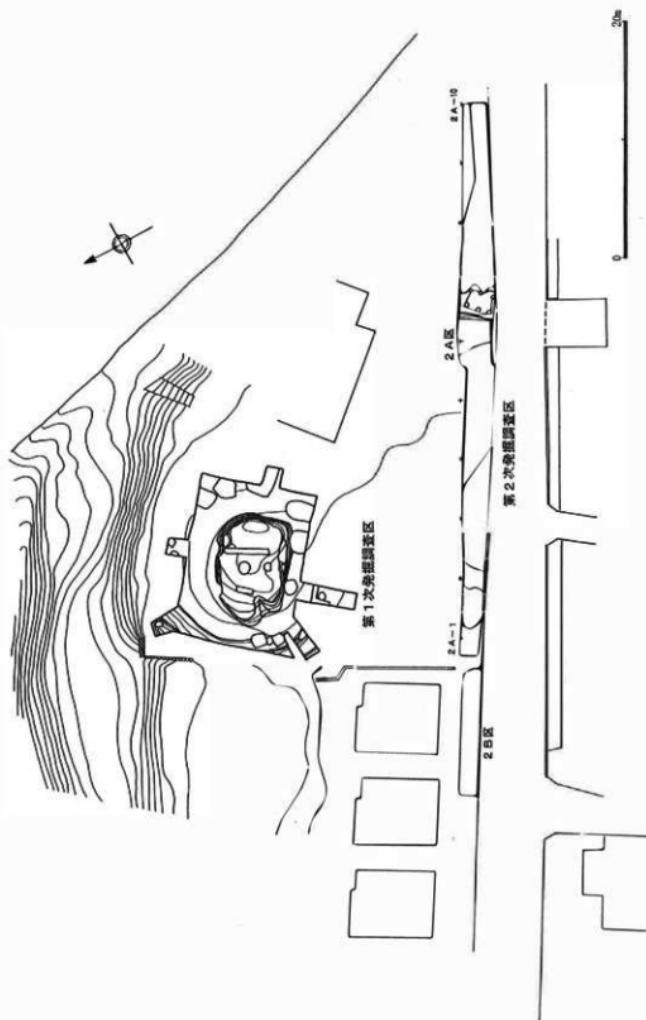
今回の塚本古墳の発掘調査は、市道改良舗装工事に伴うもので、道路拡幅部分となるその対象地は、平成15年8月に実施された第1次発掘調査の調査区であった墳丘残存部分のすぐ南側に位置する（第36図）。

### 2. 調査の経過

塚本古墳の第2次発掘調査は、調査以前は宅地や畑地として利用されていた103.5m<sup>2</sup>に対して実施された。第1次発掘調査区から南側へ約15m離れた宅地と道路に挟まれた延長約60mの細長い区画であった。

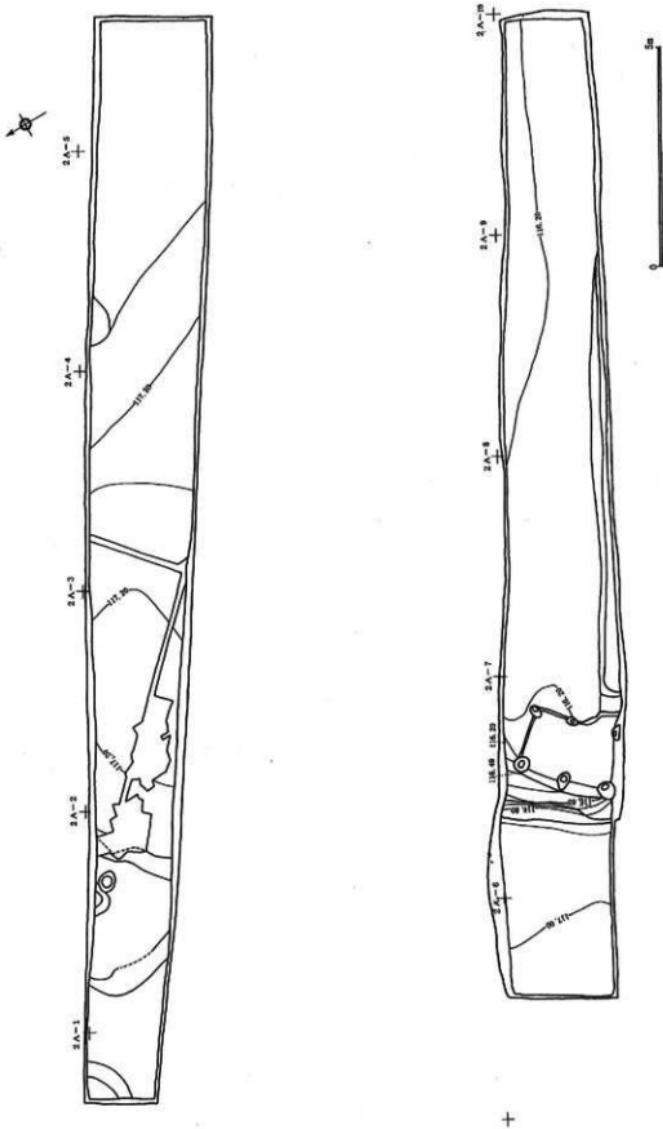
調査区は水道栓を挟んで東側を2A区、西側を2B区と呼称し、北側の壁沿いに5mごとに杭を打ち、このN-61°-Wのラインに垂直になるようグリッドを設定し、2A区はその西側より2A-1～2A-10と番号を付け、グリッド名は北西側の杭番号に準じた（第37図）。2B区はそのままトレンチとして取り扱うこととした。

発掘調査は平成16年12月4日より2A区で開始したが、調査の進行は民家の出入口の確保に注意を払わなければならないため、まず2A-1～2A-5の西半分から掘削することにした。表土除去は省力化のため重機で行ない、安全のため防護柵を設置した。



第36図 調査位置図

第37図 調査区全体図（2A区）



その翌日より、人員による作業を開始し、表土除去後の表面精査を中心に調査が進められ、開発行為などによる搅乱や大沢ラビリ、クロボクなど各層を確認した。古墳に係る遺構の検出を本題とする調査であり、また工事もその深さまで及ばないことから、クロボク層以下が確認された時点で掘削は止め、表面精査を重点的に行なった。

また、民家への車両等の出入口を確保する為、2A-5・6付近を現状のままにしておき、調査区は2A-6から東西に二分して掘削して調査することにした。

12月12日には2A区の東半分に着手し、東側の表土は隣接する畑地を保護するために人力で行ない、その途中で支障となった廃土と岩石の処理のために重機を導入した。12月の中旬にはGPS(全地球無線測位システム)による基準点の設置が行なわれた。この年の作業は12月25日まで行なわれ、正月休み明けに車両出入口の移しかえのため再び重機による表土除去と出入口部の工事を行なった。

2B区の掘削は、休み明けの平成16年1月5日より開始され、2A-6より東側の表土除去と並行して行なわれた。

調査の進行がほぼ終盤に差し掛かった1月10日には、富士宮市文化財保護審議会委員の植松章八氏と、愛知大学の加納俊介氏に第1次発掘調査の成果、関連資料、現地を実際に見て頂き、両氏の意見を賜った。

そして、1月14日に現地における調査のすべてを終了し、整理作業へ取り掛かった。

後日、工事の都合により拡幅される開発区間が発生したため、2月18日と27日の2回の立会い調査を行なった。2A区の北西側と南東側の両端周辺がその対象であったが、はじめに立会いをした北西側では既に配管工事等の際に掘削を受けているため、道路基礎の直下より60cmでクロボク層が露出するが、宅地側に沿って30~40cmのベルト状に層が残存しているだけの状況であった。また、二度目の立会いの南東側部分もローム質土層が道路基礎の直下80cmで露出し、宅地側に沿って幅20~30cmのベルト状となり残存しているだけで、遺構等の確認まで至らなかった。

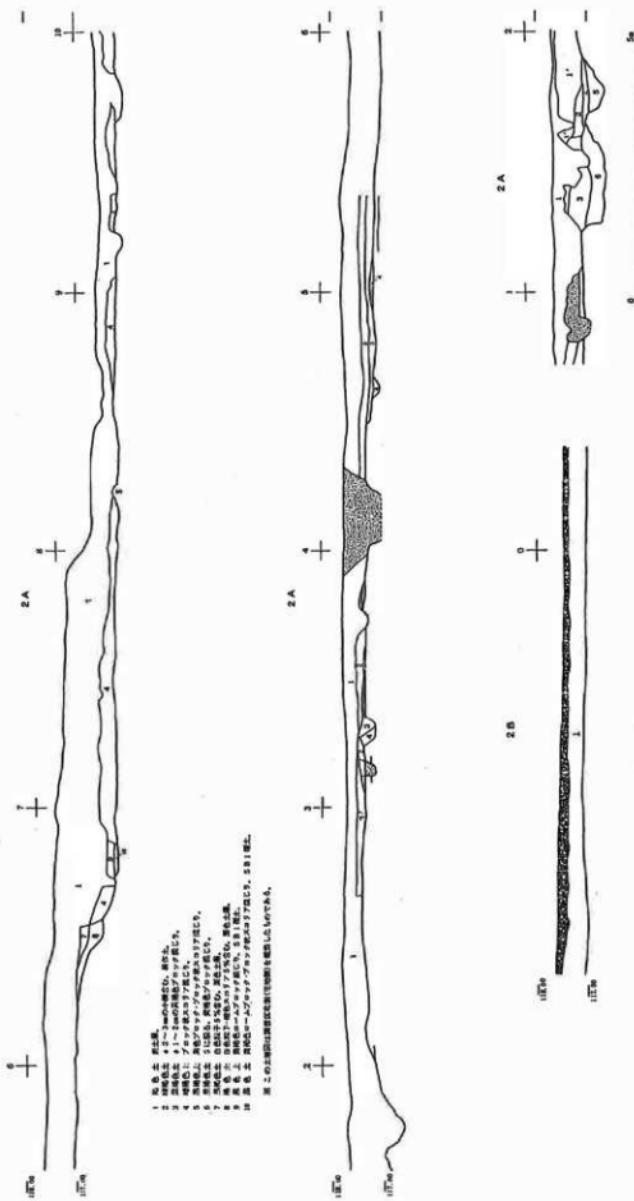
塚本古墳の第2次発掘調査に係る一連の作業は、本書の刊行を以て終了している。

### 3. 層序

塚本古墳第1次発掘調査によって、当遺跡における標準的な層序は月の輪遺跡群に代表される星山地区の基本層序に準じることは確認されているが、丘陵端部に位置することから、各地点によって層厚や堆積状況に差が生じている。

第2次発掘調査で確認された層については、これに併せて積極的な開発行為による本来の層序への影響がかなりの部分みられた。それは宅地内に位置する北側壁と道路に接する南側壁においても表れており、北側壁のほうが比較的良好な状態であった。そこで、調査区を横断する北側のグリッド杭2A-1~2A-10を基準とするラインを設定して土層図を作成し(第38図)、その層序を発掘調査時の判断材料とした。

その観察によると、上層から表土→(旧)耕作土→人為的な盛土または埋土→地山(大沢ラビリ層、クロボク層、栗色土層)となる。上位2層は近現代の瓦礫や陶磁器片を含む。人為的な盛土は黄褐色ブロックや黒色ブロックなどを比較的多量に含み、短期間に造成された様子を示している。



第38回 調査区土層図

地山までの層の堆積状況を端的に解説するのは難しいため、確認された各層の詳細を述べると以下のとおりとなる。

第1層 暗褐色土 (Hue7.5YR4/4)	表土。宅地造成に伴う土砂や耕作土などで構成される。この層の範囲で黄褐色ブロック混じりの耕作土層を1'とした。
第2層 暗褐色土 (Hue10YR3/3)	旧耕作土。φ2~3mmの小礫を多量に含む。
第3層 黒褐色土 (Hue10YR3/2)	人為的な盛土。φ10~20mmの黄褐色ブロックや黒褐色ブロック混じりの層。
第4層 暗褐色土 (Hue10YR3/4)	人為的な盛土。ブロック状の橙色スコリアが混じり、部分的に黄褐色ブロックや黒色ブロックが少量混じる層。
第5層 黒褐色土 (Hue10YR2/2)	人為的な埋土。黒色ブロックとブロック状橙色スコリアが混じる層。
第6層 黒褐色土 (Hue10YR2/2)	人為的な埋土。第5層に似るが、大粒の黄褐色ブロックと黒色ブロックが混じる。
第7層 黒褐色土 (Hue10YR3/2)	栗色土層の暗色部分。白色粒子を5%含む。
第8層 暗褐色土 (Hue10YR4/4)	栗色土層の明色部分。細かい白色粒子・橙色スコリアを5%含む。
第9層 黒色土 (Hue10YR2/1)	S B 1(第Ⅲ章参照)の覆土。黄褐色ローム質土に由来するブロックが混じる。しまりが比較的強く、硬化している。第4層とは堆積時期を異にするとみられる。
第10層 黒色土 (Hue10YR2/1)	S B 1の覆土。黄褐色ロームブロックとブロック状橙色スコリア混じりの層。第9層と同様しまりが比較的強く、硬化している。

調査区西側の2A-1~7付近の基盤となる層は、年代の新しい順に列挙すると、大沢ラビリ層→クロボク層→栗色上層となる。大沢ラビリ層は、弥生時代以降の造構確認面となる層であり、古墳時代前期を対象とする本遺跡の調査においても重要な層といえる。富士宮市の北部地域では赤や橙色のスコリアが濃密かつ厚みのある堆積状態で観察できるが、南部地域にある本遺跡調査区内では層厚20cm程度で、後世の土地開発のためか残存状況も良好ではなかった。主体となるのはクロボク層であり、地形の微妙な起伏によって大沢ラビリ層や栗色土層が展開している。

調査区東側の2A-7付近~10までの基盤は、にぶい黄橙色(Hue10YR6/4)を呈した硬質な砂礫層であり、これは当地域でみられる古富士泥流の堆積物であると思われる。西側において確認された第2・3層については、車両出入口であった2A-5・6付近を境にして造成痕が著しい状態に変化し、分層が困難となるため第1層に含めて調査した。

2B区の基盤はクロボク層であるが、造成時の削平によって本来地形が高くなっていた箇所では栗色土層が表土直下で露出している。

#### <文献>

- 植松章八1971「第一章 第四節 月の輪平遺跡のあとさき」『富士宮市史 上巻』富士宮市  
渡井英善2004「第IV章 調査の総括」『塚本古墳』富士宮市教育委員会

## 第Ⅱ章 周辺の遺跡

塚本古墳の調査に関連して、周辺遺跡の内、南部谷戸遺跡と月の輪下遺跡における発掘調査の記録を再録する（富士宮市教委1981）。今回報告しているそれぞれの遺跡から出土した遺物の一部には報文に掲載されなかったものも含んで、その内容を充実させているが、主要な遺物についてはすでに公表されているものが占めており、個々の遺物の詳細なデータについては報文に掲載したものとして割愛する。また、遺構についても同様の取り扱いである。ここでは、2つの遺跡が塚本古墳と時代的な関連性を持つものとしてその概要を説明することとする。

### 1. 南部谷戸遺跡

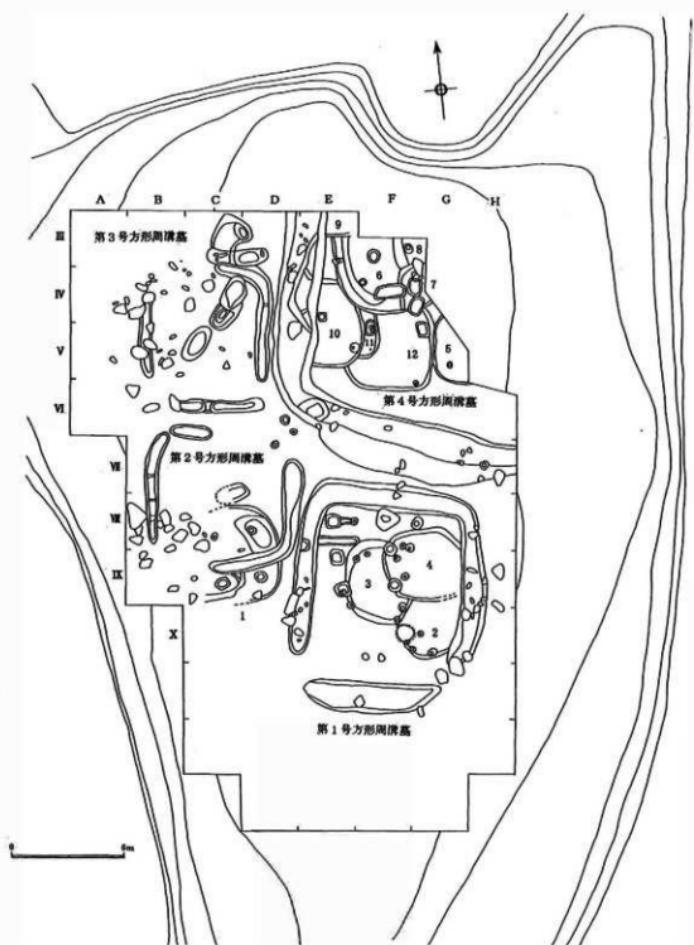
星山放水路建設に伴う一連の発掘調査の中で、昭和47年（1972）に実施され、堅穴住居址12軒、方形周溝墓4基などが発見されている（第39図）。遺跡は、星山丘陵内に開析された星山谷に面した河岸段丘上の位置しており、標高113mを測る。塚本古墳とは星山谷を挟んで対峙する位置関係にあるが、5mほどの比高差を持って塚本古墳の位置する丘陵を見上げる景観を示す。

丘陵の縁辺部に対する発掘調査で発見された遺構は、堅穴住居からなる集落と方形周溝墓が群構成を示す墓域であり、集落の廃棄後に墓が築かれている様子が判明している。

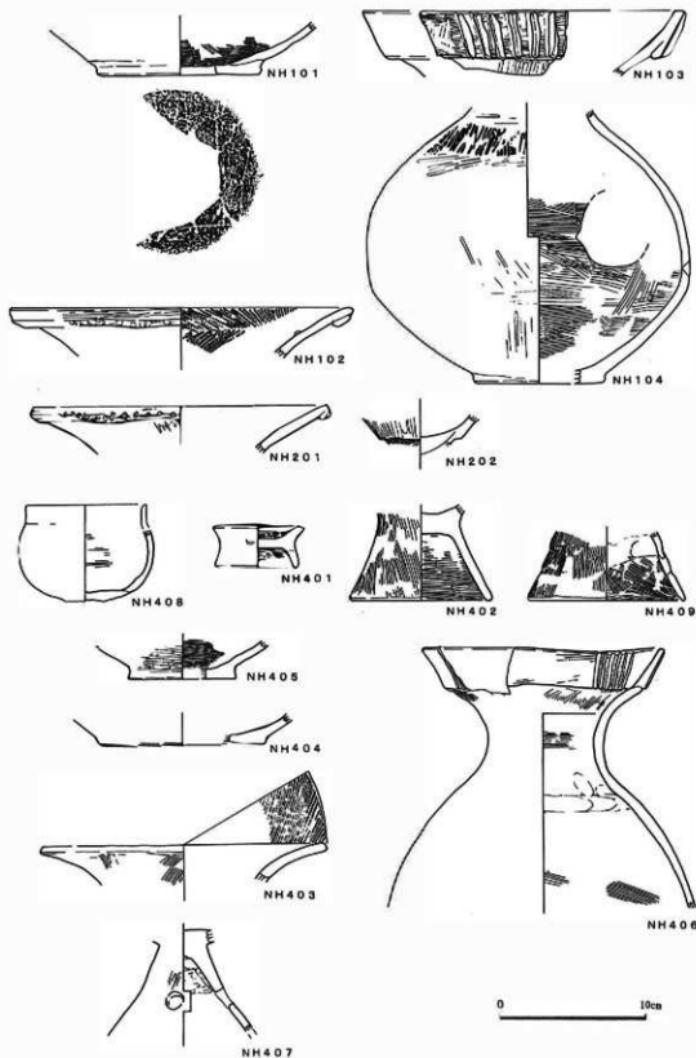
方形周溝墓は、それぞれが溝を共有することはなく単独で築かれ、共通する軸方向を持つことを特徴としている。確認面の削平が進んでおり全体の形態はよく分からぬが、第1号方形周溝墓と第3号方形周溝墓は平面形長方形を示し、南東及び南西隅の溝が切れて陸橋を形成する点が共通する。最大の規模を測る第4号方形周溝墓では、幅3mを測る外側に向かって緩やかに立ち上がる大形の溝が確認されている。第1号方形周溝墓以外周溝墓の中央付近に埋葬主体となる土坑が発見されているが詳細はよく分からぬ。

遺物は、土器と勾玉、石鏃などである（第40図～第44図）。これらの内、市内ではあまり例のない大形の勾玉と有孔磨製石鏃が第3号方形周溝墓から特徴的な出土を示している。

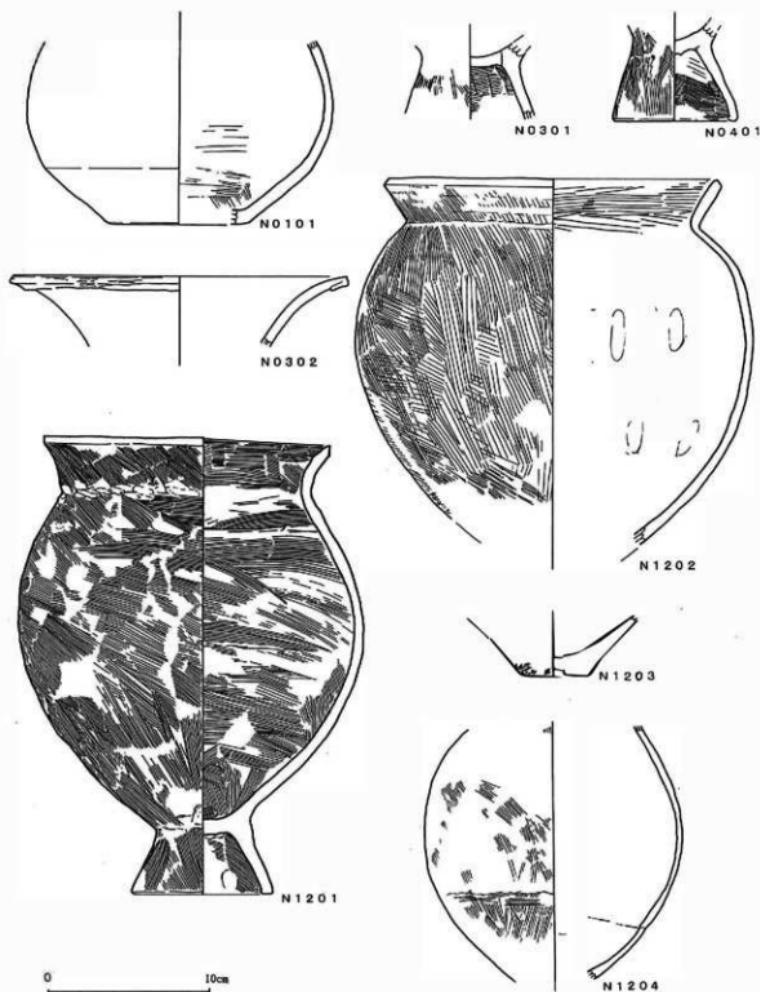
土器類は壺、甕、鉢、台、高坏で構成されており、第1号方形周溝墓と大形の第4号方形周溝墓でやや目立った出土を示している（土器実測図の中で、NHは方形周溝墓を表し、数字の百の位が遺構番号を表す。）。細かく破片化しているNH104は、胴部の張りが強まり、球形を指向する胴部で、簡略化されたL Rの斜行する縄文がその肩部に見られる壺で、胴部に焼成後に空けられた穿孔様の痕跡を見ることができる。NH401は台付甕の脚台部と同様の成形で作られた台で、小形の製品である。NH406は複合口縁壺のひとつで、幅広の粘土帯を上端に貼付することで複合部を形成している。NH407はまだ内彎する傾向を残す高坏の脚部破片である。NH408は口縁部を直立気味に作る平底の小形鉢で、口径8.3cmを測る。これらの土器類は、NH104の型式やその組成に高坏あるいはNH408の小形鉢を含む点、形骸化したNH406の複合口縁壺が残る点などから大廟I～IIにかけての年代が想定されるものである。



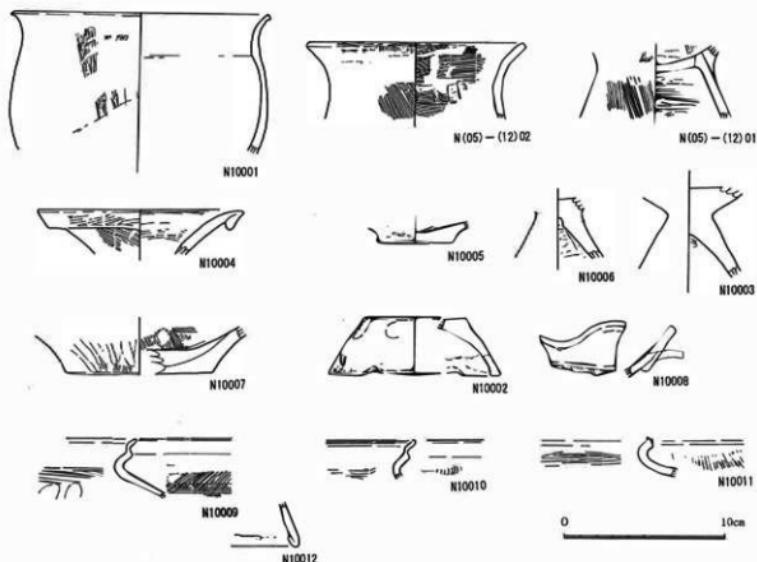
第39図 南部谷戸遺跡遺構全体図



第40図 南部谷戸遺跡出土土器実測図(1)



第41図 南部谷戸遺跡出土土器実測図(2)



第42図 南部谷戸遺跡出土土器実測図(3)

この方形周溝墓に切られる状況で発見された竪穴住居は、調査区の北東部分を中心に重複の著しい状況で発見されている。竪穴の形状も不整の円形のものから隅丸方形のものまで認めることができる。重複関係でも新しい段階に構築されたことが分かる第12号住居址は、4.4m×4.8mの規模を測る隅丸方形の竪穴住居である。

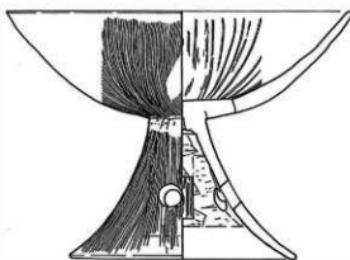
土器実測図に掲載したN1201～N1204（第41図）は、第12号住居址から出土したものである。すべて甕であるが、台付甕と平底甕が見られることと外来系土器で占められている点を大きな特徴とする。N1201は低脚の台付甕で長胴の胴部を形作る。緩やかに外反する口縁部はその端部を明瞭に面取りしており在来の型式には見られないものである。類似する胎土のN1204は、長胴の甕胴部破片である。これらは東海西部との関連が考えられる型式である。

N1202は頸部の屈折が明瞭な甕であり、口縁部の外面ヨコナデとともに端部の弱い面取りを見ることができる。胴部外面の中位以下は斜位のハケメの後タテハケメを認めることができるが、最も下位ではその素地の整形として斜方向に残るタタキの痕跡を認めることができる。このようなタタキ整形の後にハケメを施す点は、畿内における庄内式土器との

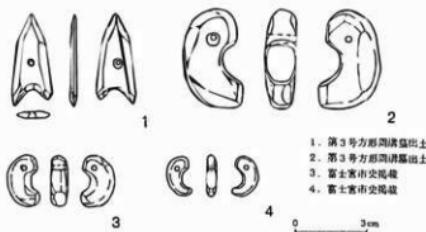
関連性を考えることができる。また、N1203も畿内第V様式系の平底甕の破片であり、畿内系の影響が窺える資料である。第12号住居址の出土土器は、東海系土器と畿内系土器の共伴する例として捉えることができる。このような系譜の異なる土器型式の共伴が著しく目立つ段階が大廓IあるいはII式期であることを考えると方形周溝墓の出土土器の型式とうまく整合していると言える。そして、S字口縁台付甕が主体とならず特異な外來系の甕が一定の出土を見せる段階が古墳時代前期の始めを規定するものと捉えられるのである（註）。

この第12号住居址を最新段階とする堅穴住居群は、N10001やN(05)-(12)02などの甕の型式（第42図）や堅穴の形態などから弥生時代後期後半から古墳時代前期大廓I・II式期にかけてのものであると捉えられる。それは、大廓II式期に居住域から墓域へと土地の利用が変化したことを表しているものと考えることができる。

このように遺跡の変遷を辿ると、第43図に掲載した高坏の存在は極めて不可解な存在として考えられるのである。この土器は、発掘調査直後の実測図にはなかった第二原図へ「第3周溝らしい」と記され、第3号方形周溝墓出土土器とされた経緯があるので、土器自体には「南部谷戸 塩川氏」と注記されている。この高坏は、大廓IV式期の在来系の高坏で、南部谷戸遺跡出土土器群の年代とは大きな隔たりが認められるものである。これらのことと総合すると発掘調査中あるいはそれ以後に南部谷戸の塩川氏が調査担当者に持ち込んだ高坏が、どのような経緯を経たのかは分からぬが、第3号方形周溝墓出土土器になってしまったのではないだろうか。



第43図 南部谷戸遺跡出土土器実測図(4)



第44図 南部谷戸遺跡出土土器実測図

発掘調査を実施した頃、南部谷戸在住の塩川氏は、富士宮市史掲載の勾玉（第44図）など遺跡に関する多くの情報を寄せられている。高坏自身の具体的な来歴は今となっては分からぬが、塚本古墳から出土している土器（富士宮市教委2004）と同時期である。それは、

単なる偶然の一一致なのであろうか。遺跡保護に大きな理解を示された塩川氏の子孫の方々が今回調査を実施した塚本古墳の地権者である。

## 2. 月の輪下遺跡

月の輪下遺跡は、南部谷戸遺跡と同様に星山放水路建設工事に伴い発掘調査が実施された遺跡で、竪穴住居址4軒、土坑1基、集石11基などが発見されている（第45図）。この遺跡の大きな特徴は、古墳時代前期の遺跡として集石遺構が数多く発見されていることである。ここには地形が作用して集石と判断される石の集積の存在も考えなければならないが特徴的な遺構の構成を示していると言える。特に、第1号住居址、第2号住居址、第5号住居址の覆土中の集石は、住居廃絶後に築かれたもので、埋没中の竪穴の窪地を利用した特異な遺構である。

竪穴住居址は、それぞれの重複関係がなく、散在して発見されている。一般的な住居と積極的に判断できない第4号住居址以外は、覆土中の集石とともに六本柱で構築され、床面に地床炉を持つ点で共通している。これらはほとんど時期差のないものと考えることができる竪穴住居群である。

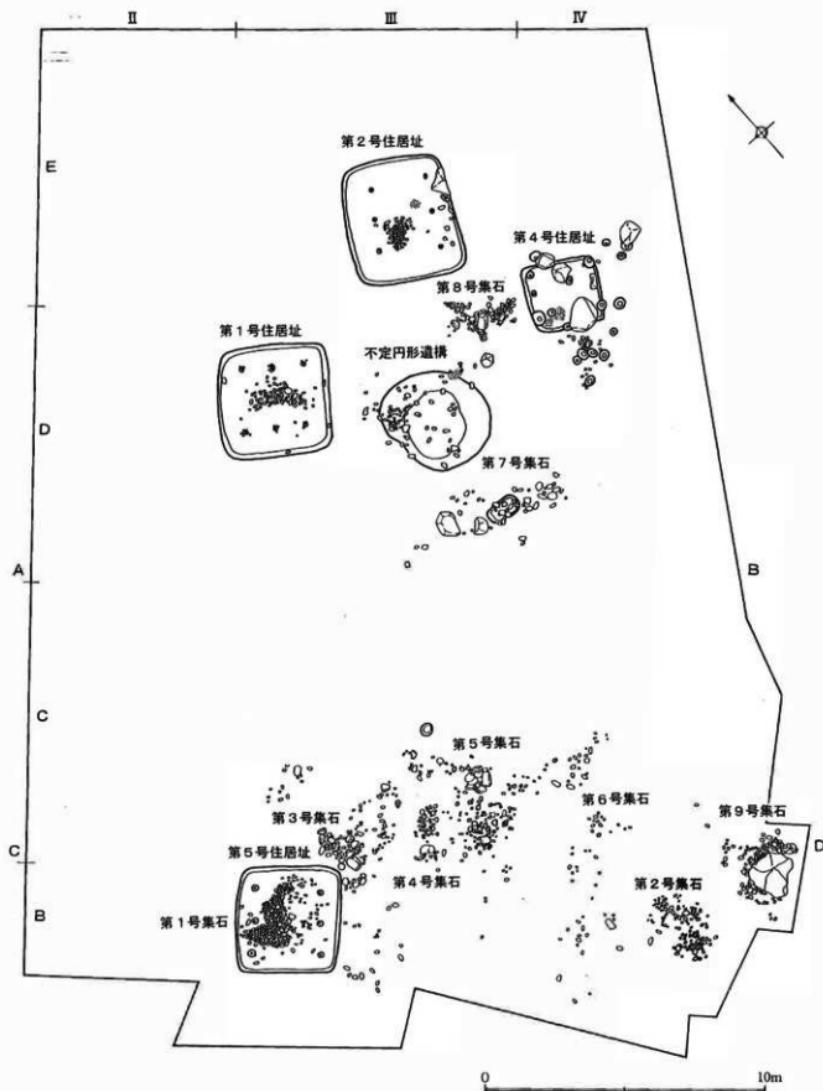
第1号住居址や第2号住居址から出土して土器は、S0101やS0102など在来系のS字甕やS0202の二重口縁壺の破片などから大廟IV式期のものと判断される（第46図）。これらにS0103やS0104などの口縁部ヨコナデ整形する海岸部の遺跡で盛行する「く」の字甕が一定量含まれる点は注目される。

他の竪穴とは異質で方形基調の第4号住居址から出土しているS0401、S0402は、在来系のS字甕であるが、その中では古相を示すもので肩部外面のヨコハケメが一部残る。また、S0403のような弥生時代後期の系譜にある「く」の字甕が出土しており、在来系のS字甕との共伴例として捉えることができるものである。これらの土器は他の住居出土土器群とは異なり、大廟III式期のものと考えることができる。

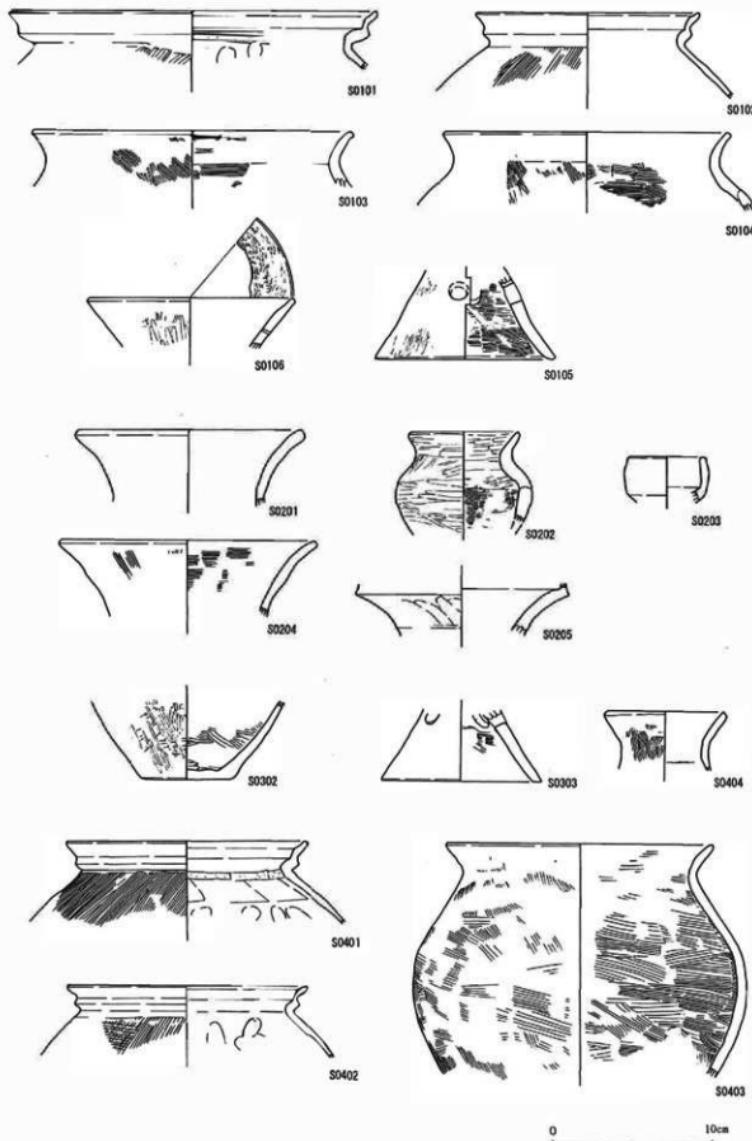
集石から出土している土器としては、大廟IV式期の二重口縁壺S10002が1号集石で発見されている（第47図）。第5号住居址の年代を想定する根拠になるものである。5号集石で出土しているS10004は、中空の柱状脚高坏で中見代I式期に比定される。外面のタテミガキとともに特徴的な形式であるが、この遺跡の終末段階に対応するものと捉えることができる。それは、隣接する丘陵上に大きな集落を形成した月の輪平遺跡の消失段階より少し遅れるものであり、月の輪遺跡群の造営期間が最終段階にその規模が非常に小さくしながらも月の輪下遺跡で確認することができる。

発掘調査中に採集された土器の内、S10013は小型壺の口縁部破片である。同型式の小型壺が塚本古墳でも出土しており、二つの遺跡が同時期であることを指摘することができる。また、S10001は、北陸系の器台で方形の透穴が認められるものである。

大廟IV式期に築造されたと考えられる塚本古墳に対する周辺の集落を考えると、月の輪平遺跡とこの月の輪下遺跡を取り上げることができる。ただし、月の輪平遺跡は継続性が強く、集落造営期間の後半段階に対応するのに対して、月の輪下遺跡では第4号住居址の廃絶後形成された集落の時期がうまく合致する。塚本古墳に最も近い場所にある集落だけに、相互に関連性があるのかも知れない。六本柱を持つ竪穴は、東国では原則として認められない特異な形態の住居である。

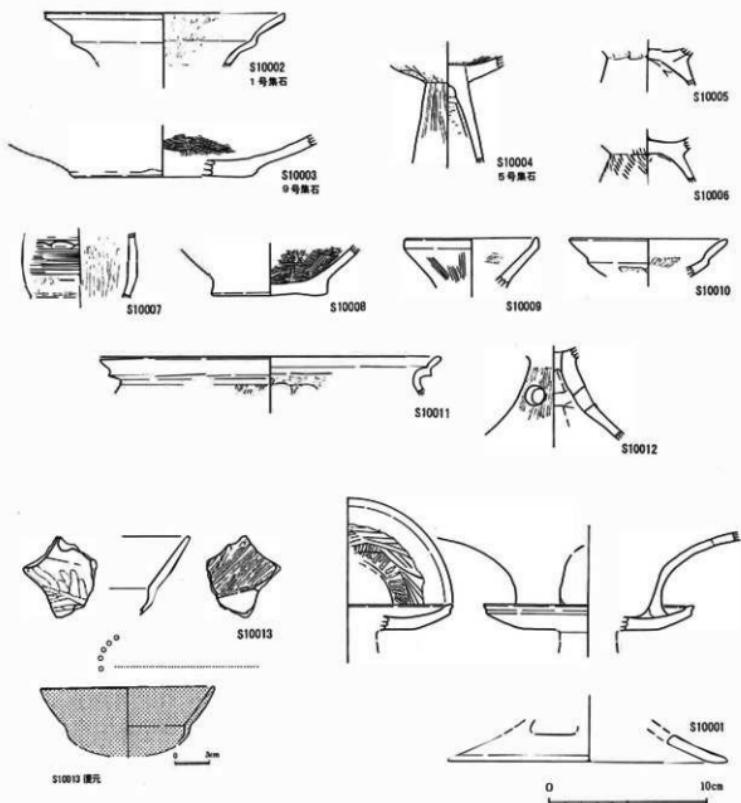


第45図 月の輪下遺跡遺構全体図



第46図 月の輪下遺跡遺物実測図(1)

塚本古墳第2次



第47図 月の輪下遺跡遺物実測図(2)

(註)：このようにあまり普遍化しない外来系土器により煮沸形態である甕が器種構成を示す段階は、S字甕が独自の型式変化を示して在地化する大麻田式期以前に認められるのであるが、これを「奇妙な甕が登場する段階」として評価しようと考える。この点については、南部谷戸遺跡出土器の時代的な位置づけの解釈とともに加納俊介氏より多くをご教示いただいた。

<文献>

富士宮市教育委員会1981『月の輪遺跡群』

富士宮市教育委員会2004『塚本古墳』

### 第Ⅲ章 遺構と遺物

#### 1. 遺構

塚本古墳第2次発掘調査では、2A-1内より竪穴状遺構1基(SX)と2A-6内より掘立柱建物跡(SB)1棟が確認されている(第37図)。結果的に今回の調査の本題から外れるものであるが、参考までに述べておきたい。

SX1(第48図)遺構西側は方形状に角があるが、東側は不整形をしている。幅が狭く制限された調査区であるため正確な形態は不明である。推定規模は直径約3.3mで、深さ70cmを測る。断面の観察によって複数の土坑の重複から成るものではないかと考えられる。南側断面では道路基礎の礫敷の下に、U字状の断面をもつ落ち込みを覆うように石敷と砂礫の層が確認されるが、調査区内においてはこのような層の構造は確認できず、どのような機能を果たしたもののかは不明である。また、基底部からはP1が確認されたが、この覆土中より大量の近現代のガラス製品片や陶磁器が検出された。また、遺構の覆土中からも近現代の玩具等が検出されることから、近現代に廃棄を兼ねて無作為に掘り込まれたものであると判断するのが妥当といえる。

SB1(第49図)調査区東側で表土直下より露出する硬質な砂礫質土層に掘り込まれており、6本柱からなる。柱間距離は桁行1.3m、梁間5m前後である。この建物跡の基礎部分は20cm程度掘り下げたあと、ブロック混じりの黒色土が充填されている。この建物跡に絡んで、年代を示すような遺物の出土はなかったが、家人である塩川氏によると、かつてこの場所には、和紙の三大原料の一つとして知られるミツマタを茹でるためのカマを置いた小屋があったということから、近現代の建物跡であることが分かった。

以上のように、確認された遺構はいずれも近現代のものであったが、本発掘調査において古墳の造営に関連性が僅かながら窺える2つの所見が得られた。

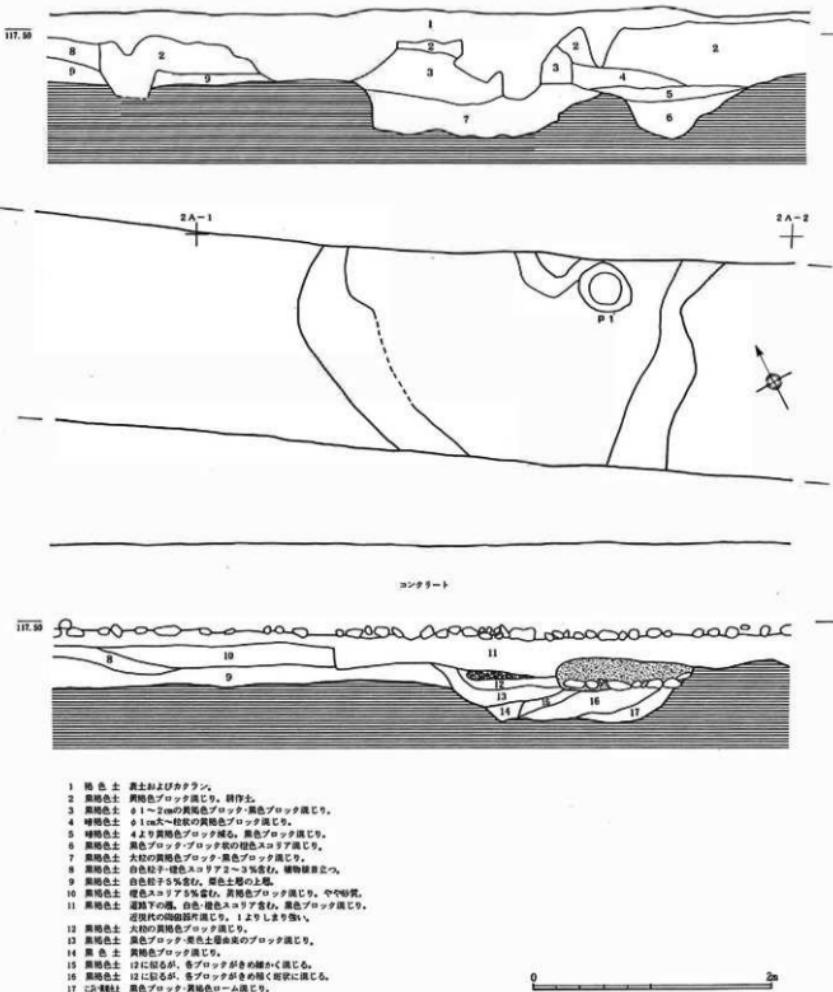
一つは、SB1のすぐ西側にある段状の地形である。その上段には基盤層であるクロボク層が展開しているが、この面から比高差50cm~1mを測る段差となって砂礫層まで下げられている。これは明らかに人為的に削り出されたものであると考えられる。

土地所有者や地元住民の話によると、この段差はSB1が建設される昭和前半以前からあったものといわれていることから、SB1とこの段差の因果関係は無いものとみられる。また、調査区の都合上、この段差が平面的にどのように展開するかは不明であり、SB1の建築による後世の改変を受けているものの墳丘残存部など墳丘に関係するものである可能性は完全に否定できないものとみている。

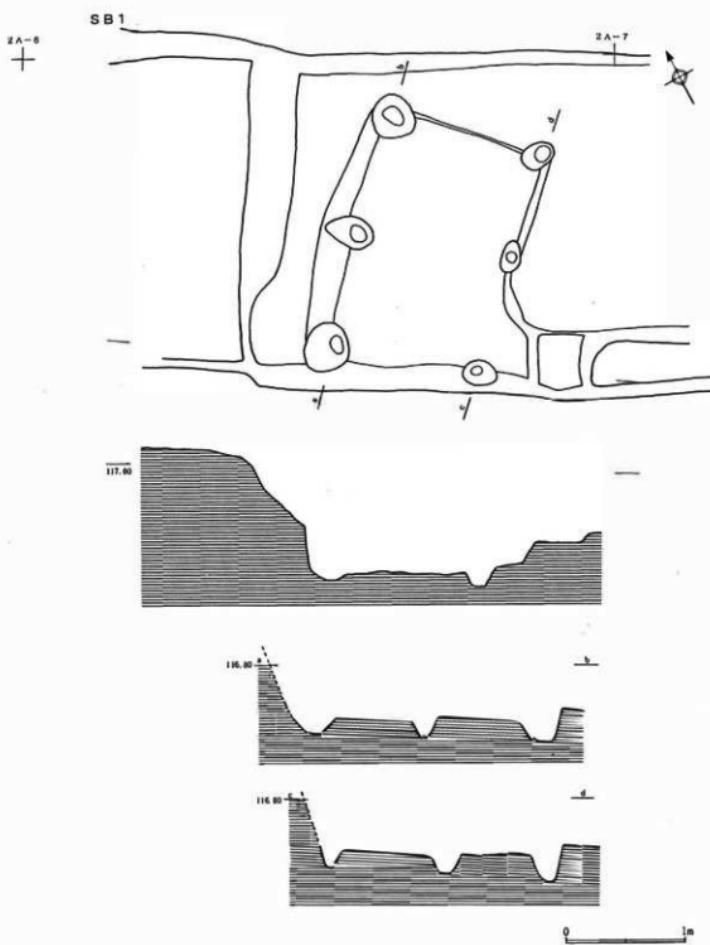
もう一つは、2A-6~9地点の南側壁の層の堆積状況から窺うことができる(第50図)。調査区内では後世の土地改変のため確認できなかったが、現況が道路部分の箇所に関してはその開発が及ばなかったため、調査区南側壁の断面のみで確認することができた。

その観察によるとローム質土層や栗色土層に由来する層が西から東へ緩やかに下る傾斜地に准じて流土状に堆積していることが確認できる。ローム質土層(5)は厚さ40~50cmで、東側末端の裾に向かって緩やかな傾斜で引き延ばされた状況で堆積している。その上面に

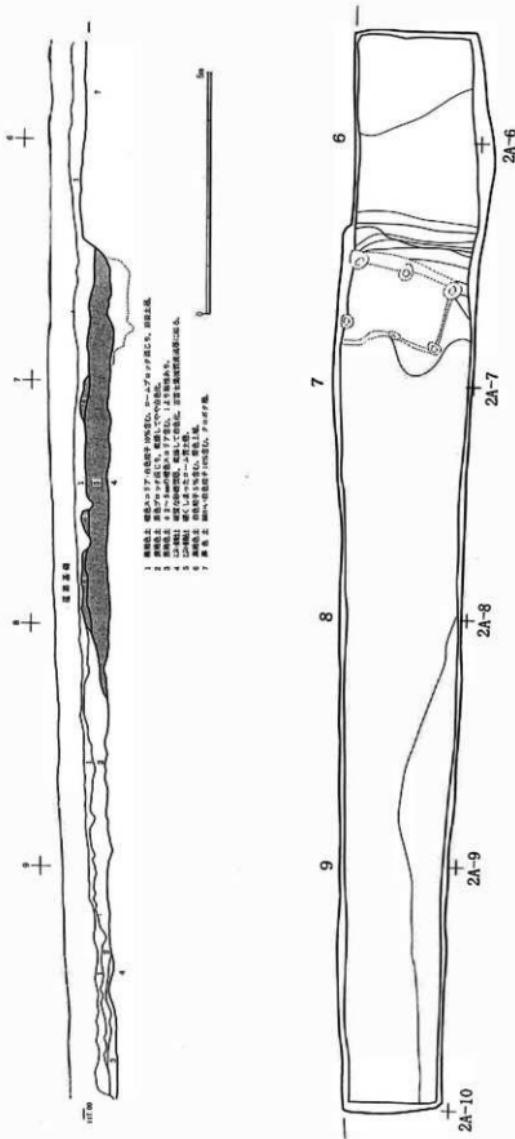
S X 1



第48図 S X 1 実測図



第49図 S B 1 実測図



第50図 調査区南東側土層図

は栗色土層に由来するとみられる黒褐色土層(6)が10cm前後の厚さで部分的に残存箇所がみられる。層の上面は、後世に削られているため、本来の堆積状況を示すものではないが、この2層にはブロック状の混入物もなく、土質も純粹性が高いとみられることから自然的に堆積した層であると考えられる。また、この層の末端より東側には黒色土ブロック混じりの黄褐色土層(2)が地形の傾斜に准じて2層の上から堆積している。乾燥による白色化が頗著な土質と、この層の東側の下位には中粒の橙色スコリアを含んだ黒褐色土層(3)があることから、大沢ラビリ層やクロボク層に由来する堆積物であると考えられるが、粘性やしまりなど土質の全体的な印象から5・6層と比べ層の堆積段階に時間的な差が生じているように思われる。

第1次発掘調査が行なわれた墳丘との位置関係は、墳丘の中央部から直線距離で南東へ28m離れて段差があり、流土状の堆積が延長9m程度ある。また、段差が墳丘の残存頂部より約2m低く、流土状の層の末端はそれより約50cm程度低くなっている。

## 2. 遺物

今回出土した遺物は、9点を数えるのみであり、そのほとんどは図化する事さえ難しい小片であり、ここで扱う遺物は以下に挙げる3点である(第51図・第3表)。出土土器は003の1点を除いて古墳時代の土器片とみられる。

古墳時代の土器片である001は外面をヨコハケメから粗くナナメハケメの器面調整を施した後に赤彩が認められる。内面はヨコハケメをナデ消す調整がみられる。胎土は細かい砂粒を多く含むため器面から見ても目立ち、硬く焼き締められている。002も古墳時代の土器片であり、外面にヨコナデからタテハケメの順に器面調整が施されており、内面にはヨコハケメが認められる。胎土は細かい砂粒を含むが001に比べて量は少なく、長石系の白色砂粒を含み、硬く焼き締められている。いずれも器種は不明である。

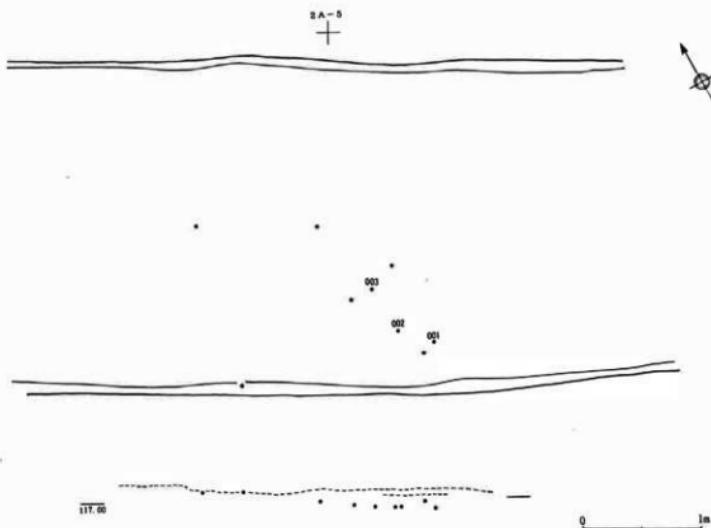
003は縄文時代早期の撚糸文系土器片とみられ、表面にRの撚糸文が認められる。胎土は長石系や角閃石系の砂粒を含み、雲母も少量みられる。焼成は普通であり、表面にはススが付着している。



第51図 出土土器実測図

No.	出土区	文様・調整	胎土	焼成	色調	備考
001	2B-5	外) ヨコハケメ-粗ナナメハケメ 内) ヨコハケメ、ナデ消し	細砂粒目立つ。	硬質	外) 橙色 内) 浅黄色	外面赤彩
002	2B-5	外) ヨコナデ-タテハケメ 内) ヨコハケメ(9本/cm)	細砂粒・長石系含む。	硬質	外) にぶい褐色 内) 橙色	
003	2B-5	撚糸文(R)	砂粒・長石、雲母少量含む	普通	表) 褐灰色 裏) 褐色	縄文時代早期 スス付着

第3表 土器観察表



第52図 土器出土分布図

古墳時代土器と縄文土器の組み合わせと、遺物の出土が量的に少ない点は、墳丘残存部とその周囲や墳丘盛土等に対して実施された第1次発掘調査の出土状況と類似している。

土器片はすべて2A-4～5内の大沢ラピリ層やクロボク層が露呈した墳丘の基盤となり得る層とその直上にある小粒の黄褐色ブロック混じりの黒褐色土との間で出土しており、ある程度まとまって出土している（第52図）。この土器片を含んだ層の在り方は調査区西半分においては2A-4～5付近でしか確認できず、2A-6より東半分の調査区においては後世の造成等により、全く確認できない状況であるため、今回の調査で唯一の土器出土地点となった。

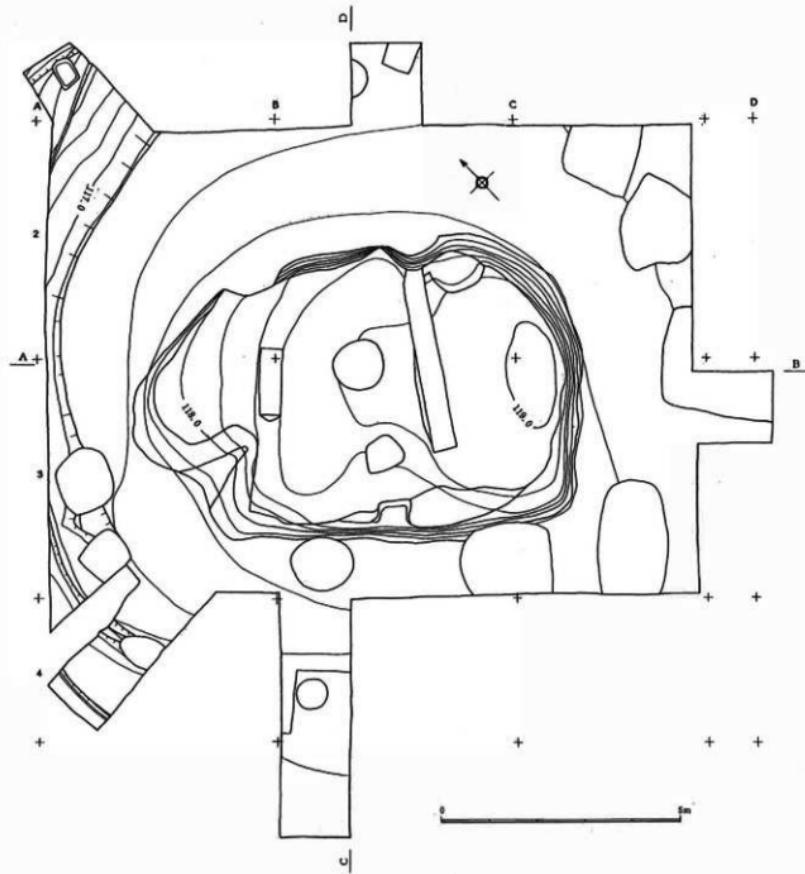
土器が発見された層は北西から南東へ下る緩やかな傾斜面となっており、土器片もやや南東方向へ流れで分布しているよう見られる。今回発見された遺構との関係はないため、墳丘を構成する盛土の一部が残存または流れ込んだ作用によるものだと思われる。

---

## 第IV章 まとめにかえて

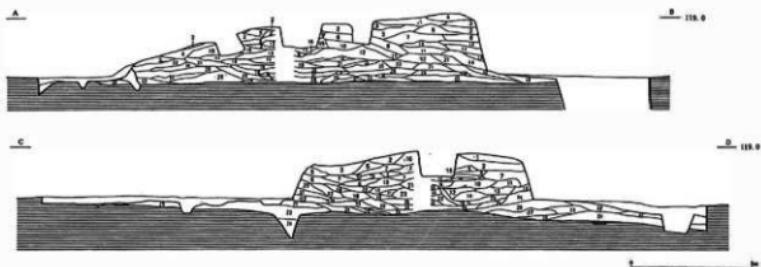
---

塚本古墳の墳丘本体に対する調査は、第1次発掘調査で実施されており、墳丘は人為的な盛土であることや、調査区西側で周濠(墳丘裾)が確認できること、「塚」は本来円形を基調とした曲線を描く墳丘が想定されることが明らかとなった(富士宮市教委2004)。



第53図 第1次発掘調査区全体図

坂本古墳第2次



<1> 黄褐色土  
1. 黄褐色土 (Std. SV3/II) 42~1m厚スコットアラフ底。ホール状隙間。表面剥離を伴つ。  
2. 10cm厚のシルト層。表面剥離を伴つ。  
3. 10cm厚のシルト層。表面剥離を伴つ。  
4. 10cm厚のシルト層。表面剥離を伴つ。  
5. 10cm厚のシルト層。表面剥離を伴つ。  
6. 黄褐色土 (Std. SV3/II) 40~5~1m厚スコットアラフ底。ホール状隙間。  
7. 黄褐色土 (Std. SV3/II) 10cm厚。

<2> 黄褐色土  
7. 黄褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色土ブロック (Std. SV3/II) 2~3cm厚。

<3> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 10cm厚スコットアラフ・ホール状隙間。表面剥離を伴つ。  
2. 10cm厚のシルト層。表面剥離を伴つ。  
3. 10cm厚のシルト層。表面剥離を伴つ。  
4. 10cm厚のシルト層。表面剥離を伴つ。  
5. 10cm厚のシルト層。表面剥離を伴つ。

<4> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色スコットアラフ。テリのある底に10cm厚。

<5> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色土ベース。表面スコットアラフ。40~50cm厚スコットアラフ層。表面剥離を伴つ。表面剥離。

<6> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色土ベース。表面剥離を伴つ。表面剥離。

<7> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色土ベース。表面剥離を伴つ。表面剥離。

<8> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色土ベース。表面剥離を伴つ。表面剥離。

<9> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色土ベース。表面剥離を伴つ。表面剥離。

<10> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色土ベース。表面剥離を伴つ。表面剥離。

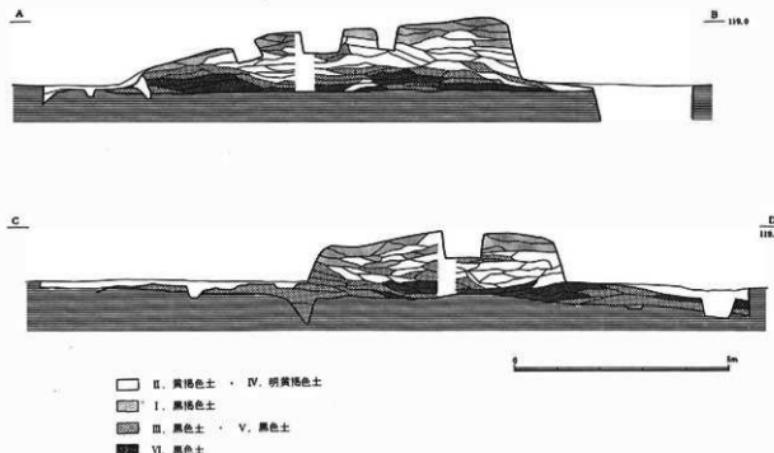
<11> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色土ベース。表面剥離を伴つ。表面剥離。

<12> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色土ベース。表面剥離を伴つ。表面剥離。

<13> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色土ベース。表面剥離を伴つ。表面剥離。

<14> 黑褐色土  
1. 黑褐色土 (Std. SV3/II) 黄褐色土ベース。表面剥離を伴つ。表面剥離。

第54図 墓丘断面土層図



第55図 墓丘構造概略図

墳丘の調査は、現存する塚に対してほぼ中心で垂直に交わるセクションA—B・C—Dを設定し（第53図）、その切断面における土層の堆積状況を観察している（第54図）。その結果、黄褐色ローム、栗色土、大沢ラビリ等のブロック混入具合による土質と、土の採集地や採集層位の違いによる黄褐色土や黒色土等の色調を基準として、盛土が積み上げられている様子を大きく4つのまとまりとして分層することができた（第55図）。

そこで各層の堆積状況や土質の違いなど墳丘の切断面から得られた詳細な情報をまとめて墳丘の構築工法を段階（工程）順に従って検討してみたい。

**第1段階（第56図）** 大沢ラビリの上にある黒色土を地山として、その上面を削平したり、色調が異なる黒色土(Hue2.5Y系とHue7.5Y系の二色)を被せたりしてほぼ水平になるように盛土基盤層を造成している。この工程における盛土の厚さはA—B間で最高20cm、C—D間で最高50cm認められる。いずれの黒色土もロームとスコリア土が粒状あるいはブロック状に混入しており、粘性が弱く、しまりがある性質をもっている。

**第2段階（第56図）** A—B間ではA（北西側）、C—D間ではC（南西側）に偏って土手状を呈した盛土が墳丘の縁辺を周回するように築かれている。土質は、前段階で使用された二色の黒色土と同じであるが、Hue2.5Y系の層の上にHue7.5Y系が盛られている。この盛土は確認できる範囲で、A—B間で高さ70cm程度、C—D間で高さ90cm程度を測る。

**第3段階（第56図）** 前段階で築かれた盛土の高さと均整をとるように、厚さ50cm程度に黄褐色土(Hue2.5Y系)と明黄褐色土(Hue2.5Y系)を敷き詰めているが、盛土との馴染みを良くするために前段階で用いられた二色の黒色土も混ぜ込まれている。これにより断面形状は表面をほぼ平坦に均した扁平なものとなる。

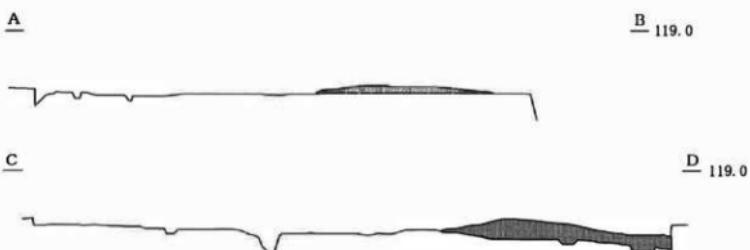
**第4段階（第57図）** 前段階で造られた面の上に、A—B間で厚さ約50～60cm、C—D間で厚さ約30～50cmの層が面とほぼ水平に積み上げたように被せられている。C—D間の層では、その南縁を高く盛り上げていることから、第二の土手状の盛土を作り出しているとも捉えることができる。土質は、黒色土(Hue10YR系)と黒褐色土(Hue2.5Y系)、前段階で用いられた黄褐色土と、これまでの段階で共通して使用される黒色土(Hue7.5Y系のみ)が層の下部でわずかに確認できる。

**第5段階（第57図）** 墳丘をさらに大きく見せるように、前段階と同様に層を積み被せている。土質は、前段階でも用いられたHue2.5Y系の黒褐色土が主体で、同じく黄褐色土も混ぜられている。層はA—B間で最高約75cm、C—D間で最高約50cmの厚さで確認できる。また、A—B間では西端がマウンドの肩状に傾斜を描いているように見受けられる。

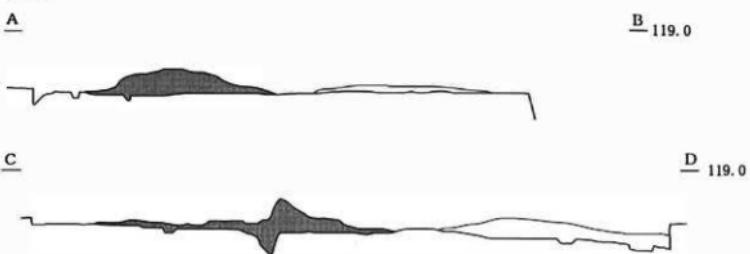
以上のように墳丘の構築方法を検討するなかで考えられる、古墳の年代、規模等について触れてまとめとしたい。

まず、第2段階で施行された盛土は、古墳築造法にみられる「土手状盛土」の一部分と捉えてよいと思われる。また、第3段階においては、さながら平坦面を造っているように窺える。この二つの技術を併用する築造法は、西日本を中心に弥生時代以来より継承され分布しているとされており、東日本における斯様な工法の出現は、早い段階で古墳時代前期後葉～末とされる（青木2003）。第1次調査によって与えられた古墳時代前期中葉という年代が遺物から判断されている（渡井2004）が、こうした墳丘の構築工法の分析からも、本

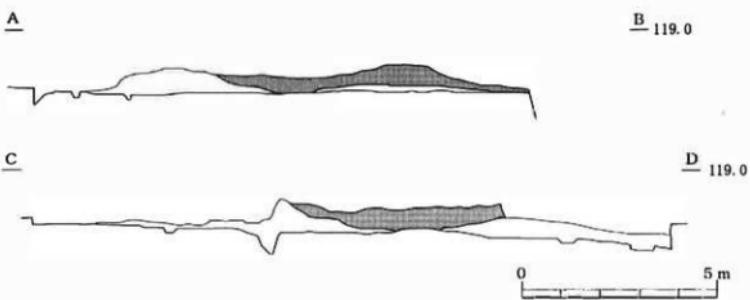
第1段階



第2段階

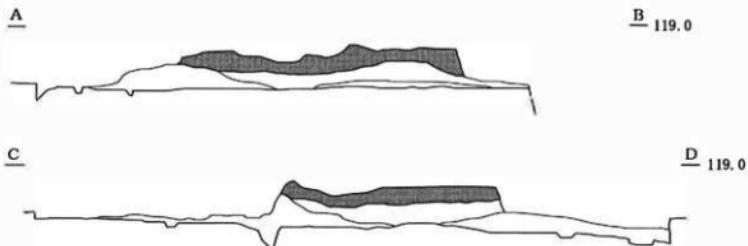


第3段階

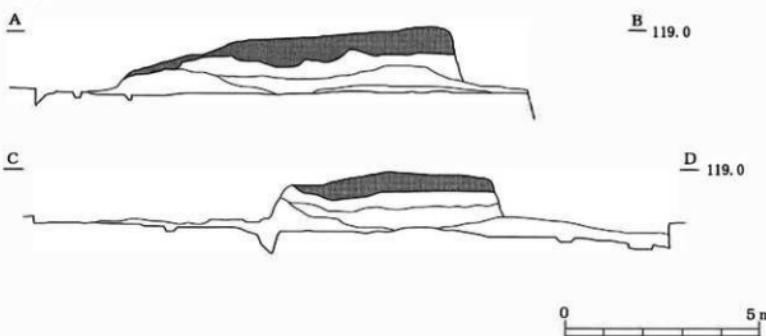


第56図 墳丘構築工程図(1)

## 第4段階



## 第5段階



第57図 墳丘構築工程図(2)

墳丘が古墳時代前期のものであるという見解を強めることができる。

土手状盛土がA—BのA側、C—DのC側に偏って見られることから、墳丘は本来の規模より西侧四分の一相当またはそれ以下の部分が残った結果であると思われる。また、各段階で盛られた層を観察すると、外側に面する層は後世に墳丘に対する大規模な削り取りがされていることが分かる。また、土手状盛土の工法によく導入される墓壙などの埋葬施設が確認できないことからも、墳丘中央付近が欠如している可能性を十分に指摘することができる。これらの要素により、本来の墳丘の盛土部分は調査前に確認した規模よりもるかに広い範囲であったことが窺い知れる。

そこから推定される墳丘の規模は、90cmを超えるとみられる土手状盛土の高さや、第1

次発掘調査の第1トレンチで確認された墳丘の裾と思われる落ち込みから、地山を削り出す等の整形を施した段状の築成を行なった可能性が窺え、A-B-C-Dの交点から今回の調査で土器の出土が確認された墳丘盛土の残存部と思われる2A-5周辺地点までが24m、2A-6内で確認された人為的な段差までが29m程度であることを踏まえると、おそらく墳丘北側に展開する段丘状の崖面を、墳丘を構成するために利用した事も考えることができるくらいの規模であったと思われる。

星山丘陵から潤井川へと接する南西から北東へ下る丘陵端部の傾斜地に形成された河岸段丘上に築かれたのは、本墳との関連性を窺わせる南部谷戸遺跡や月の輪下遺跡等を眼下に臨める事にその要因があり、この段丘上に大規模な古墳を築くために崖面等の地形的条件を利用したものと捉えられる。地山が墳丘を構成する事を前提として丘陵突端や尾根等を築造場所として選び、その地山が墳丘の大半を占め、主体部上層を盛土するような大型墳丘の築造法は出現期古墳にみられる方法でもある(茂木1987)。

塚本古墳の第1次発掘調査は、その成果によって与えられた年代観から塚本古墳が大型の前方後円墳とする可能性を大きく膨らませたと言えるが、今回の第2次発掘調査において、前方部の位置を確認することはできなかった。そのため、塚本古墳に対する実態的な言及に止まった訳であるが、その本質をより具体的に知るためにには、更なるアプローチが必要であると感じられる。

＜文献＞

青木敬2003「第2章 墳丘構築法の再検討」『古墳築造の研究—墳丘からみた古墳の地域性—』六一書房  
富士宮市教育委員会2004『塚本古墳』

茂木雅博1987『墳丘よりみた出現期古墳の研究』雄山閣

渡井英善2004「第IV章 調査の総括」『塚本古墳』富士宮市教育委員会

※第53・54・55図は富士宮市教育委員会2004『塚本古墳』より転載した。

浅間大社遺跡第5次

## 第Ⅰ章 はじめに

### 1. 調査の経緯

富士山本宮浅間大社は、富士山信仰の本願地として古代より人々の篤い信仰の対象として発展してきた。浅間大社では、平成18年（2006）に現在の地に鎮座して1200年を迎える記念の年に向かって、社殿の改修などと共に周辺の整備も同時に行なっている。浅間大社遺跡の第5次発掘調査として実施された今回の調査は、神社の周辺整備の中で神社に対する消火栓貯水槽設置（防火水槽敷設）工事に伴うもので、平成15年（2003）11月に実施した埋蔵文化財の確認調査の成果を踏まえ、防火水槽設置部分である85.8m<sup>2</sup>を調査の対象として行なっている。発掘を実施した地点は、神社社殿北西側にあたり、平成14年（2002）に第3次調査として実施した富士宮市消防団第3分団詰所（宮本区）建設地点と幅4mほどの道を挟んで隣接している場所でもある。

浅間大社遺跡に係る発掘調査は、これまでに4回実施されている。同時期の富士大宮司の居館として成立した大宮城跡における4回の発掘調査と合わせると、神田川の上流域、湧玉池周辺に展開する遺跡群において8回の発掘調査が、実施されているわけである。これらの発掘調査では、富士宮市において比較的珍しい古墳時代中期～後期にかけての集落跡の発見などがあったわけであるが、出土資料の大半は、平安時代の後半から中世までのもので占められ、直接、それらが浅間大社や大宮城に関するものであることが判明している。この遺跡群では、発掘調査によって浅間大社や大宮城の過去の様子を解明する資料を直接得ることが可能であることが明らかとなつたわけである。

今回、浅間大社遺跡第5次調査として実施した発掘調査では、これまでの成果をさらに充実させる多くの資料の出土を見ている。遺跡の面積からするとそれほど広い範囲を対象にしているわけではない点は過去の調査と同様であるが、大宮城を含めて9回に亘る調査の積み重ねが近年考古学的な研究の有効性を評価するのに十分な成果を上げるようになっている（富士宮市教委2003）。それは、ひとつに中世～近世を考古学の対象範囲として物質資料を検討することにより民衆レベルにおける一般的な生活様式の解明に繋がるようになったこと。さらに、浅間大社、村山浅間神社、人穴など信仰に係る遺跡の調査が実施されるようになり、各遺跡の様相の違いが遺跡景観として明らかになったことなどとして指摘することができるようになったわけである。信仰遺跡は、それぞれの時代、性格の違いなどが反映して発見される遺構、遺物に大きな違いを見せているわけであるが、いずれも富士山信仰をその根源とする点では共通しており、時代の変化と共に信仰形態が変わる様子を明瞭に表わしているものである。そして、信仰形態が地域社会の中で変化し、その主体が移り替わる中での時代でも浅間大社遺跡の動向を垣間見ることができる遺跡の継続性は、他の遺跡には見られない点であり、その本拠地としての勢力を窺うことができるるのである。

宗教活動を含めた政治的な中核としての大宮城や浅間大社遺跡の領域が、富士山麓において如何に重要な場所であったか、その社会構造の解明が、この地域の歴史を紐解くひとつの大きな視点となるわけである。

## 2. 地理的環境

浅間大社遺跡は、現在の「富士山本宮浅間大社」の境内地およびその周辺に展開する遺跡の呼称であり、直接神社の歴史と係る部分とそれ以前の一般的な集落遺跡としての側面を有する複合した遺跡の総称である。

富士山が多層構造を成す火山であることはよく知られており、小御岳火山、古富士火山、新富士火山の順で新しく覆われて、重層している。このうち最も新しい新富士火山は、その活動期の中で、幾多の火山噴出物により見事な成層火山を形成するが、多彩な噴出物として、新富士火山の溶岩流も時間的な変遷と分布の違いから旧期、中期、新期に分けられる重層構造を示すことが判明している（加納1988）。これらの溶岩流に代表される新富士火山の活動が治まり、火山の安定期を迎える10,000年～11,000年前には、日本においては縄文時代の開始時期にはほぼ合致するものである。芝川町大鹿窪遺跡は、新富士火山の旧期溶岩類が上井出から芝川を経て富士川に流れ込む溶岩流の露呈部分に形成された縄文時代草創期の集落遺跡であり、新富士火山の活動が終わって、ほどなく登場した遺跡として捉えられる。

この新富士火山起源の溶岩流は透水性である特性があるため、水利には非常に不便な地質環境を呈している。そのため、弥生時代中期前葉の押出遺跡や平安時代の村山浅間神社遺跡など特殊な事例を除いて中世になるまで、遺跡の分布は、富士山斜面地においてその新富士火山の溶岩流に覆われて部分を避けるような状況を示す。

富士火山が大きく作用して、富士宮市内における遺跡は時代的に分布空間としても偏在するのである。そして、遺跡分布が濃密な不透水性の古富士火山の噴出物を基盤とする地帯においては、新富士火山の溶岩流との境に多くの湧水地が形成される。それは、人々の生活に直接関連したものであり、遺跡を偏在させる大きな要因となったのである。

浅間大社遺跡の東側には、新富士火山の末端に形成された湧水群のひとつである国の特別天然記念物である「湧玉池」をその水源とする神田川が南流している。神田川の上流域の両岸に大宮城と浅間大社遺跡が展開するわけであるが、両者は有機的な関係を持って造営されており、一体のものとして捉えられ、ここに中世をその主体とする遺跡群の存在を指摘することができる。この遺跡群は、前面に神田川とその本流である潤井川により形成された火山灰の厚い堆積が認められる沖積地を見渡す微高地に位置している。

後背に新富士火山起源の旧期溶岩が造る丘陵が広がり、その緩やかな崖線を見上げる丘陵裾部に沿うように、この遺跡群は広がりを見せている。過去の発掘調査により境内地の南側は、シルトの堆積が認められる低湿地であることが判明しており、遺跡の分布が南北方向に比較的限られている様子が知られる。

神田川は、その源流となる「湧玉池」が比較的潤井川の近くで噴出している湧水であるため全長1.1kmほどで潤井川に合流する短い河川である。本来は富士宮市街地南側に広がりを見せる低湿地帯に注ぎ込む川と判断すべきものであろうが、その地帯の扇状地化とともに一定の河川として成立したものである。このような、潤井川に寄生するような湧水地は、淀原湧水群、大中里湧水群などその中流域に数多く見ることができる。

潤井川は10kmほど下ると古代東海道に接する吉原峠に至る。河川交通の利便性から駿河湾を介する海運交通との結び付きを考えると、大宮城や大宮浅間宮に対する潤井川～神

田川を通したルートが想定される。

潤井川は元々大宮断層崖が新富士火山の噴出に先立って形成されたことにより断層伝いに流れる現在の流路となっている。そのため、浅間大社遺跡の南西側には潤井川を挟んで、大宮断層崖によって画されることにより形成された古富士火山の泥流をその基盤としている星山丘陵が独自の地形景観を示している。大宮城や浅間大社遺跡は標高120mほどを測る微高地にあり、北東側に富士山が聳え、南東側に星山あるいは羽船の丘陵が展開し、前面を潤井川が南流する極めて起伏に富んだ地形環境の中に位置している遺跡であると言える。

### 3. 歴史的環境

富士宮市域は、各地域で特徴的な遺跡の分布を示している（第58図）。星山丘陵内には縄文時代の複合遺跡であり継続性の持つ滝戸遺跡（11）がその北端部に位置しているが、現在の富士宮市立第三中学校周辺の限定された範囲に展開しており比較的狭い丘陵に占有している。このような遺跡は、上野の千居遺跡や村山地区にある箕輪A遺跡、富士市の天間沢遺跡などとも共通した様相で、いずれも縄文時代中期～後期を主体とした遺跡としながらその分布範囲はそれほど広く持たない類似した特徴を持つ。縄文時代のもうひとつの特徴としては、縄文時代の草創期～早期の遺跡が比較的数多く確認されている点である。それは、特に富士川流域に多く見られるもので、縄文時代草創期の遺跡としては、芝川町の大鹿窪遺跡や小塚遺跡、星山の奥山地遺跡、早期の遺跡としては、沼久保の小松原A遺跡、星山の黒田向林遺跡、小泉の石敷遺跡、集落が調査されている小泉の若宮遺跡（富士宮市教委1983）などその数が多い。浅間大社遺跡（1）においてもその周辺を大宮町桜ヶ丘の地名を上げながら、縄文時代早期の遺跡として捉えられていた（静岡県1930）。

弥生時代は、淀師の湧水群を見下ろす丘陵の縁辺に広がりを見せる渋沢遺跡と潤井川を挟んで対岸の丘陵上に展開する別所遺跡、あるいは渋沢遺跡から風祭川伝いに遡った万野風穴開口部一帯にある押出遺跡などにおいて弥生時代中期前葉丸子・佐渡式併行段階の遺跡が発見されている。これらの遺跡は、富士山側の斜面地から羽船丘陵上にかけての山間地に展開するもので、市内でもやや偏った分布を示している。渋沢遺跡では、この段階の墓域の一部が発掘調査されている（富士宮市教委1989）。

弥生時代後期になると潤井川中流域に対する本格的な開発の痕跡を窺うことができるようになる。大宮城跡（2）の東側に広がる連雀町遺跡では後期後半の土器類が採集されており、浅間大社遺跡から続く新富士火山の溶岩流で形成された丘陵裾に展開する微高地にこの段階の遺跡の存在が確認されている。今回の調査でも少量ながら弥生時代後期後半の土器片が発見されている（第59図の2・3）。

弥生時代後期後半の遺跡としては、前述の滝戸遺跡（11）において集落跡と墓域が発見されている（富士宮市教委1997）。同じ星山丘陵上には月の輪上遺跡があり、また富士山斜面地には小泉の石敷遺跡で集落が調査されている（富士宮市教委2000）。この時期は、弥生時代後期になって海岸部の諸遺跡がほぼ終焉を迎える動向に呼応して山間地への新たな進出を始める段階に当たり、愛鷹山中腹に弥生時代の遺跡が形成される新たな開発などとも同調しながら富士山山麓において遺跡の登場が見られるようになる。

古墳時代前期となると遺跡の広がりは爆発的な様相を示す。滝戸遺跡においては集落と



第58図 遺跡位置図

墓が築かれ、大岩の丸ヶ谷戸遺跡ではこの地域の首長の墓である前方後方形の墳丘墓の登場を見ることができる。浅間大社遺跡の周辺でも大宮城



第59図 弥生・古墳時代土器拓影図

(2) や若の宮遺跡(5)においてこの段階の遺物が発見されている。また、浅間大社遺跡と潤井川を挟んで対岸に位置する野中向原遺跡(12)では、三連の壺形土器が採集されている(富士宮市教委1983)。古墳時代前期の遺物は、浅間大社遺跡の周辺から南側においては、その濃淡があるものの各遺跡において一定量出土しており、濃密な分布を示すようになる。この地域が古墳時代前期において一大拠点を形成していた様子を窺うことができる遺跡分布を示していると言えるのである。

この古墳時代前期遺跡の広範囲に亘る広がりも中期以降急速にその分布を狭めるようになる。特に、古墳時代中期前半の遺跡は、現在、市内においてまだ発見例がない。5世紀中葉以降になると、大宮城が築城された丘陵において集落が登場し、浅間大社遺跡においてもその段階の土器が今回の調査でも発見されている(第59図の1)。神田川流域における遺跡の出現が窺われる所以である。古墳時代後期には貴船町遺跡(8)、泉遺跡、大宮城跡、木ノ行寺遺跡などで集落跡が調査されており、木ノ行寺遺跡では富士山の地下水の流出する作用をうまく利用した井泉が発見されている(富士宮市教委1995)。ただし、市内においてこの段階は、遺跡が濃密な分布を示すものではない。この大宮城から泉遺跡にかけての潤井川の扇状地、つまり現在の市街地西側区域と静岡県立富士宮東高等学校の周辺に分布する木ノ行寺遺跡あるいは中沢遺跡のある程度限定された地区において分布を示すのである(富士宮市教委1993)。

奈良時代は、小泉地区の弓沢川右岸において土地開発など計画的な集落が築かれるようになるが、いずれにせよ小規模な集落遺跡で時間的な継続性も弱い。これに相当する遺跡としては、大岩の峯石遺跡、小泉の上石敷遺跡、石敷遺跡、権現遺跡などを上げることができるが、石敷遺跡では数棟の掘立柱建物跡が発見されており、竪穴住居址が発見されている他の遺跡と様相を違えている。奈良時代の遺跡分布の主体は弓沢川左岸の富士根地区であるが、浅間大社遺跡から一段上がった北側の丘陵上に展開する二ノ宮遺跡(7)や西

遺跡名	時代	標高	種別	遺物・遺構
浅間大社遺跡	縄文(早)、弥生、古墳、古代、中世、近世	120	居館、神社	土器、石器、木製品、金属器、陶磁器、壺形
大宮城跡	古墳、平安、中世	130	集落・埴輪	土器、土製品、石製品、木製品、金属器、陶磁器
達雀町遺跡	弥生、古墳	130	散布	土器
城山遺跡	古墳(前)、中世	150	散布	土器、陶磁器、壺形
若ノ宮遺跡	古墳(前)、中世	140	散布	土器、陶磁器
猿和神社遺跡	弥生(後)、古墳(前)	138	散布	土器
二ノ宮遺跡	古墳(前・後)、奈良	142	散布	土器
貴船町遺跡	弥生、古墳(前~後)、奈良	120	集落	土器
西町遺跡	弥生(後)、古墳(前)	120	集落	土器
羽衣町遺跡	縄文、弥生(後)、古墳(前)	115	散布	土器
瀬戸遺跡	縄文(中・後)、弥生、古墳	130	集落・古墳・墓	土器、土製品、石器、石製品、配石壺形、方形壺形
野中向原遺跡	縄文(中・後)、弥生、古墳	140	散布	土器、三連壺形土器
野中村遺跡	縄文(中)、弥生、古墳(前)	127	散布	土器

第4表 遺跡地名表

側にその広がりが確認されている貴船町遺跡において少量ながら奈良時代の土器が採集されている。この地点は大半が現在の市街地に当たっており、遺跡の状況はよく分かっていないが、奈良時代の遺跡が一定の広がりを見せる地区として捉えることができる。

平安時代以降では9世紀後半の集落が調査されている泉遺跡やその段階の土器を採集している浅間大社遺跡の他、富士山山中の村山浅間神社遺跡で極めて小規模な集落遺跡が発見されている。富士山の山中に対する開発の跡が窺える特異な時代であると言えるのである。この段階は、富士市大渕の岩倉B遺跡においても山中への進出が認められるわけであり、相互に同調した政治的な動きとして理解することもできる。

富士市の官衙遺跡と目される東平遺跡が律令制の崩壊とともに衰退を向かえる頃、新たな動きとして富士川下流域に浅間林遺跡や破魔射場遺跡の出現が認められるわけであるが、その遺跡を造営したのは、甲斐の勢力である。

平安時代も11世紀の状況についてはよく分からぬ。12世紀になると、直接浅間大社遺跡に係る遺跡の登場が始まり、以後現在に繋がる集落や信仰遺跡としての造営を見ることができる。この頃、中世に継続する居館として始まる大宮城跡や浅間大社遺跡は、その代表として位置づけられるのである。

＜文献＞

加納実1988「富士宮市域の富士火山の地質 5 新富士火山」『富士宮市の自然』富士宮市

静岡県1930『静岡縣史』第一卷

富士宮市教育委員会1983『月の輪遺跡群Ⅲ』

富士宮市教育委員会1983『若宮遺跡』

富士宮市教育委員会1993『富士宮市の遺跡』

富士宮市教育委員会1995『木ノ行寺遺跡』

富士宮市教育委員会1997『淹戸遺跡』

富士宮市教育委員会2000『石敷遺跡』

富士宮市教育委員会2003『富士宮市の遺跡Ⅱ』

## 第Ⅱ章 調査の経過

### 1. 調査の経過

今回の浅間大社遺跡に対する5回目の発掘調査は、浅間大社の消化栓貯水槽埋設（防火水槽設置）に伴う事前の調査である。これは、平成15年（2003）11月に富士宮市教育委員会により実施された富士山本宮浅間大社が事業者となる消化栓貯水槽埋設及び参拝者駐車場設備の整地に伴う確認調査の成果を受けて、平成16年（2004）10月13日から実施されたものである。

発掘調査は、10月13日より調査区の設定と重機による表土排除作業から開始された。調査区の南側中央部に先の第2次世界大戦以前と思われる多くの陶磁器や瓦を廃棄した5m×3mほど広さを測る「ゴミ穴」が確認されたので攪乱として通常の調査を行ないそれ以外に対して遺跡としての発掘調査を実施している。

10月15日より発掘作業員を現地に投入して人力による詳細な調査を開始した。第3次調査や第4次調査同様に緩やかな斜面に対する遺物包含層の斜面堆積の状況が徐々に看取できるようになった。雨天に阻まれ調査の進行はやや遅れ気味となったが10月21日より土坑等遺構の調査を開始した。

10月25日より調査区の西側で発見された集石遺構であるSX1及びその周辺に広がる土坑の調査を実施した。10月も終盤にかかり、10月29日までに各遺構の詳細な調査や調査区のにおける土層図などの作成を行なった。11月1日2日の両日重機による現地の埋め戻しと調査の完了を浅間大社と確認して現地における発掘調査を終えた。

発掘調査は、調査面積85.8m<sup>2</sup>に対して、発掘作業員など調査の補助員による詳細な調査8日間、重機による表土処理4日間で対応して実施している。

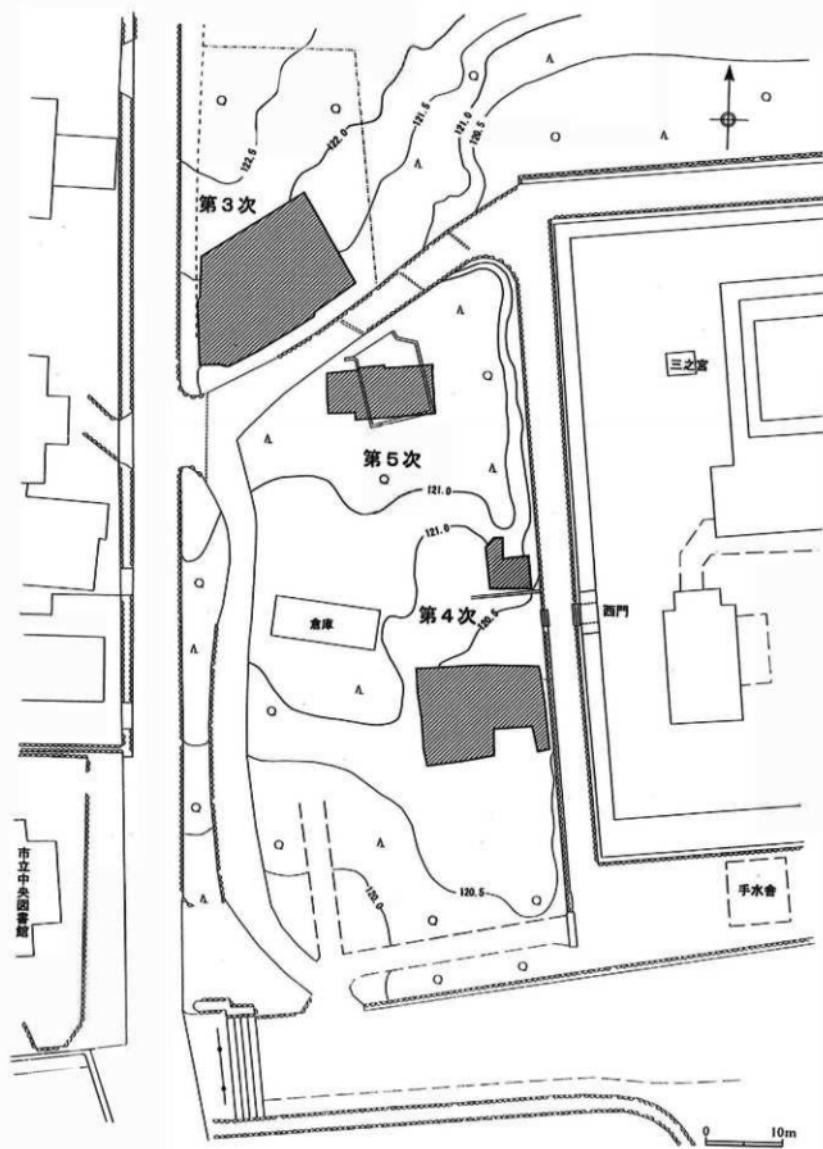
現地での発掘調査の終了後、継続して富士宮市教育委員会文化課埋蔵文化財整理室において整理作業を実施し、本書の刊行を以って第5次調査に係る事業を終了している。

### 2. 調査区の設定

発掘調査区は開発に伴う掘削箇所がほぼ南北方向に沿っているが樹木などの調査区に対する規制により調査区に合わせてグリッドを設定している。報文中に使用したグリッドの軸方向は座標北から8度2分東に振れているものである。第60図には発掘調査区に対応させて過去の第3次調査と第4次調査との調査場所における相互の相關性を表わしている。

グリッドは、各軸線を西から東へA・B・C、北から南へ1・2と呼んで5mごとに分け、その区画された5m×5mを1つのグリッドとした。発掘調査は、そのグリッドを基準として実施し、軸線の北西側交点をそれぞれのグリッドの名称とした。

今回の調査では、このようなグリッドが6ヶ所設定でき、原則として遺物包含層などの遺物の取り上げをそれぞれのグリッドによる区画単位で行なった。



第60図 調査位置図

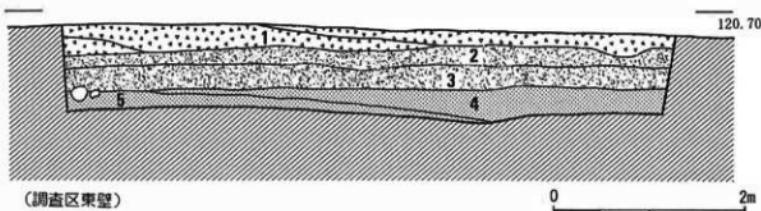
### 3. 層序と地形

発掘調査区（第62図）は、南西方向に向かう斜面地で扇状地の堆積物である黄褐色砂質層を基盤としている。そのため、基盤層まで調査区の北東側で40cm、南西側で90cmの深さを地表から測る。区内に堆積している土層は、地形的な作用により各地点で様子を違っているため、標準となる層序を提示することはできない。

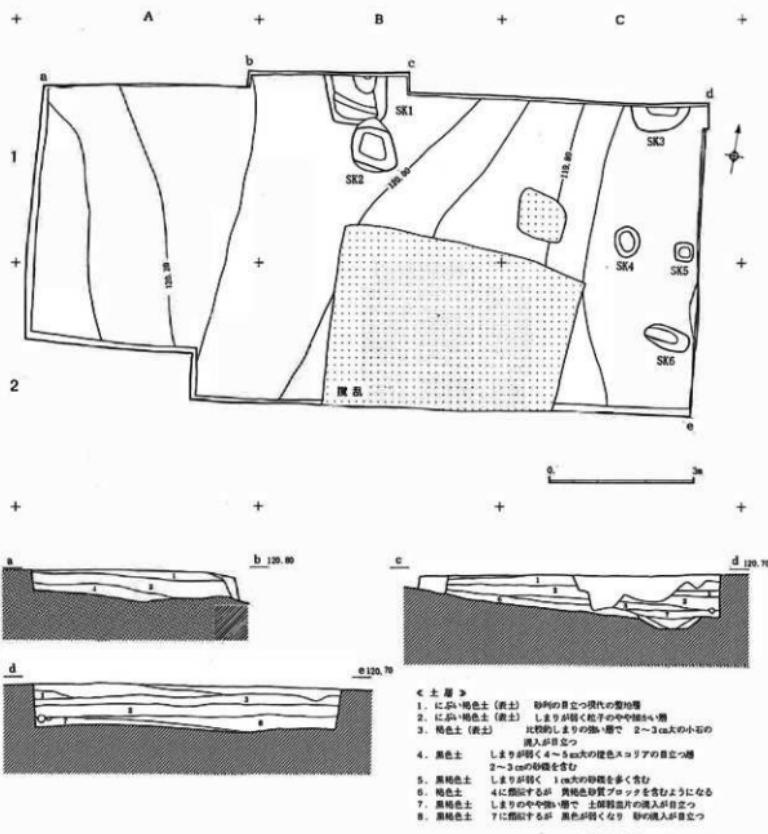
層序は、基盤となる黄褐色砂質層の上に中世に遺物包含層である黒色土があり、その上に旧表土が乗る。地表面近くは客土が敷かれ、整地面として造成され現状の平坦面となっている。地表面から整地層—旧表土—黒色土—黄褐色砂質土（基盤）となる土層堆積が今回の調査区における基本的な土層の様相である。これは、大略的に第3次調査地点や第4次調査地点と同じ状況を示しているものである。傾斜地においては、堆積土の斜面堆積が確認されているがそれぞれの基盤となる黄褐色砂質土層上面での比高差は、第3次調査地点と今回の調査地点が1mほどを測るのに対して、今回の調査地点と45m南側に位置する第4次調査地点がほぼ同じ標高を測り、現在の社殿に合わせるようにその西側に一定の範囲で平坦地の広がる様子が分かる。

ここでは、今回の調査区で最も層厚の認められた調査区東壁による土層の状況を説明することで、発掘調査における標準的な層序とする（第61図）。

- |            |                                                |
|------------|------------------------------------------------|
| 第1層 にぶい褐色土 | 玉石など砂利の撒かれた部分などが認められる現在の整地層、厚さは30cmほどを測る。（整地層） |
| 第2層 褐色土    | しまりの比較的強い層で、2~3cm大の小石の混入が目立つ層で、厚さ20cmを測る。（旧表土） |
| 第3層 にぶい褐色土 | 砂質で、しまりのやや強い層。2~3cm大の小石の混入が第2層に較べて少なくなる。（旧表土）  |
| 第4層 黒褐色土   | 粒子が細かく、しまりの比較的強い層。砂の混入が目立つ。（遺物包含層）             |
| 第5層 黒褐色土   | 第4層に類似するが、黒色味が強まり粒子が粗くなる。（遺物包含層）               |



第61図 調査区東壁土層断面図



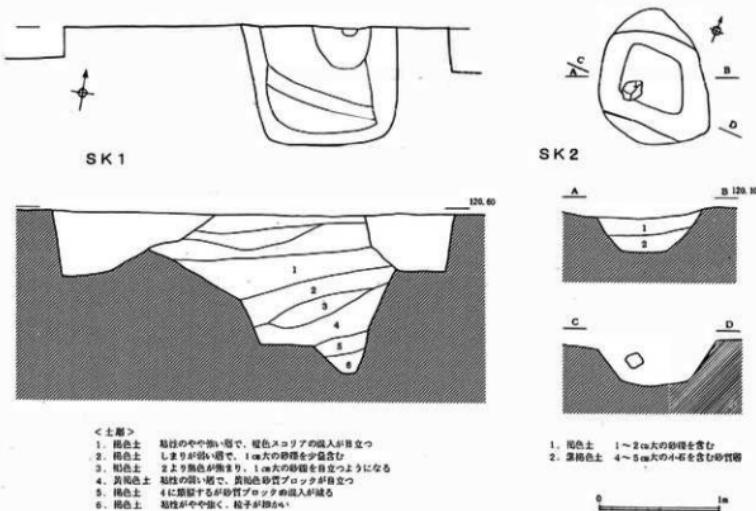
第62図 調査全体図

### 第Ⅲ章 遺構と遺物

#### 1. 遺構

発掘調査では、南東方向に向かって徐々に傾斜する斜面地において、6基の土坑と自然礫の集積2基を確認している（第62図）。それらの中には、相互に関連づけて明らかな建物と判断できる遺構は含まれないものの、様々な形態の土坑を主体として調査区の東側に偏る分布を示して発見されている。これらの遺構の中には、人為的な構造物と判断し難く、植物などが残した痕跡としての自然の作用によるものも含まれているようであるが、その判断は難しい。

SK 1（第63図）調査区の北側中央、B-1グリッドにおいて発見された土坑で、さらに調査範囲外の北側に広がっている。後述するSK 2とは重複関係にあり、SK 1の方が古くなる。遺構を掘り込んでいる基盤層が砂層であるため、壁の崩落が著しく構築時の形態を保っているものとは考えられないが、発見の際の規模は、東西130cm、南北104cmを測る。調査区の北壁において確認できる土層断面では、東西方向で200cmを測る大規模なものと



第63図 SK 1、SK 2実測図

なるが、遺構の上部がその中段から大きく外側に開いている状況を考えると、壁の崩落が関連しているものと捉えることができる。

S K 1 は今回の調査では、もっとも大きな土坑であり、深さ90cmを測るものである。底面は、北東側で径50cmの円形の落ち込みが24cmの深さを底面から測って認めることができるが、それ以外は平坦な面として捉えられる。南側においては、8cmほど高さを増して特異なテラスを作る部分を認められる。

壁はその上部以外は緩やかに外傾しながら立ち上がるものの、その壁の残存からは方形を指向する遺構であることが指摘できる。

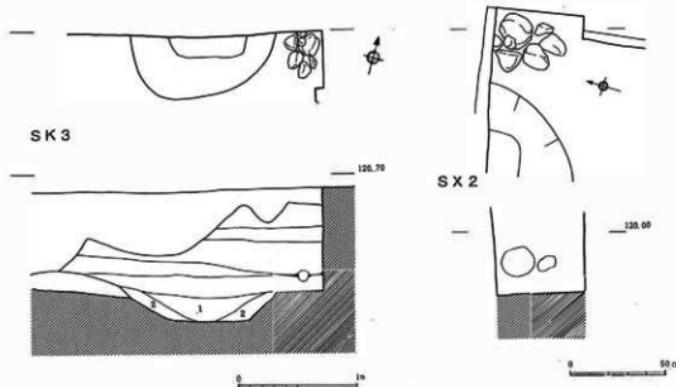
覆土は砂層の影響を顕著に受けた下層の8、9層は、水平に近い堆積を示すが、それ以外は、傾斜地として低い部分に当たる東側から西側に向かう堆積を示している。遺構埋没時の地形を考える際の参考になるとともに、神社の改修以前に S K 1 周辺の東側が高くなっていた可能性を考えなくてはならない状況にあることがその堆積から分かる。

S K 2 (第63図) S K 1 とその北側で重複して発見された S K 2 は、95cm×78cmを測る方形基調の土坑で、南北両方向で壁の崩落が顕著に認められる。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、その深さ36cmを測る。

覆土は、上下2層に分層され、上位の第1層で拳大の自然礫1つが出土している。下層の第2層は黒褐色の層で、砂の混入が顕著である。

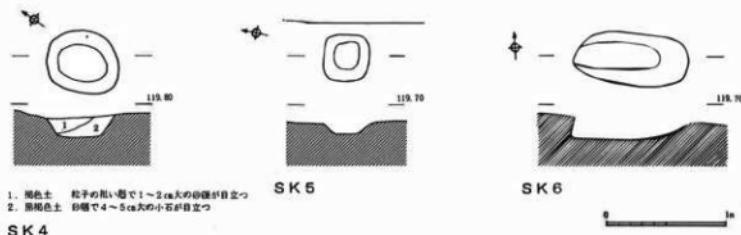
遺物は、第67図13の灯明皿の破片が覆土中から出土している。

S K 3 (第64図) C-1グリッドで発見された土坑である S K 3 は、調査区の北壁際にあり、その大半は区域外に広がっている。標準層序の第6層を掘り込んで作られており、東



1. 砂質土 粒質でしまりがない。2~3mmの小石の混入が目立つ  
2. 黒褐色土、粒子の細かい層で、黄褐色砂質ブロックを含む

第64図 SK 3、SX 2 実測図



第65図 SK4、SK5、SK6実測図

側に隣接する集石SX2が構築されている第7層がその上に覆う。明らかにSX2より古くなる。確認された部分は、梢円形を示す平面形であるが、底面の状況からは方形を指向することができる。北壁部分で計測される長辺は123cmを測る。深さは25cmを測り、断面捕鉢状を示している。

覆土は、遺構の崩落に関連した黄褐色砂質ブロックの混入が顕著な三角堆積をよく認めることができる。

遺物はSX2と同様に覆土中より第67図14など土師器皿の破片が13点確認されている。また、15の鏹蓮弁文が見られる青磁碗の破片も同時に出土している。

SX4（第65図）SX4はC-1グリッド南側中央部に位置する土坑である。形状は梢円形で南北方向に長軸を持っている。62cm×52cmの平面形に深さ20cmの規模を測る。断面形は箱型を示し、壁が緩やかに外傾しながら立ち上がる。

この土坑は、後述する集石であるSX1と一部重複するものであるが両者の関連はよく分からぬ。ただし、SX1の集石がSX4の全面を覆わないで空白部分を形成している点を考えるとSX4がSX1より後出の様相を示しており、SX1→SX4となる変遷を考えることができる。

遺物は覆土中より土師器皿破片3点と第68図38の常滑産の片口鉢の口縁部破片が出土している。

SX5（第65図）土師器皿の集積部分を遺構に認定したもので、その下部から浅く掘り埋められた痕が発見されたため土坑としている。土坑は方形で一辺38cmの大きさを測る。深さは基盤層となる黄褐色砂質層から10cm程度を測る比較的浅い小穴のようなものである。

C-1グリッドの南端部分で発見されており、近接する集石であるSX1との関連を考えなければならない位置にある。この土坑内では、数多くの土師器皿破片（第67図）と蓮弁文の見られる青磁碗の破片（第67図11）が1点出土している。土師器皿は、実測図として図示している10点以外に13点の破片が確認されている。これらは第66図の出土状況図からも分かるように土坑底面からやや浮いた状況で、土坑の東側に偏る状態で出土しているが、遺物の集積が作用して土坑状の落ち込みを形成した状況も考慮しなければならないほど箇所に固まって発見されている。ここから出土している土師器皿は、その全体の器形

が分かる第67図1が最も残存状況のよいものであるが完形のものはない。破片化した土師器皿の集積内に1点の青磁破片が混入する状況を指摘することができる。出土状況については意図的な廃棄行為を感じるものであるが、個々の遺物の出土状況にそれはあまり感じることができない無作為なものである。土師器皿の廃棄に伴う遺構なのである。SK6（第65図）C-2グリッドにおいて確認された梢円形の土坑で、95cm×45cmの規模を有するものである。深さは、20cmを測る。

壁は長軸方向の東側がなだらかに立ち上がるが、その西側は幾分オーバーハングする壁で様子を大きく違えている。遺物は、覆土中から土師器皿の小破片が1点出土してのみで遺構に明らかに関連するものはない。

このSK6の場合は、その形状や遺物の出土状況などを踏まえると人工的な構造物とはなかなか考え難い。木根など自然の作用によって形成された落ち込みとして理解したほうがよいのかもしれない。形状が木根の痕跡としてよく合う。

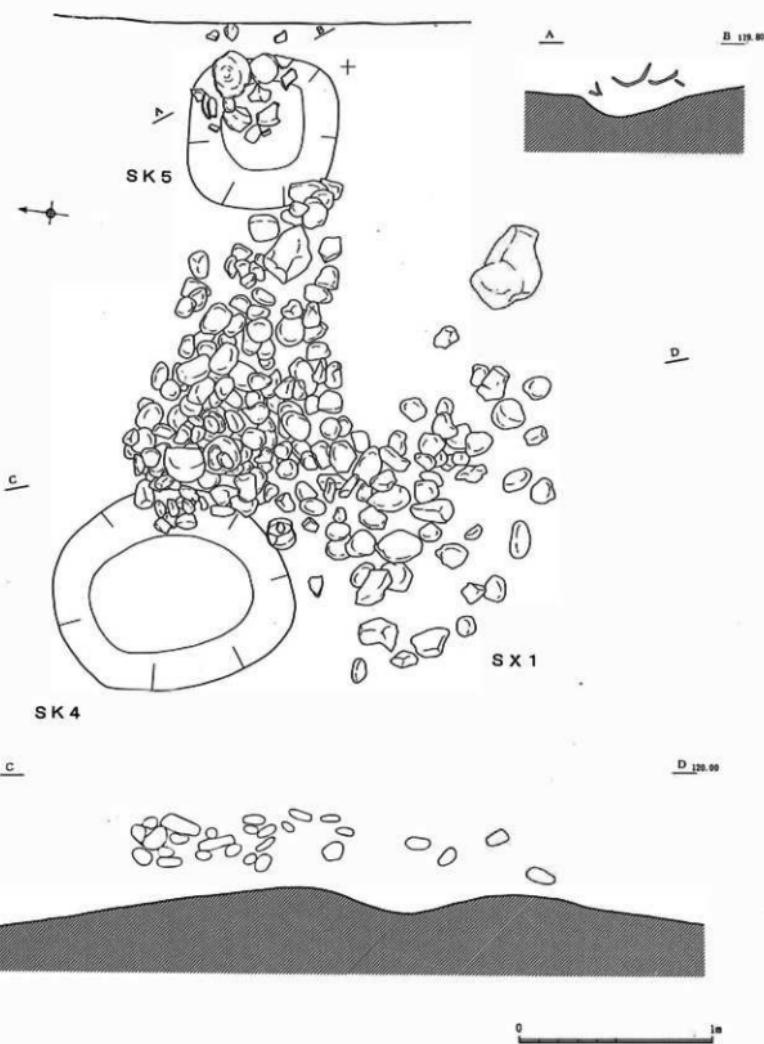
SX1（第66図）硬質砂岩の玉石を主体として構成される集石であるSX1は、C-1グリッドの南側でSK4とSK5に挟まれるような位置にある。集石は南北110cm、東西120cmの範囲に広がるもので、北側はほど石が密集する状況を認めることができる。集石の形状はあまり規格的な様子を示さないが、中央部に攪乱の作用による石の欠損部分を見ながら、北東側から南西側にかけて石の数量を徐々に減らしている状況を認めることができる。

石の堆積は、基盤層から5cmほど浮いた状況で、厚さ15cmを測る。それに伴う土坑状の遺構などは確認されていないが、石の堆積が標高の低い側に向かって緩やかに落ちながら石の数を減らす点を考えると、特別な遺構を伴わないものと考えることができる。

このSX1とした石の集積は、包含層として認定した第7層の堆積によく合致しているように思われる。それは、第7層が斜面堆積の中でその幅を減じる末端部分に当たり、一定の範囲において集積した石を検出したものと捉えることができる。今回の調査では、包含層の全体においてSX1発見の玉石と同類の石がその量の多少はあるものの出土しているものであり、その数量は比較的多い部分としてこのSX1が認識されたものとして考えることもできるのである。これが形成された具体的な理由についてはよく分からぬが、神社境内に敷き詰められる玉石が何らかの作用によって集まったものであることが指摘できる。そして、発掘調査で発見されている玉石は、一様に現在の境内に敷かれた玉石に較べると一回り大きくなるのである。SX1の数多くの石が隣接するSK5の土師器皿類と同様に意図的な廃棄行為によるものであるならば、両者は相関する関連も指摘することができるが、出土部分は整然と分かれているものである。

SX1に伴って土師器皿の破片が23点検出されているが、すべて破片化したものである。第67図12はSX1の北西部分において出土した土師器皿で、集石の最下部において発見されている。この資料は、小破片の資料ばかりの中、唯一全体の器形の分かれる大形の破片である。

SX2（第64図）発掘調査区の北東隅において発見された集石であるSX2は、さらに、北側及び東側に広がる状況を示しており、全体を検出してはいない。これは、前述のSX1と同じく標準層序の第7層内で築かれている。層位的には同じ場所で築かれた遺構であるものの、それを構成する石は、やや異なるものである。SX2は、その多くを遺跡周辺



第66図 SK 4、SK 5、SX 1実測図

の自然礫により構築されているものであり、明らかに他所から持ち込まれたSX1の石類とは様相を違えている。それぞれの石もSX2は拳大のものが多く、SX1に比べて比較的大きなものを使用している。発見された部分では、第7層上面で7個の石が原則的に1段に敷かれて、平坦に設置している様子を窺うことができる構造で、人為的に作られた集石として捉えることができるものである。

SX2として確認できる部分は、南北40cm、東西30cmの範囲に亘るもので、厚さ10cm程度を測る。

遺物は、集石を構成する石以外には確認されていない。

以上が僅かな調査範囲であるが発見された遺構の解説である。これらは遺構の位置関係や遺物の包含層の堆積状況などから以下のような時間差を想定できるものである。

遺物包含層の第7層に覆われるSK3は最も古くなる様相を示している。これを時間的な基点とすると、第7層に伴う状況で発見されているSX1の集石は、それよりも新しくなるものであると捉える。さらにSX1と隣接するSK5及びそれに伴う土師器皿集積は、未確認ではあるもののその掘り込みの状況次第で、SX1と同時期から後のものであるとすることができる。そして、第7層上面に築かれたSX2が最も新しいものであると考えられるのである。SK3→SX1・SK5→SX2となる時間的な変遷を辿るのである。SK1とSK2については、その重複関係からSK1→SK2への変遷が辿れるのであるが、SK3などとの直接的な関連についてはよく分かららない。

遺物をこれらの前後関係から時間的な変遷を辿ると、第67図14・15→第67図1~11・12あるいは第68図38となる状況を指摘することができるのである。

調査区の西側に当たる標高の高いA-1・A-2グリッドにおいて遺構は発見されていない。第4層とした遺物包含層が発見されているため、一概に後世の造成などに伴う遺構の消失とは考えることはできない。今回の調査区の北東側で実施した浅間大社遺跡の第3次調査において、今回の調査に良く似た土坑を数基発見しており、比較的広い範囲に広がるものであることが判明しているのである。

## 2. 遺物

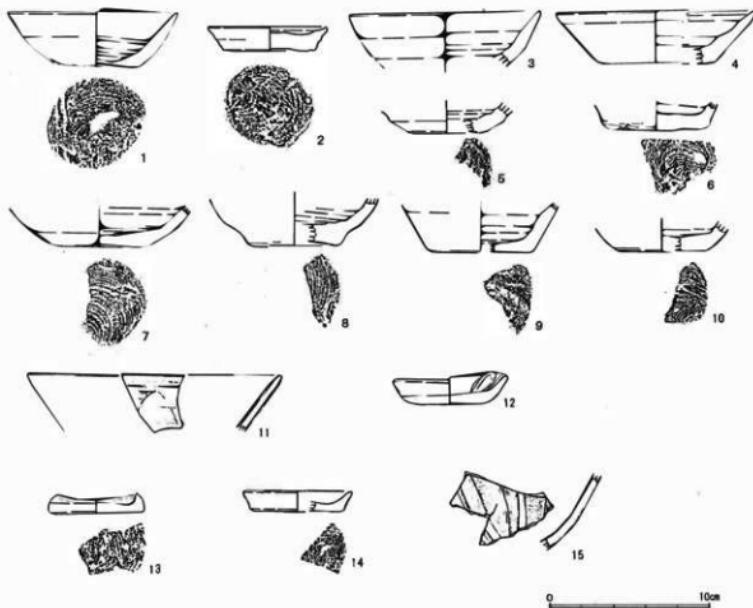
遺物（第67・68図）は、その包含層から土師器皿の破片を主体に調査面積の割には多く発見されている。器種の容量差を踏まえると、各形式を数量として単純に比較することにどれほど意味があるか分からないが、参考までに示してみると、土師器皿537点、常滑産陶磁器3点、貿易陶磁としての青磁4点が発見されている。そして、それぞれの内訳は、土師器皿がロクロ成形によるもの524点で圧倒的に多く、非ロクロ成形のものが13点発見されている。非ロクロ成形土師器皿は、12の異なる在来系の型式が1点と器壁の薄い白色系の搬入品として捉えるができるものが12点確認されており、一定の数量を表すことが指摘できる状況にある。

ロクロ成形土師器皿は、原則的に底部未調整で回転糸切りの痕を明瞭に残すことを最大の特徴と判断されるものであるが、今回の調査では、この土師器皿出土点数の58%の割合

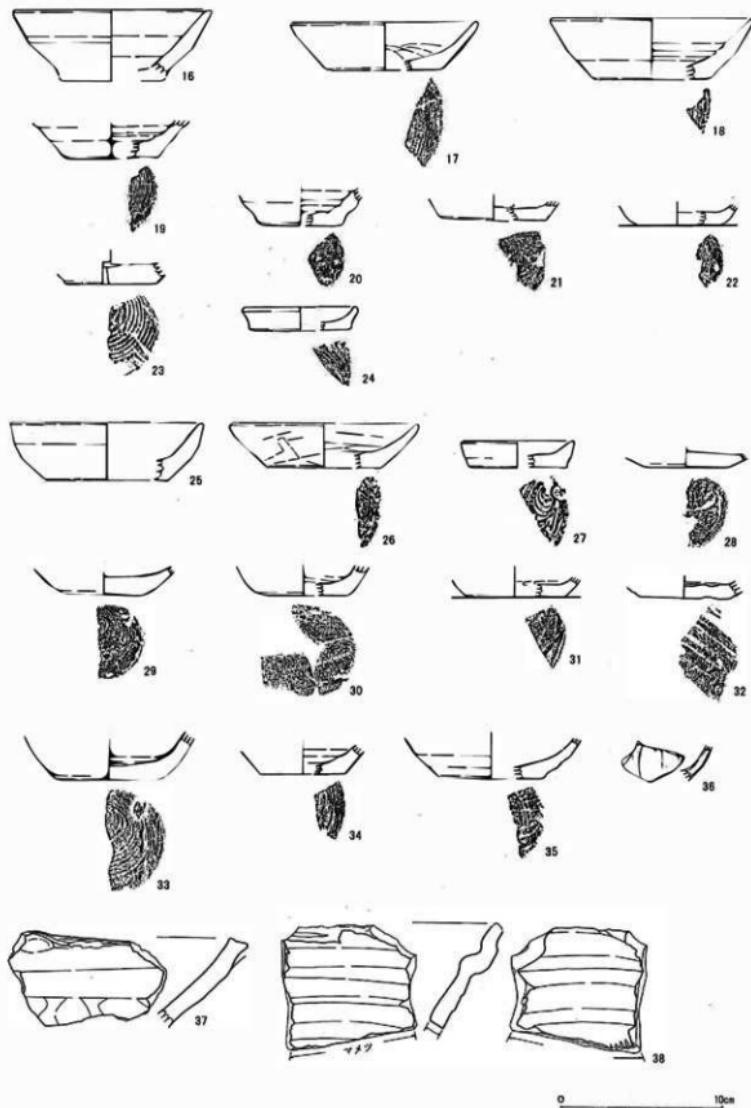
で、その底部破片300点ほどが確認されている。この数字が今回の調査範囲に対する土器皿の実態に近い数を表しているものと考えると、70m<sup>2</sup>ほどの範囲に対して300点ほどの点数を数える土器皿を見ることができるわけである。

常滑産の陶磁器は、少ないながらすべて片口の捏ね鉢で占められている。また、貿易陶磁としては、鎬蓮弁文を施す青磁碗の破片が4点確認されている。これらは、SK3から2点、SK5から1点、C-2グリッドから1点出土している。

実測図として掲載できたものについて、その特徴を述べて見ると、まず今回の調査の大きな成果として指摘されるSK5の一括資料を取り上げることができる。1~10として載せた土器皿は、碗状に内彎する1、やや大振りで内彎気味に立ち上がる3、直線的に体部の開く4、箱型の底部から直立気味に開きながら、途中で大きく外反する9などに分けることができる。法量は口径11~12cm前後の皿と、口径7cmほどの小形の皿とに分けられる。SK5はこれらの土器皿類に青磁碗の破片が1点含まれる状況を示すわけである。これに対して、遺構の検出状況から時代的に古い段階であるものと想定されるSK3出土の14は、推定口径6.6cmを測る小形の土器皿であり、底部に回転糸切りの痕跡を見るこ



第67図 出土遺物(1)



第68図 出土遺物(2)

番号	器種	出土地点	法量			残存率	備考
			口径	底径	器高		
1	土師器皿	SK 5	10.5	5.4	4.0	口唇部1/2欠	
2	土師器皿	SK 5	(7.3)	5.8	1.5	口唇部1/8欠	
3	土師器皿	SK 5	(12.0)			口縁部1/4以下	
4	土師器皿	SK 5	12.4	7.2	3.2	1/4以下	
5	土師器皿	SK 5		(5.2)		底部1/4以下	
6	土師器皿	SK 5		(6.9)		底部1/3存	
7	土師器皿	SK 5		6.0		底部1/2存	
8	土師器皿	SK 5		(5.2)		底部1/4以下	
9	土師器皿	SK 5		(6.6)		底部1/4以下	
10	土師器皿	SK 5		(5.8)		底部1/4存	
11	青磁碗	SK 5				破片	
12	土師器皿	SX 1	7.0		1.9	口縁部2/3存	非クロ成形
13	土師器皿	SK 2	(5.0)	(5.9)	(1.2)	1/3存	口唇部スス付着、灯明皿
14	土師器皿	SK 3	(6.6)	(5.9)	(1.3)	1/4存	
15	青磁碗	SK 3				破片	
16	土師器皿	C-1	(11.8)			1/2存	
17	土師器皿	C-1	(11.4)	(6.7)	(3.0)		内面指頭によるナデ整形
18	土師器皿	C-1	(12.5)	(7.3)	(3.8)	1/4以下	
19	土師器皿	C-1		(5.7)		底部1/4以下	内外面スス付着
20	土師器皿	C-1		(5.0)		底部1/4以下	
21	土師器皿	C-1		(6.5)		底部1/4以下	内面指頭によるナデ整形
22	土師器皿	C-1		(5.5)		底部1/4以下	
23	土師器皿	C-1		(5.4)		底部1/3存	底部焼成前穿孔
24	土師器皿	C-1	(6.8)	(6.3)	(1.5)	1/4以下	
25	土師器皿	C-2	(11.8)	(7.6)	(3.6)	1/4以下	
26	土師器皿	C-2	(11.6)	(7.0)	(2.7)	1/4以下	内外面板ナデ
27	土師器皿	C-2	(6.8)	(6.0)	(1.7)	1/4存	
28	土師器皿	C-2		(5.0)		底部1/2存	
29	土師器皿	C-2		4.8		底部1/2存	
30	土師器皿	C-2		5.9		底部2/3存	
31	土師器皿	C-2		(6.1)		底部1/4以下	内面指頭によるナデ整形
32	土師器皿	C-2		(5.6)		底部1/4存	内面指頭によるナデ整形
33	土師器皿	表土		6.9		底部1/2存	
34	土師器皿	表土		(5.2)		底部1/4以下	
35	土師器皿	攪乱		(6.4)		底部1/4以下	
36	青磁碗	C-2				破片	
37	片口鉢	SK 4				破片	
38	攪鉢	攪乱				破片	下端破断面マツ、転用

第5表 出土遺物観察表

とができるものである。この皿には15の青磁碗の破片が共伴して発見されている。

SK 5に関連することが指摘できるSX 1の最下部で発見されている12の土師器皿は、粗雑な作りの皿であり、口径7.0cmを測る小形品である。内面と口縁部においてヨコナデ整形が施される以外の外面過半(体部)においては明らかな調整痕は認められないもので、あまり類例のないものである。

13に示した土師器皿は、口縁部が凸状で直立気味から内傾するコースター状の小形品で、口唇部に油煙痕が認められる、灯明皿として使われたことがよく分かる破片資料である。

グリッド出土の遺物は、C-1とC-2の両グリッドにおいて目立った出土を示しているわけである。16は碗状に近いやや深めの皿であり、17、18は内彎気味に体部の開くもの

であり、17は内面下位を不定方向にナデ整形することで仕上げられている。類似するものとして、C-2グリッド出土の26を取り上げることができるが、手持ちによるナデ整形によっているものである。

23は底部外面に糸切りを残しながら、棒状の圧痕を認めることができるもので、ほぼ中央に貫通する焼成前の穿孔が見られる。24はSK3出土の土師器皿14に類似する小形品で推定口径6.8cmを測るものである。

25~32はC-2グリッド出土の土師器皿である。法量からは、口径12cm程度の25、26と口径6.8cmを測る27とに大別できるもので、各構造やC-1グリッド出土の土師器皿の状況とよく似ている。25は、内彎して立ち上がる体部からその口唇部が僅かに外反するもので、器厚の厚さが目立つ。27は口径6.8cm、底径6cmを測るコースター状の小形品で、直立気味に立ち上がる体部を特徴としている。口唇部は、比較的明瞭に突出して尖る。

貿易陶磁としては、青磁碗の破片が4点発見されている。数量的には非常に少ないが、11の口縁部破片がSK5において土師器皿類と共に伴しており、15がSK3で14の土師器皿と共に確認されている。

瀬戸・美濃産あるいは常滑・渥美産の国産陶磁器の出土数もそれほど多くない。瀬戸・美濃産の陶磁器において、中世のものは確認されていない。常滑産の陶磁器は、片口鉢の破片が見られるだけで甕などの出土はない。37は、常滑産の片口鉢で口の部分を含む口縁部の破片である。外面は下位において指頭によるオサエおよびナデ整形が見られその上位にヨコナデを施して口縁端部の調整を行なっている。

38は18世紀前半代の瀬戸・美濃産播鉢の口縁部破片資料であるが、口唇部の剥離が目立つものである。この破片の下端部は、破断面を意図的に摩滅させている痕跡を認めることができる。破損した播鉢の一部を砥石などに転用していると思われる類例である。このような例は、市内大岩で発掘調査された丸ヶ谷戸遺跡においても確認されている。丸ヶ谷戸遺跡では、播鉢の破片を転用するものと折縁皿の口縁部破片を利用したもののが発見されている（富士宮市教育委1991）。

以上が今回の浅間大社遺跡第5次調査で出土した遺物の概要であるが、このほかに、金属製品や木製品などの発見例は、昭和のものは別として、確認していない。このように出土遺物は、土師器皿の数量が多いやや偏った構成を示すものとなっている。

＜文献＞

富士宮市教育委員会1991『丸ヶ谷戸遺跡』

## 第IV章 まとめ

### 1. 調査の成果

浅間大社社殿西側における発掘調査は、今回の調査を含めて3回目となる。その中で最も北側において実施された第3次調査では、中世の竪穴状遺構と土坑9基、近代の区画溝などが発見され、土師器皿を主体に山茶碗や瀬戸・美濃産の天目茶碗、皿類、常滑産の片口鉢、甕、貿易陶磁器としての青磁碗などが同時に出土している。これらの遺物は12世紀前半～15世紀前半代の年代が考えられ、竪穴状の遺構は12世紀前半代の年代が与えられている（富士宮市教委2003）。ただし、12世紀～15世紀にかけて継続的に遺物の出土が満遍なく認められるのではなく、14世紀代の状況はあまりはつきりせず、遺物の空白期を想定させる状況になっている。また、15世紀前半代も少量の瀬戸・美濃産の陶磁器が認められるだけで、主体的な出土状況は示していない。

今回の調査区の南側40mほどの地点で実施された第4次調査においても中世の遺物包含層と共に掘立柱建物1棟が発見されている。遺物は、多くの土師器皿と共に青磁碗の出土を見ている。掘立柱建物は、13世紀前半代の年代が考えられ土師器皿類がその柱穴より出土している。この地区における古代末～中世にかけての遺物は、12世紀前半から13世紀の中ではほぼ収まる状況を示している。この点は、第3次調査地点の状況が少し様相を違えているものの、浅間大社遺跡における社殿西側のこの調査区域では12世紀前半から13世紀を主体とする遺物群で構成される事象を指摘することができる。

今回実施した第5次調査地点においては、その状況を追認することとなっている。ただ、第3、4次調査で確認されている足高高台付壺や柱状高台付壺の出土が見られない点は、12世紀の前半代まで遡らないものとして、12世紀の後半から13世紀にかけての年代が考えられ、出土遺物の時代幅が限定された状況を指摘することができる。

発見された遺構は、SK3→SX1・SK5→SK4→SX2の順で新しくなることがその検出状況から分かる。遺物の出土が見られないSX2は別として、遺物集積遺構であるSK5では多彩な型式で構成される土師器皿類が見られ、SK3においても土師器皿が出土している。それぞれ青磁碗の破片が共伴している点を考慮しながら年代を考えると、SK3出土の土師器皿（第67図14）は、第4次調査で発見された掘立柱建物跡出土の土師器皿類の中に類似する型式があり、近い時代を考えることができる。このことよりSK3の年代を13世紀の前半とすると、SK5の土師器皿類はそれ以後の年代に比定される。ただし、14の土師器皿とSK5出土の土師器皿（第67図2）に対する相互の大きな型式差は感じられない。また、8の土師器皿のように外側にやや突出する底部破片は、前段階の柱状高台の要素を残すもので古い形式的な特徴を認めることができる。ここでは、SK5の年代について土師器皿の型式から13世紀後半の年代を想定することにする。

SK5より時代的に下るものと考えができるSK4は、そこから出土している常滑産の片口鉢の型式から15世紀前半代のものとして捉えることができる。この段階は、隣

接して調査が実施された第3次調査地点で一定の数量発見されている15世紀前半代の陶磁器の年代とうまく整合している。

今回の調査のもうひとつの大きな成果としては、集石であるS X 1の中から出土した土師器皿（第67図12）の発見である。これは、在地の粘土で作られ、土師器皿の大半を占めるロクロ成形のものと類似した胎土であることが指摘できる皿で、非ロクロ成形により製作されている。これは小形品の一群に属する法量で、内面に成形時の粘土帯を貼り付けた痕跡を残すもので、やや粗製の感じを受けるものである。

富士山南西麓地域における古代末～中世のものと思われる土師器皿は、搬入品としての白色系の皿類を除いて、それ以外はロクロ成形されたもので占められ、底部外面に糸切り後無調整による回転糸切りの痕跡残すことを原則としている。浅間大社遺跡に隣接する大宮城では、11世紀後半から16世紀までの多量の遺物の出土が見られるものの、在来系の非ロクロ成形の類例は確認されていない。非常に希少なものであると言える。

この地域は、伊豆などの周辺地域と同様にロクロ成形の土師器を生産し続ける地域であるが、それは、13世紀まで一定の数量で非ロクロの製品を作る伊豆地域（轟山村教委2002）とは様相を違えて、すべてロクロ成形の品々で占められおり、それに対する依存度が極めて大きな地域であると言える。その中でこの12は極めて特異な例として捉えることができるものである。

ロクロ成形の土師器皿が移行して非ロクロの土師器皿に変わる事象は、尾張において京都系の非ロクロ成形土師器皿の影響から12世紀から13世紀にかけて起る型式変化である（尾野1994）。非ロクロ成形土師器がその流通範囲を広げる段階が13世紀にあることは、地域を越えるものも極めて示唆的である。中世の土器様式として非ロクロ成形土師器皿は、器種組成に持つ伊豆地域とは異なり、忽然と表れたこの地域の非ロクロ成形土師器皿は、京都系土師器皿に対する憧憬にも似た意識の表れと富士浅間宮の勢力が作用しているものならば、尾張周辺に同調した動向と考えることができる資料である。この非ロクロ成形土師器皿は、ほんの一時期の生産であったようで、この地域においては普遍化しない。そして、ロクロ成形土師器皿生産が土器製作として大きなシェアを占めながら、発展していくのである。

このような土師器皿生産が累積的な発展を示す中で、京都系の非ロクロ成形土師器皿が少量ながら一定量の器種構成を示す点は、その用途の差として考えることができるものである。そこには、日常の什器としての在来系の土師器皿にはない特殊な用途あるいは希少性を有する土師器皿の存在を考える必要がある。今回の調査でもその破片が12点発見されている。

以上、今回発見されている遺物について、どのような時代のものであるか、その想定される時間的な変遷である。今回の成果を踏まえると、この社殿西地区における一連の発掘調査において出土した遺物の一括資料として、第3次調査竪穴状遺構（S B 1）→第4次調査掘立柱建物（S B 2）→第5次調査S K 5となる時間的推移を指摘することができる。これは、12世紀前半から13世紀後半までの約150年ほどの土器型式の変化、変遷として捉えることができるものである。

今回の調査において遺構の中で最も新しい段階のものであると判断されるS X 2は、実際の年代についてよく分からぬ。遺物包含層の上面に構築されている点を考えると15世

紀以降のものと考えることができる。今回の調査地点に程近い社殿北西側には、江戸時代に大日堂が存在したとする寛文10年（1670）に描かれた絵図があり、その存在が想定されるものである。限定された調査区であり詳細は不明であるが、その大日堂の施設の一部としてこのS X 2が築かれた可能性を現時点では指摘しておきたい。

## 2. 遺跡の時代

浅間大社遺跡における遺跡南側で実施した第1次調査および第2次調査では、大規模な濠跡が発見され、大きな注目を集めたが、その掘削年代を濠の中から出土した土師器皿や山茶碗から11世紀後半～12世紀前半としている。この濠は区画溝としての機能を持つもので、大掛かりな造成を伴う整備がこの段階に行なわれたことを今に伝えるものとして重要な発見であると言える。この段階の様子は、今回の調査を含めた社殿西側の調査区域においても認められることで、居館あるいは神社域としての広範囲に亘る造営の跡を窺うことができる。富士浅間宮が13世紀に至りその勢力を伸ばす点は、今回の調査においても指摘できることである。従来、富士浅間宮は、武装集団を伴いながら政治支配の中枢にあったわけであり、その勢力圏の外側で地頭に捕任された石川氏や南条氏などが、その支配地の開発に携わるのである（若林1971）。この中枢とその縁辺とする構図が中世鎌倉時代の地域の情勢であり、富士浅間宮の絶大な勢力をそこに見ることができるのである。

中世の特殊な施設の存在が窺える濠自体は、江戸時代の終わり頃に埋まり、新たな施設がその上に構築されている。12世紀～19世紀に濠の形状は徐々に変化しているようであるが、その区画は機能していたようで、濠から出土している遺物の大半は、近世の陶磁器で占められている。19世紀後半の神社がどのような変遷をその施設の中で辿ったかも「安政の大地震」や「廢仏毀釈」の影響を考えながらもう少し検討しなければならない。

この濠出土の資料を含め、浅間大社遺跡における14世紀代に関連する出土品はそれほど多くない。この段階は、神田川を挟んで近接する富士大宮司の居宅であった大宮城における陶磁器類や土師器皿類の出土が徐々に増える段階に当たり、出土遺物の分布圏が移行している様子を指摘できる状況となる。日常什器である遺物の出土がその数を減らし、隣接する居館におけるその数が増える現象は、浅間神社域における宗教施設としての機能がはっきり分化した結果と考えができる。それは応永25年（1418）に幕府管領細川満之が將軍足利義持の命を受けて富士大宮司に対して発した御教書（奉書）などから分かるように、15世紀前半には、幕府の庇護のもと富士浅間宮の改修が進むのである（若林1971）。SK 4から出土している遺物は、まさにこの時代に係るものとして捉えることができるものである。

## 3. おわりに

浅間大社遺跡に対する今回の調査は、過去の調査同様に浅間大社に直接係る資料の出土を見て、大きな成果を上げることができたわけである。特に、平安時代の終わり頃から鎌倉時代にかけての遺物は神社社殿西側区域において目立った出土を示しているわけである。この頃の神社の様子がどのようなものであったかは、文献資料の研究成果を踏まえた

今後の大きな検討課題であるが、その勢力的な活動の後を窺うことだけは十分にできるものである。

発掘調査から本書の刊行に至るまで富士山本宮浅間大社には多大な協力をしていただいた。文末ながら記して感謝申し上げる次第である。

<文献>

尾野善裕1994「生焼け山茶碗と土師器皿－山茶碗生産地域におけるロクロの成形土師器皿生産－」

『考古学フォーラム』4

韭山町教育委員会2002『史跡北条氏邸跡発掘調査報告Ⅰ－御所之内遺跡第13次発掘調査報告－』

富士宮市教育委員会2003『浅間大社遺跡Ⅱ』

若林淳之1971「激動する二世紀－南北朝の動乱から戦国へ－」『富士宮市史』上巻 富士宮市

---

## むすびに

---

この度刊行された富士宮市文化財調査報告書第33集『富士宮市の遺跡Ⅲ』は、市教育委員会が実施したワラビ平遺跡第1・2次発掘調査、塙本古墳第2次発掘調査、浅間大社遺跡第5次発掘調査の各成果を収録した。

ワラビ平遺跡の発掘調査は、五領ヶ台式土器と鷹島・船元1式土器や北裏C1式の東海及び関西地方系の土器、それに堀之内式土器が主体的に調査区の傾斜する谷部を中心にクロボク層から栗色土層にかけて分布している状況を確認できた。これにより富士山南麓北部地域に位置する当遺跡やその周辺における縄文時代中期初頭と縄文時代後期前葉の2期を画期とする縄文文化の盛衰をみることができた。それは縄文時代の富士宮の人たちが営む生活の背景に必ず富士山があり、それに育まれた自然の恩恵を受けて発展した時期ばかりでなく、噴火などの災害による影響を受けて衰退した時期もあったであろうということを意味し、富士山と密接な関係にあったことを表現していると捉えることもできる。また、本遺跡は市内などの周辺地域において広い範囲の縄文時代遺跡で比較的少ない出土数としてその分布が認識されていた五領ヶ台式期の土器の出土に特化している傾向にあることが、本遺跡の特徴のひとつとして挙げられる。

塙本古墳第2次発掘調査は、平成16年(2002)に塙本古墳の墳丘に対して実施された第1次発掘調査の結果を経て、その調査区より南側の傾斜地において古墳の規模や形態を把握することを目的とした。発掘調査において出土した古墳時代前期の土器は、南部谷戸遺跡や月の輪下遺跡から出土するものと同型式のものが含まれ、両遺跡と古墳の関連性について注目される。また、墳丘の分析によって從来の規模よりも大型の墳墓である可能性が示されたことからも、塙本古墳が意味するものとして、市内大岩に占地する丸ヶ谷戸遺跡の前方後方形周溝墓に埋葬された人物に匹敵するような政治権力をもった首長の存在と体系化が確立される階層の下に営まれるムラといった古墳時代社会の一端を窺い知ることができ、古墳出現期の富士宮の在り方を如実に物語る遺跡であると考え、今後も周辺地域を含めた詳細な調査が必要であると思われる。

浅間大社遺跡の発掘調査は平成6年(1994)の第1次発掘調査から今回で5度目の発掘調査となり、これまでにも本遺跡は平安時代や中世から近世の資料が数多く発見されてきたが、今回は中世のなかでも12世紀後半から13世紀の鎌倉時代の土師器皿や青磁碗の出土が顕著であった。遺構はこれらの遺物を共伴する土坑や集石、土師器皿片の集積が確認されている。浅間大社遺跡とその東隣にある大宮城跡は富士大宮司家が在地統治者として城主に君臨した16世紀半ばまで祭政にまつわる空間的な共有関係に在り、今回の出土遺物の年代は過去の発掘調査等の成果から大宮司家が領主的な勢力を誇っていたと推測される時期に当たるに過ぎないが、今回の調査区に対しても大宮司家の祭政を行なう空間域としての利用を想定できるものとなった。

以上のように、各々の遺跡の発掘調査を通じて数々の発見等があり、また新たな成果を挙げることができた。これらの成果が今後の調査研究や教育資料として幅広く活かされることに期待して本書の結びとしたい。

## 報告書抄録

ふりがな	ふじのみやしのいせき 3
書名	富士宮市の遺跡Ⅲ
副書名	
卷次	
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書
シリーズ番号	第33集
編著者名	渡井英裕、小野田晶
編集機関	富士宮市教育委員会
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150番地 Tel. 0544(22)1187
発行年月日	西暦2005年3月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東經 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
わらび平 遺跡	ふじのみやし 富士宮市 ひらやまち 村山字 ひらのうち 堀ノ内 1556番1 他	22207	市番号 189  県番号 富士宮市 —	36° 14' 57"	138° 39' 25"	第1次 20021004 ↓ 20021220  第2次 20030506 ↓ 20030630	第1次 800  第2次 180	市道改良 舗装工事
塚本古墳	ふじのみやし 富士宮市 のつかほん 野中東町 399番地先	22207	市番号 39  県番号 富士宮市 83	36° 12' 47"	138° 36' 44"	20031204 ↓ 20040114	100	市道改良 舗装工事
浅間大社 遺跡	ふじのみやし 富士宮市 みやま 宮町1403 番	22207	市番号 76  県番号 富士宮市 30	36° 13' 38"	138° 36' 32"	20041013 ↓ 20041102	85	防火水槽 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ワラビ平 遺跡	散布地	縄文時代	土坑、溝状遺構、 小ピット群、 焼土跡、埋没谷	土器、石器	
塚本古墳	古墳	古墳時代		土器	
浅間大社 遺跡	神社	中世 (鎌倉時代)	土坑、集石、 遺物集積	土師器皿、青磁	

# 写 真 図 版

## ワラビ平遺跡

- 図版1 a. 遺跡遠景 b. 調査区遠景  
図版2 a. 第1次発掘調査区(南側から)  
b. SK2 c. SK3とSK4  
図版3 a. SK8 b. SD2 c. 埋没谷  
図版4 a. 第2群土器(1) b. 第2群土器(2)  
図版5 a. 第3群土器(1) b. 第3群土器(2)  
図版6 a. 第5群土器(1) b. 第5群土器(2)  
図版7 a. 第1群土器 b. 第4群土器  
c. 石器(1) d. 石器(2) e. 石器(3)  
図版8 a. 石器(4) b. 石器(5)

## 塚本古墳

- 図版9 a. 遺跡遠景 b. 遺跡近景  
図版10 a. 調査区(東側から) b. 調査区(西側から)  
c. 墳丘(調査前)  
図版11 a. 墳丘(調査時) b. 墳丘断面(北側から)  
c. 墳丘断面(東側から)  
図版12 a. SB1 b. SB1周辺の状況 c. 出土土器

## 浅間大社遺跡

- 図版13 a. 調査区全景(東側から) b. SK1とSK2  
c. SX1  
図版14 a. 遺物出土状況(1) b. 遺物出土状況(2)  
c. 出土遺物(1) d. 出土遺物(2)



a. 遺跡遠景



b. 調査区遠景



a. 第1次発掘調査区(南側から)



b. SK2



c. SK3とSK4



a. SK8



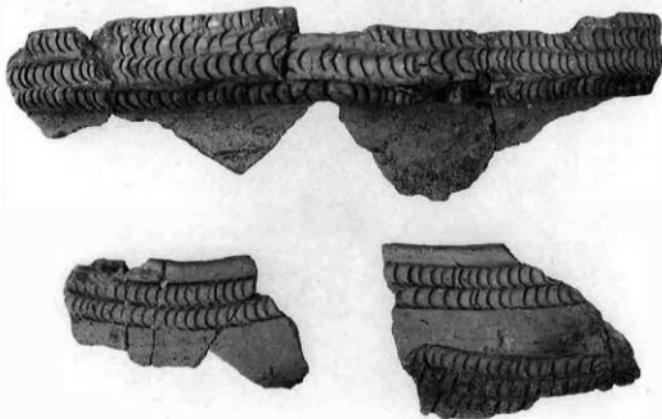
b. SD2



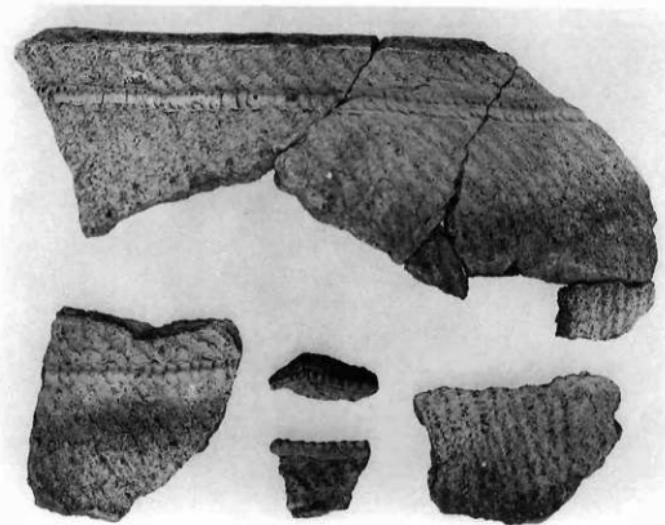
c. 埋没谷



a. 第2群土器(1)



b. 第2群土器(2)



a. 第3群土器(1)



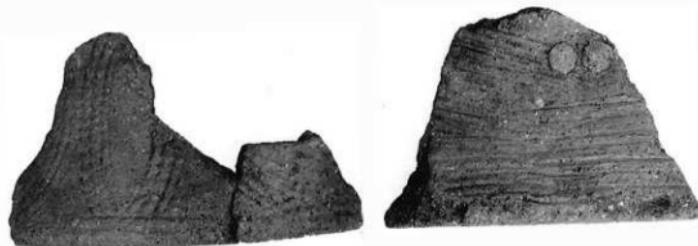
b. 第3群土器(2)



a. 第5群土器(1)



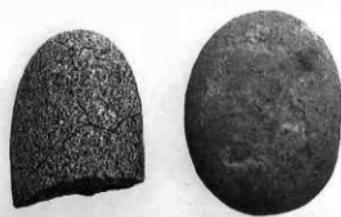
b. 第5群土器(2)



a. 第1群土器



b. 第4群土器



c. 石器(1)



d. 石器(2)



e. 石器(3)



a. 石器(4)



b. 石器(5)



a. 遺跡遠景



b. 遺跡近景



a. 調査区(東側から)



c. 調査区(西側から)



c. 墳丘(調査前)



a. 墳丘(調査時)  
第1次発掘調査より



b. 墳丘断面(北側から)  
第1次発掘調査より



c. 墳丘断面(東側から)  
第1次発掘調査より



a. SB1



b. SB1周辺の状況



c. 出土土器



a. 調査区全景



b. SK1とSK2



c. SX1



a. 遺物出土状況(1)



b. 遺物出土状況(2)



c. 出土遺物(1)



d. 出土遺物(2)

富士宮市文化財調査報告書 第33集

### 富士宮の遺跡Ⅲ

ワラビ平遺跡

塙本古墳第2次

浅間大社遺跡第5次

発掘調査報告書

平成17年3月25日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150

(0544) 22-1111㈹

印刷 三扇美術印刷株式会社

〒418-0056

富士宮市西町1番15号

(0544) 26-3636㈹